

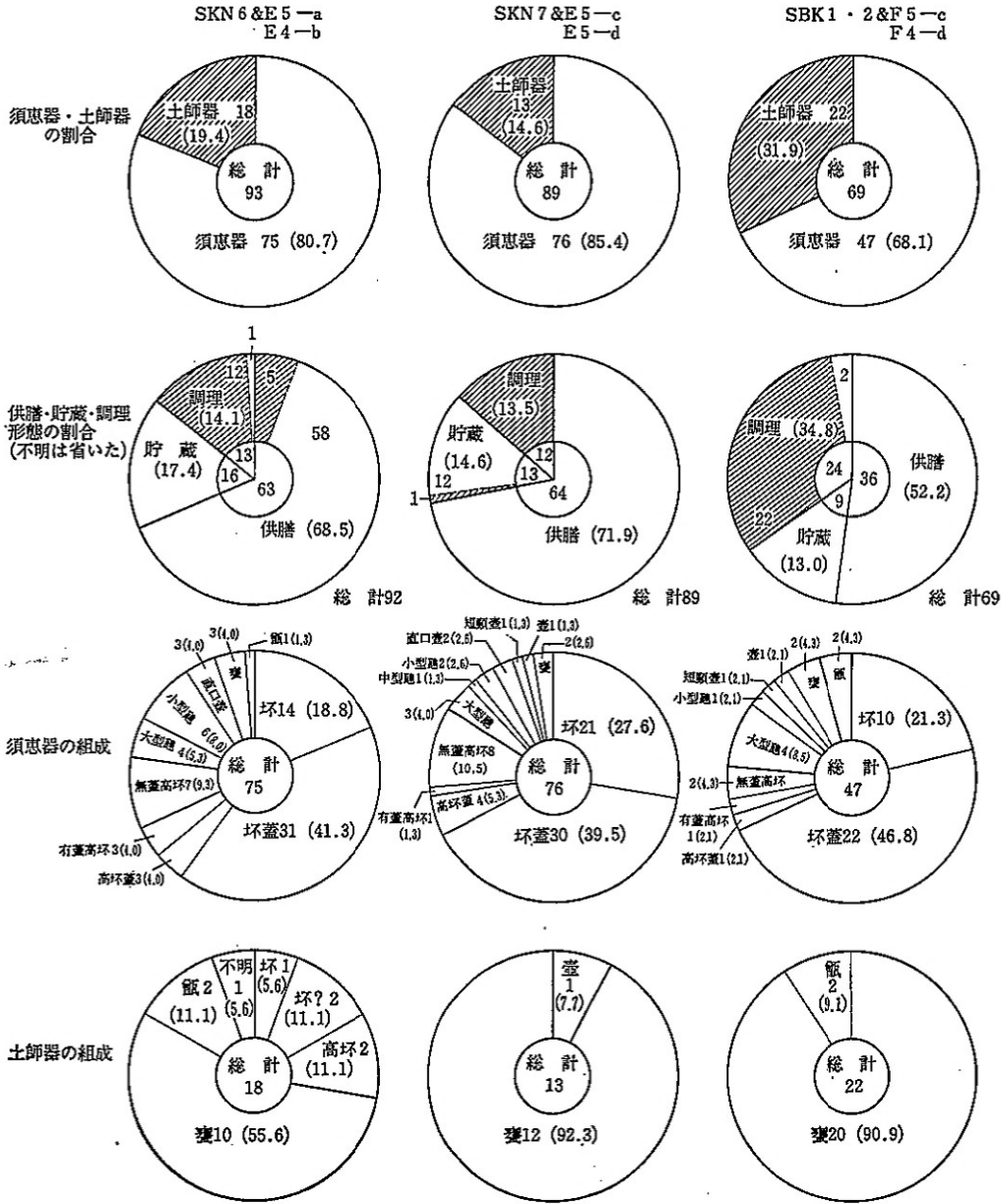
第13表 沖積段丘面出土遺物数量表

遺構層位	器種 類	須惠器 總計	坏					坏 蓋					有蓋高坏			高 坏 蓋						無蓋高坏										
			計	A	B	C	D	E	不明他	計	A	B	C	D	E	不明他	計	A	B	不明他	計	A	B	C	D	E	F	不明他	計	A	B	不明他
SBK1.2		5	1			1		1						1	0				0										0			
SKN6		4	2			1		1	1				1		0				0										0			
SKN7		30	6		3	3		13		2	6	1	4	0				3				1					2	3	3			
茶黑色粘質土		246	62	1	8	19	18	16	94	18	5	27	2	42	9	9		17		1	5	1	1	4	5	19	16	1	2			
黑色粘質土		4	1				1	0						0				0									1		1			
SDN 2 I期		11	2		2			3		1	1			1	1	1		0									0					
SDN 2 II期		27	6			3	3	4		1		3		2	2			1						1			2	2				
計		327	80	0	1	13	27	22	17	116	0	22	6	37	3	48	12	11	0	21	0	1	5	2	1	5	7	25	21	1	3	

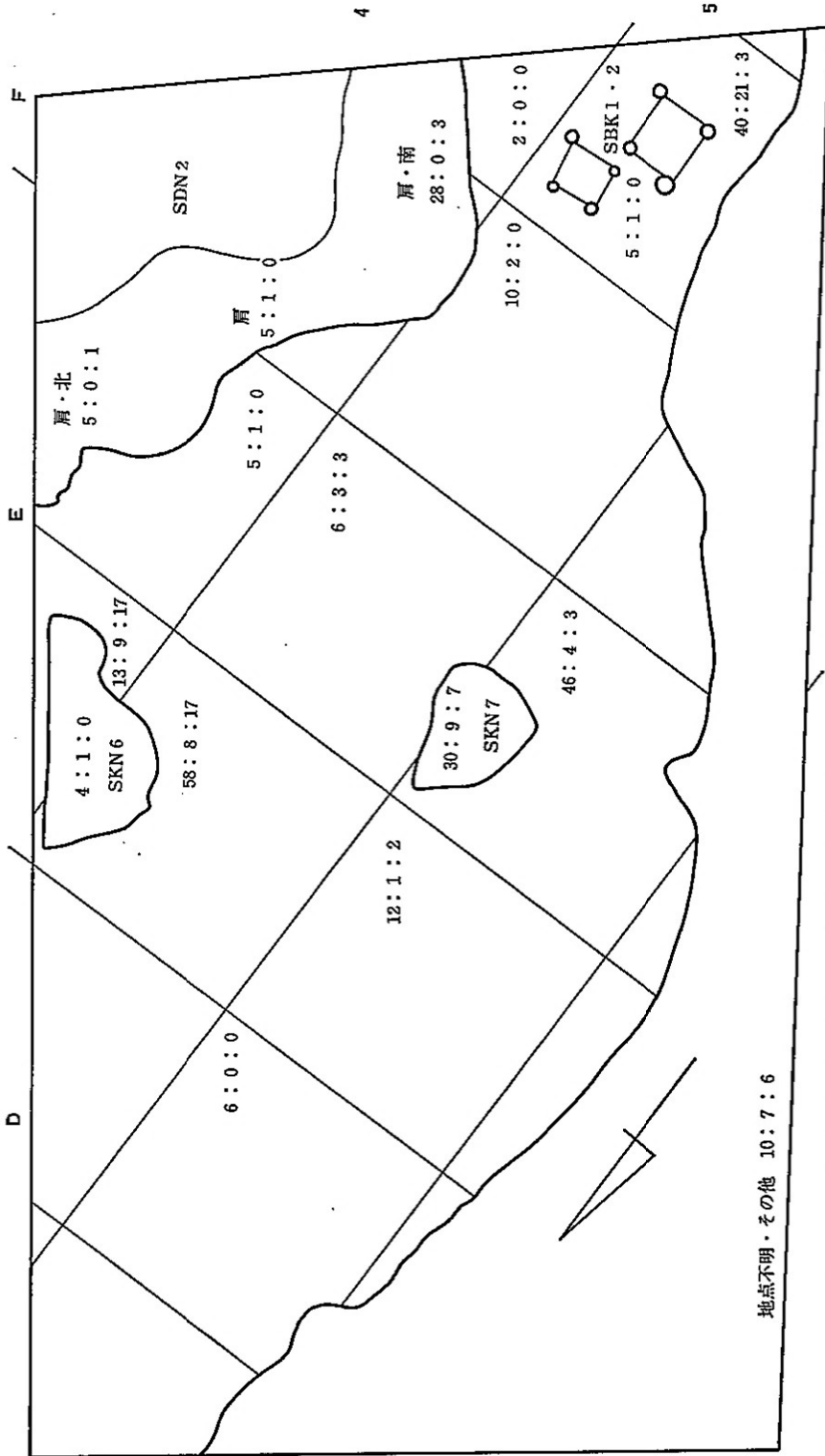
遺構層位	器種 類	直口壺					甌					短頸壺							甌			播		器台		不明						
		計	A	B	C	D	不明他	計	A	B	C	D	不明他	計	A	B	C	D	E	F	G	不明他	計	A	B		鉢	計	A	B		
SBK1.2		0					0	1	1	大			0	0											1	1	1	0			0	
SKN6		0					0	1			1	小	0	0											0		0	0			0	
SKN7		0					1	2	1	大	1	大	1	1							1				0		0	0			0	
茶黑色粘質土		8	3		1	1	3	0	22	13	大	6	2	3	10	1	2	1	1		4	1	4	1	3	0	0	0			0	
黑色粘質土		0					0	2	1	小	1	大	0	0											0		0	0			0	
SDN 2 I期		0					1	1		1	大			1	1						1				0		0	1	1		0	
SDN 2 II期		1	1				1	1		1	大			1	5	1		1		1	1	1	0		0	2	1	1	1	1		
計		9	3	1	1	1	3	3	30	1	18	7	1	3	4	17	2	2	2	1	0	1	7	2	5	2	3	1	3	2	1	1

遺構層位	器種 類	土師器 總計	甌													甌			高 杯				坏		不明						
			計	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	不明他	計	A	B	不明他	計	A	B		C	不明他	計	A		
SBK1.2		1	1														1	0		0	0							0		0	
SKN6		1	1		1												0			0	0							0		0	
SKN7		9	9		2		3		1						2		1	0			0	0						0		0	
茶黑色粘質土		58	40	1	7	1	6		4	1	2		1	3	2	12	4	3	1		2	6	1	1		4	3	1	2	3	
黑色粘質土		5	3														3	1		1	0	1				1	0			0	
SDN 2 I期		4	4			1						3								0								0		0	
SDN 2 II期		0	0																	0		0						0		0	
計		78	58	1	10	1	10	0	5	1	2	3	1	0	5	2	17	5	3	1	1	2	7	1	1	0	5	3	1	2	3

第14表 古墳時代遺構・上面包含層出土遺物の組成とその割合

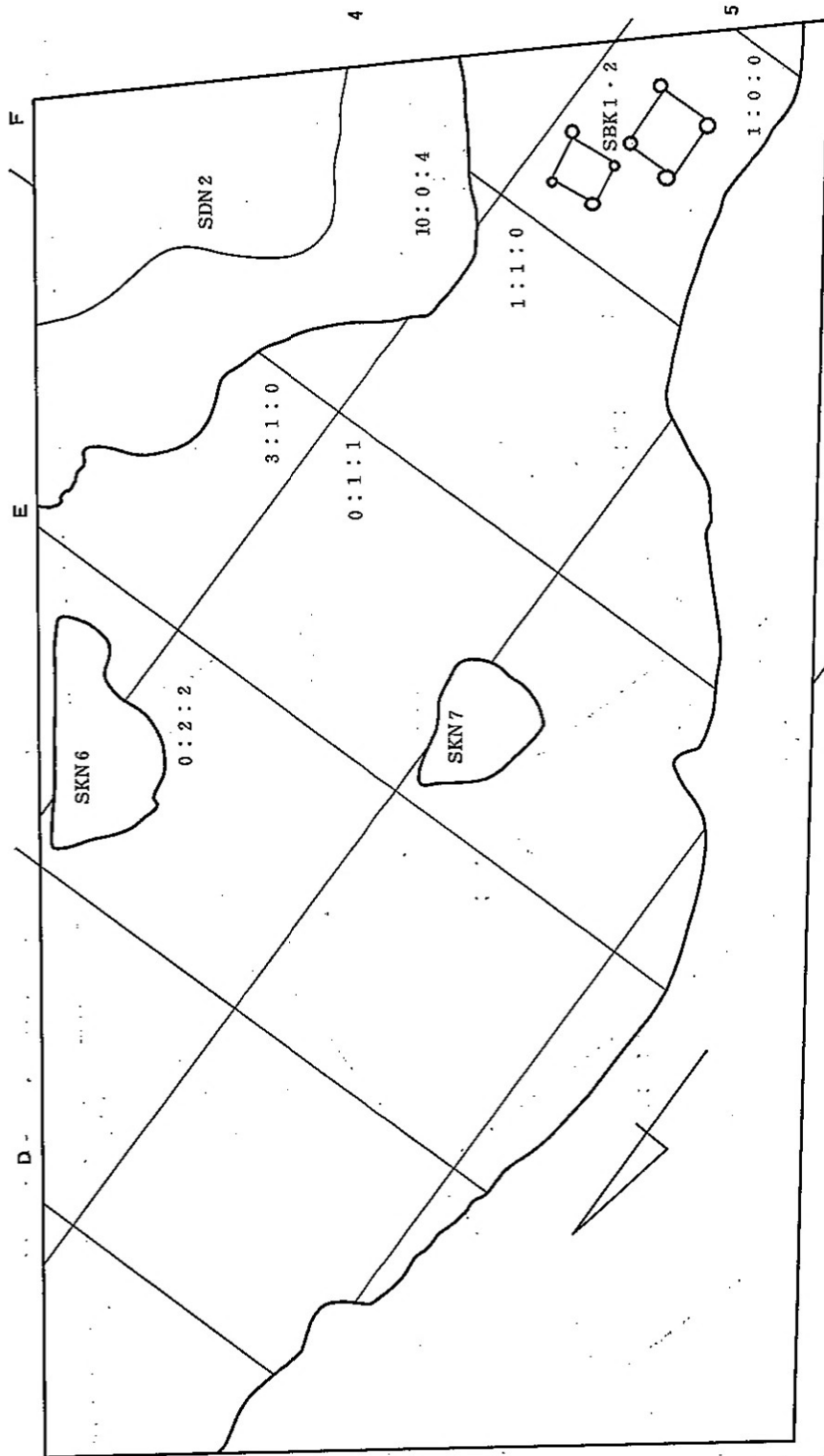


数字：個体数
 ()内：%…小数点以下2桁目を四捨五入
 上半の斜線部分は土師器の割合



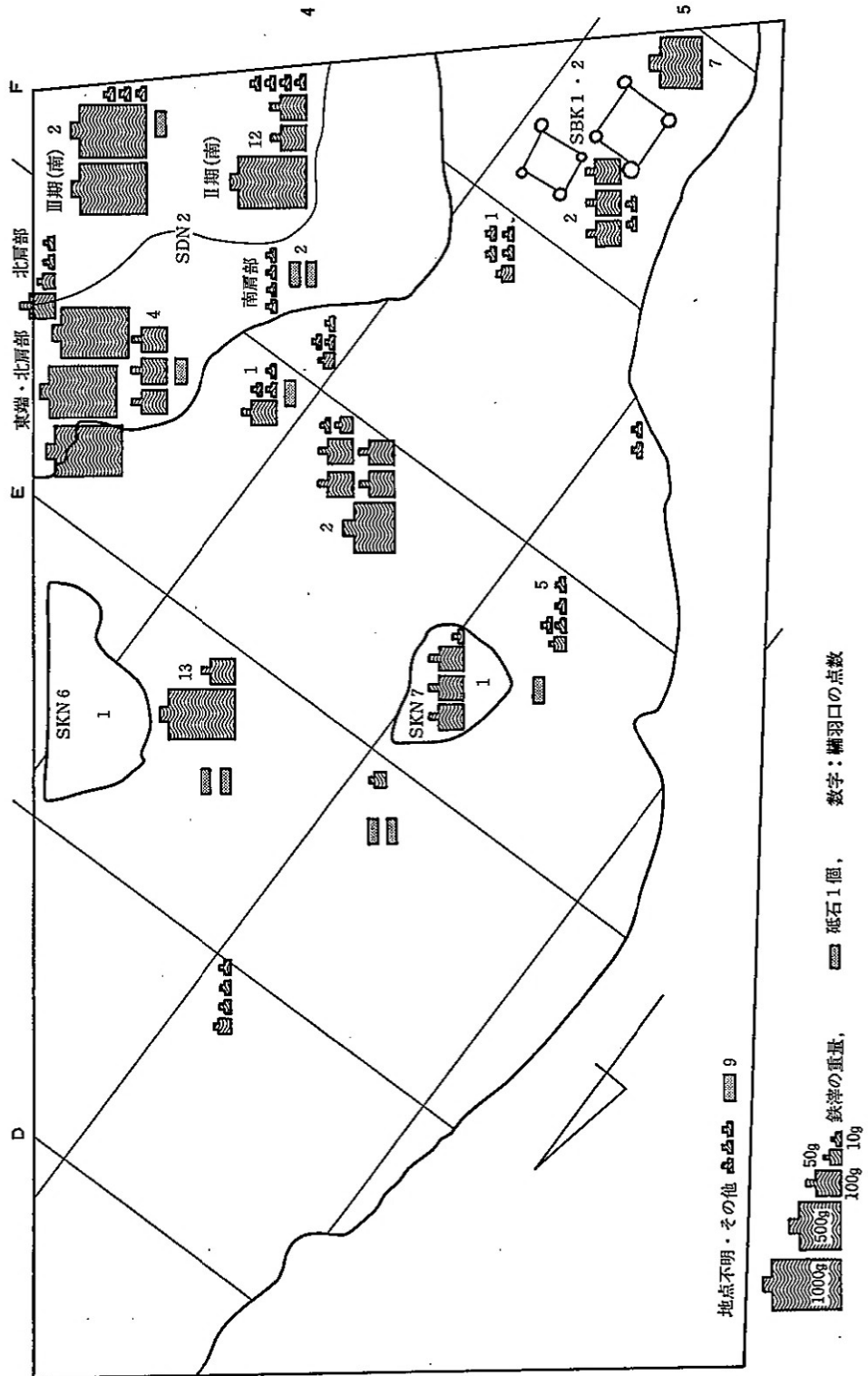
※左から順に須恵器：土師器：製塩土器の点数を示す。総計285：68：62

第31図 古墳時代遺構及び遺構上面包含層（茶黒色粘質土層）の地点別遺物出土状況

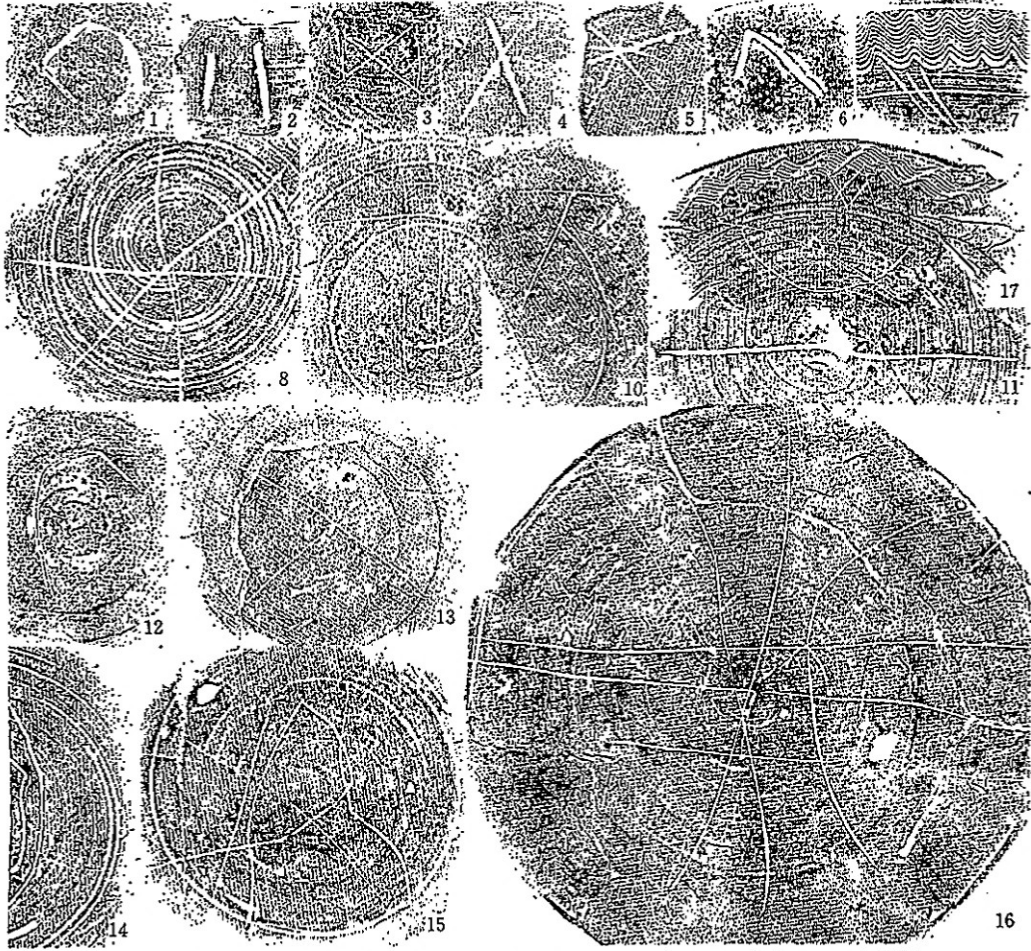


※左から順に須恵器：土師器：製塩土器の点数を示す。総計15：5：7

第32図 古墳時代包含層下層（黒色粘質土層）の地点別遺物出土状況



第33図 古墳時代の地点別鉄滓・磁石・櫛羽口出土状況



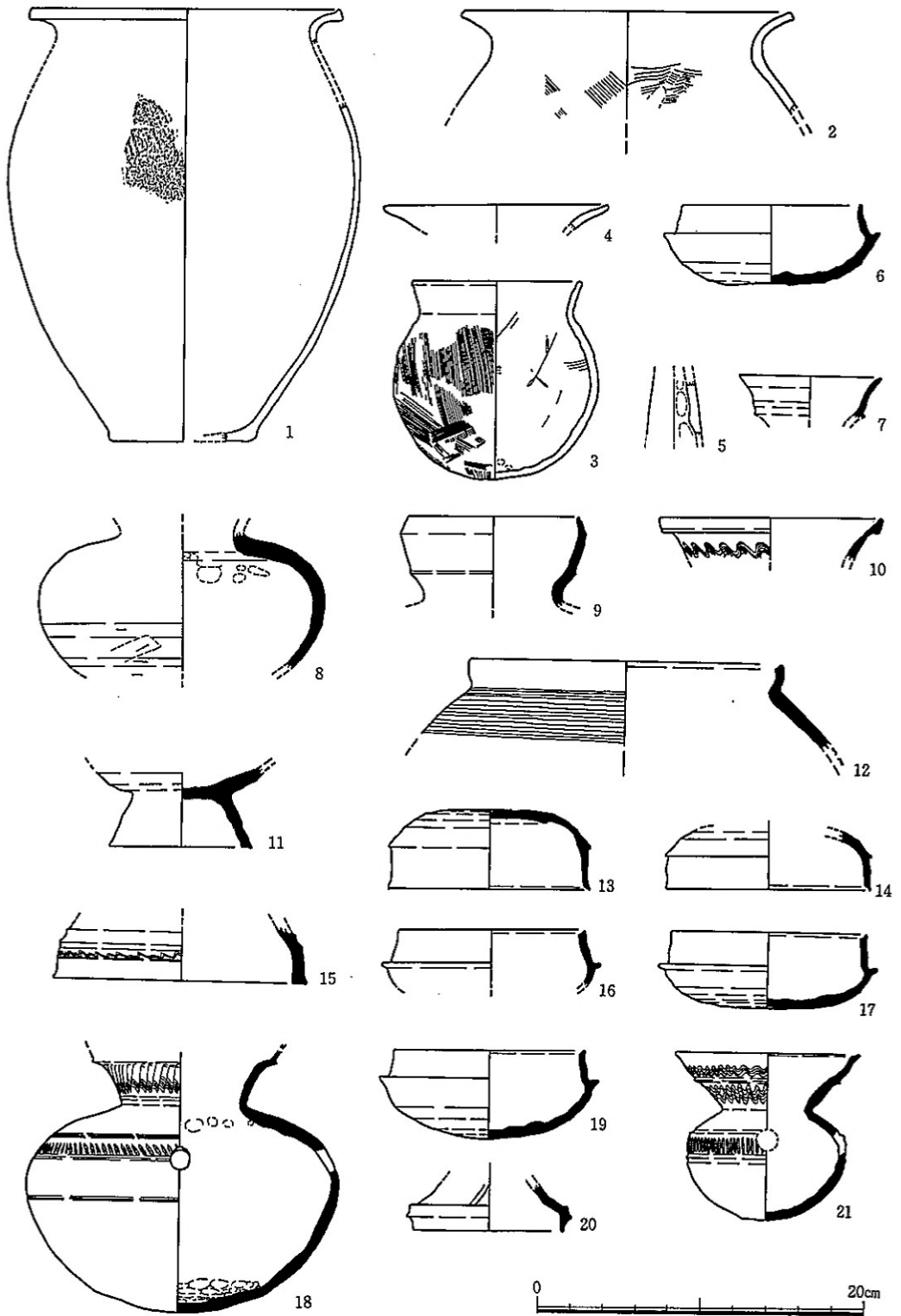
1・8～12・14～16 環(1のみ内面、他・外面)、2・17 高環(2・脚部外面、17・環部外面)、
3 甕底部外面、4～7 斐(5のみ内面、他・外面)、13 環蓋外面

第34図 須恵器ヘラ記号拓影図

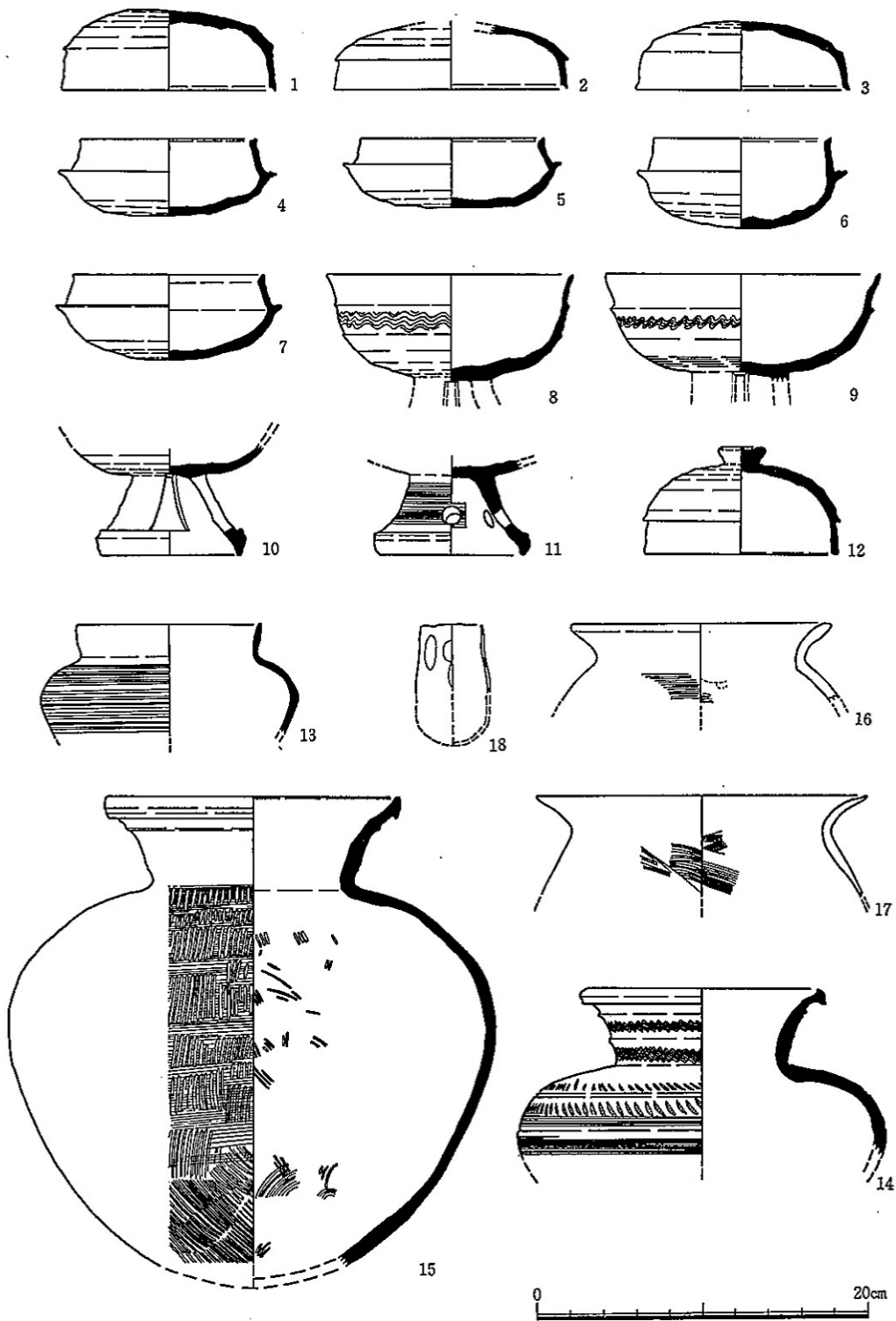


1 環蓋外面叩き目、2・4 環蓋内面当て具痕、3 環内面当て具痕、5 坯底部外面静止ヘラ削り痕、
6 短頸壺底部外面ヘラの当たった痕跡か？

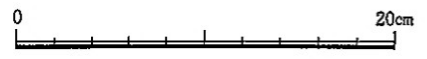
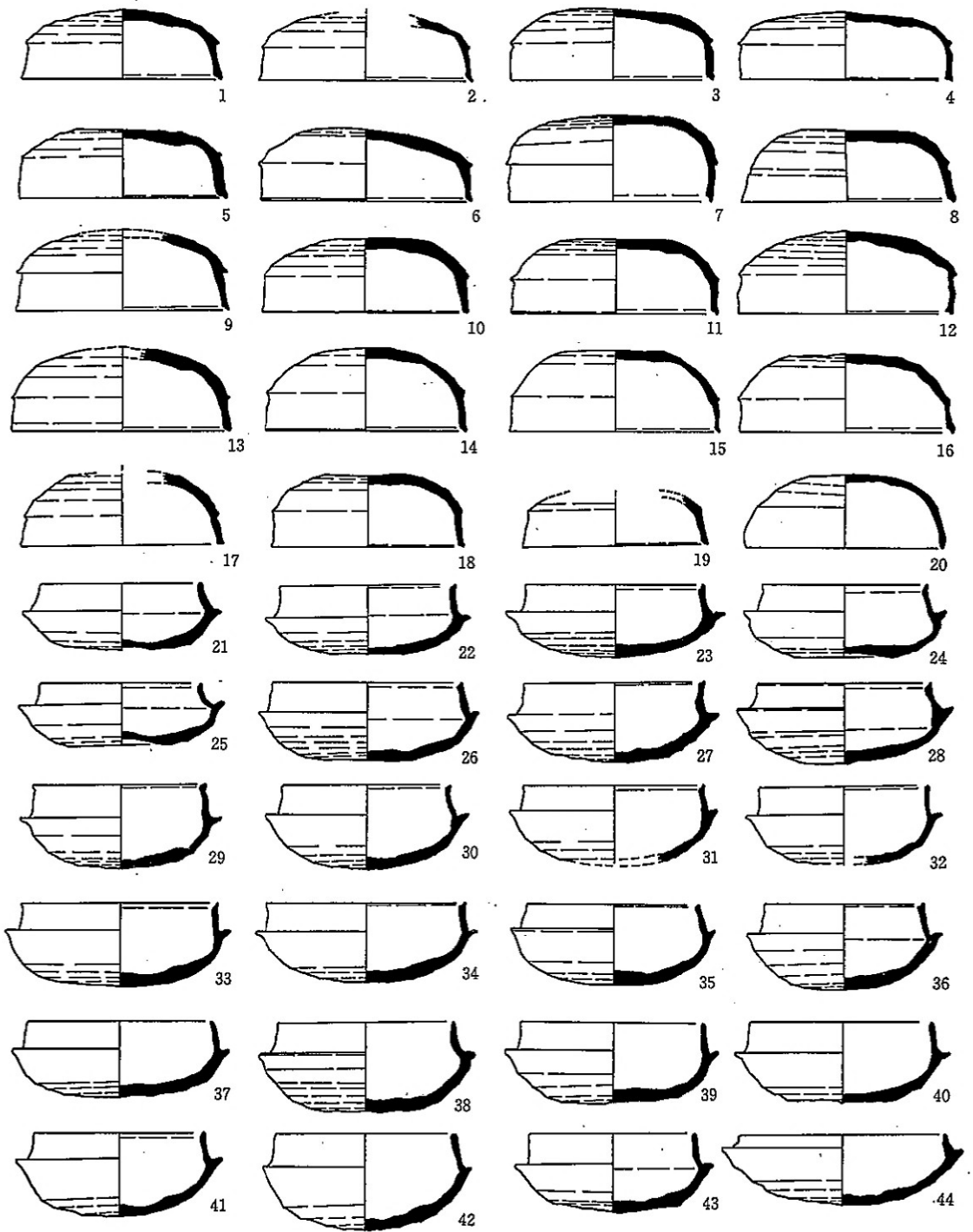
第35図 須恵器叩き目・ヘラの痕跡等拓影図



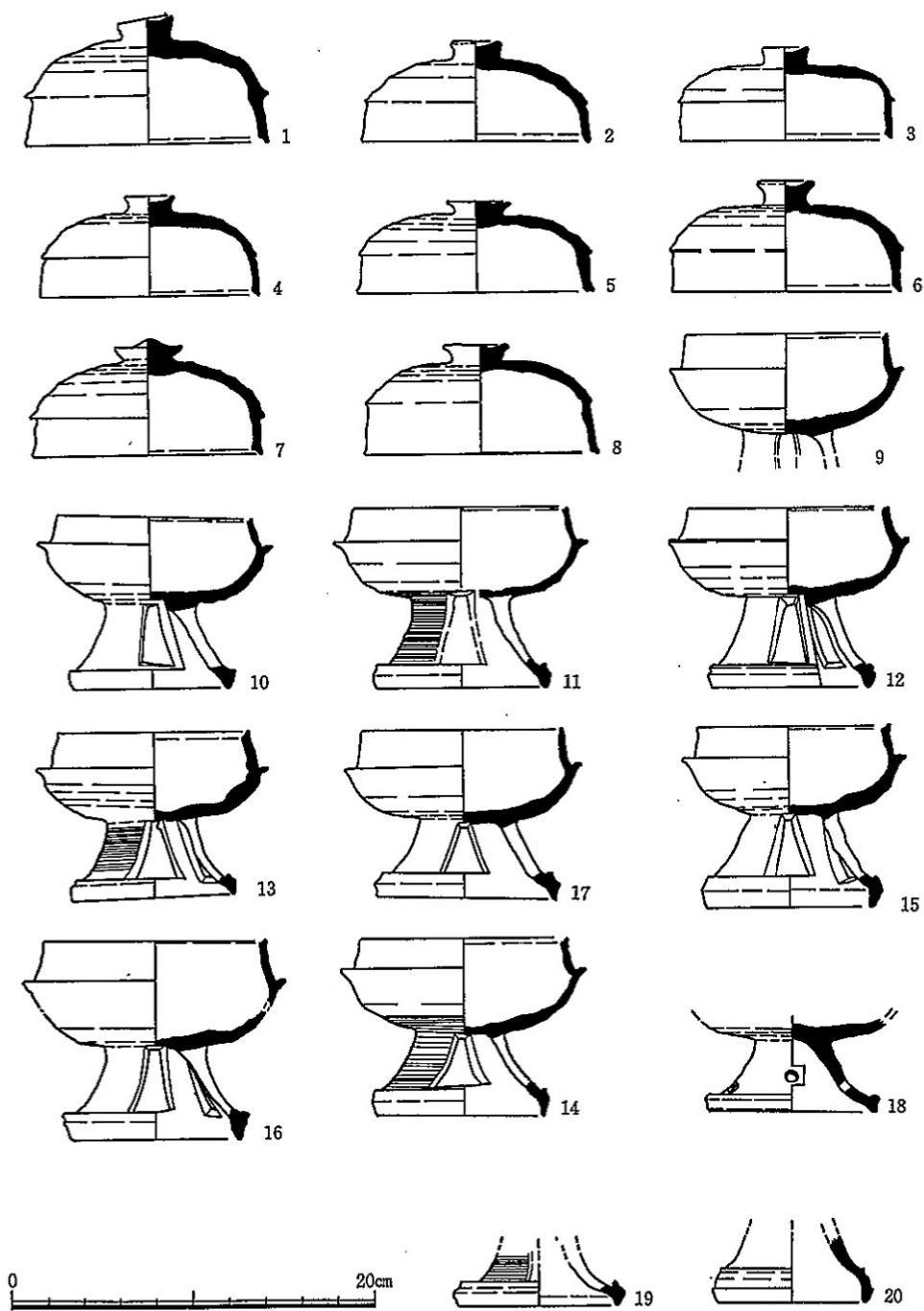
第36図 SBK1・2、SKN6、SDN2 I期、黒色粘質土層、灰茶色粘質土層出土土器



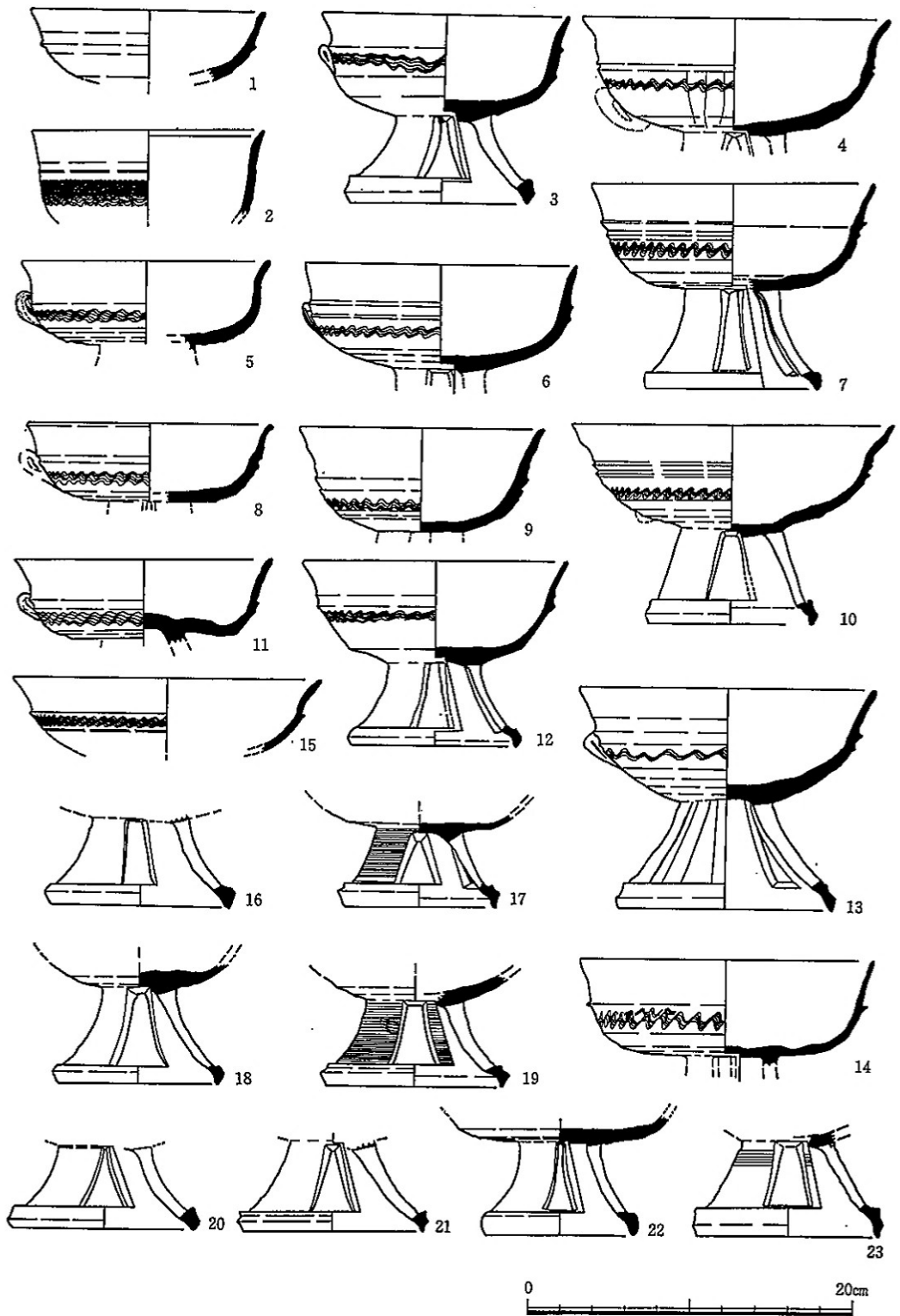
第37图 SKN 7 出土土器



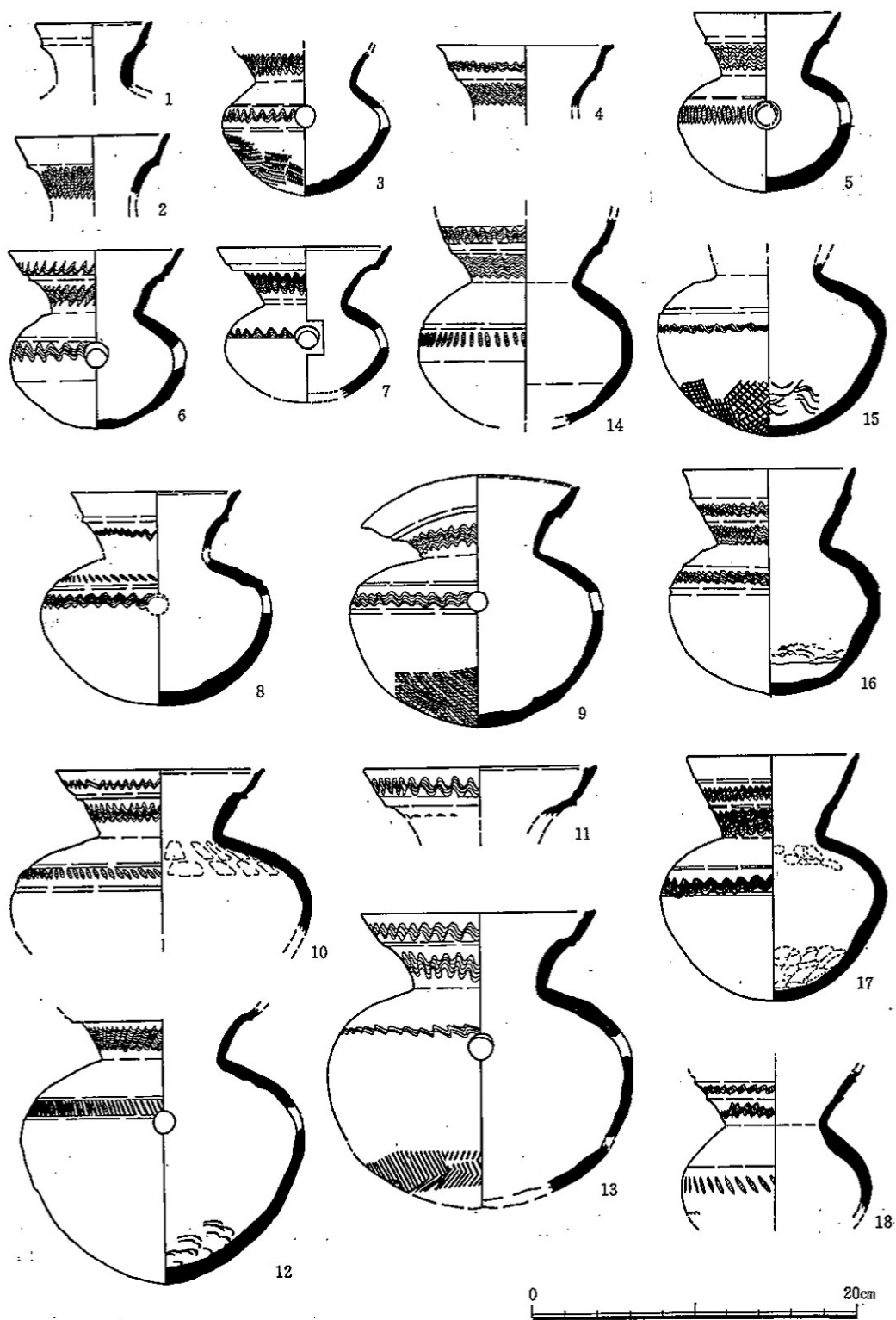
第38圖 茶黑色粘質土層出土須惠器



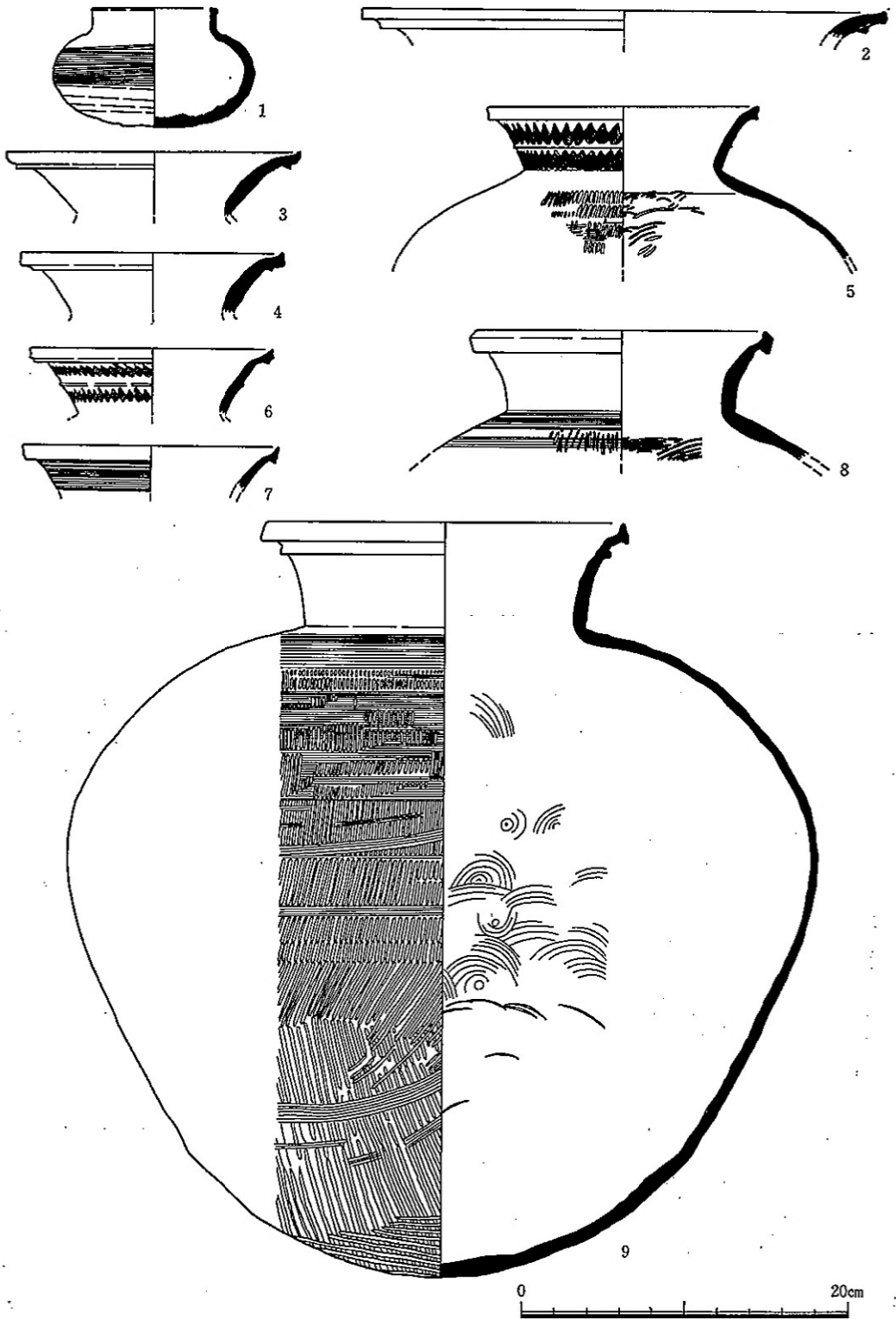
第39图 茶黑色粘質土層出土須惠器



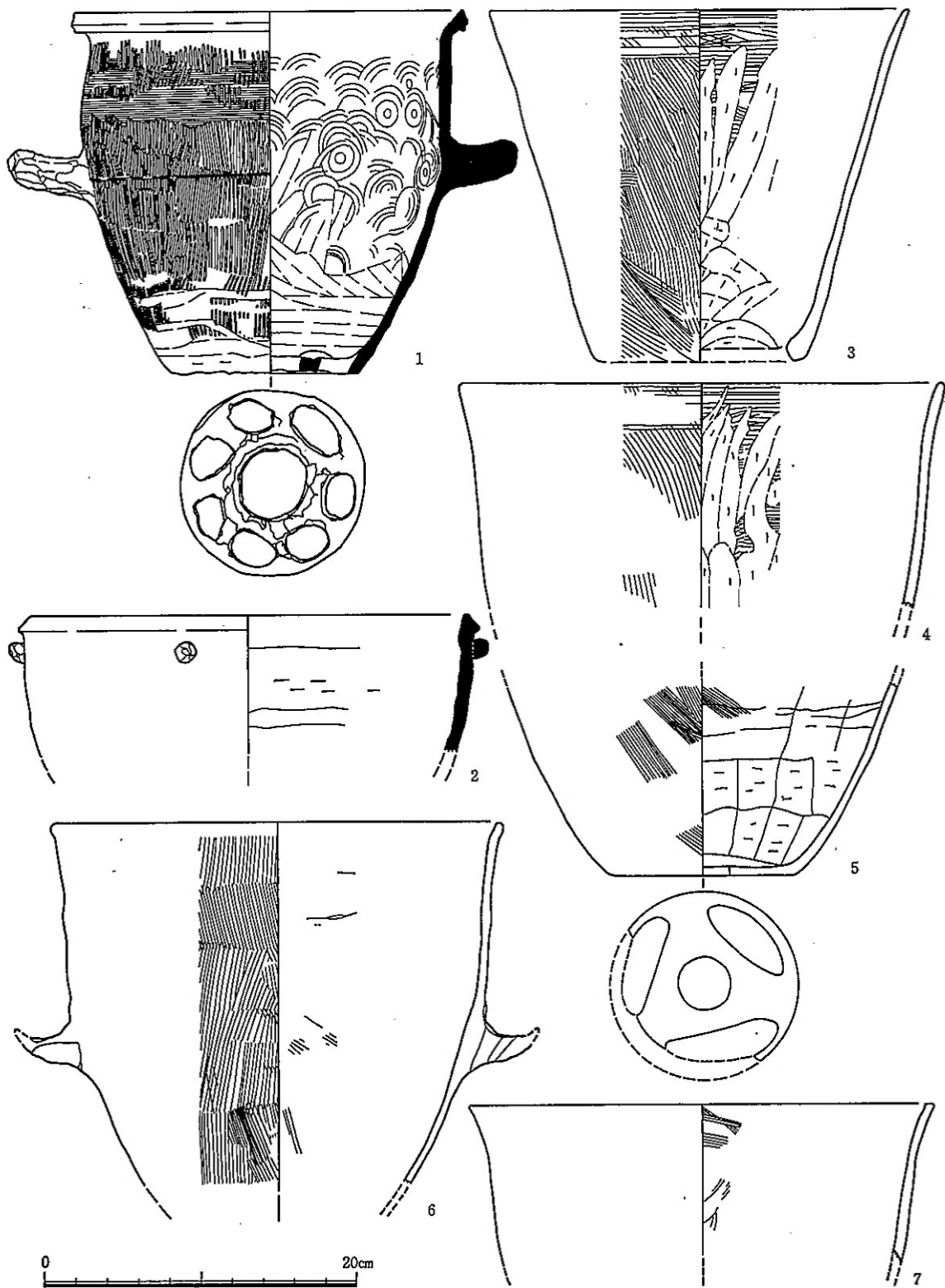
第40圖 茶黑色粘質土層出土須惠器



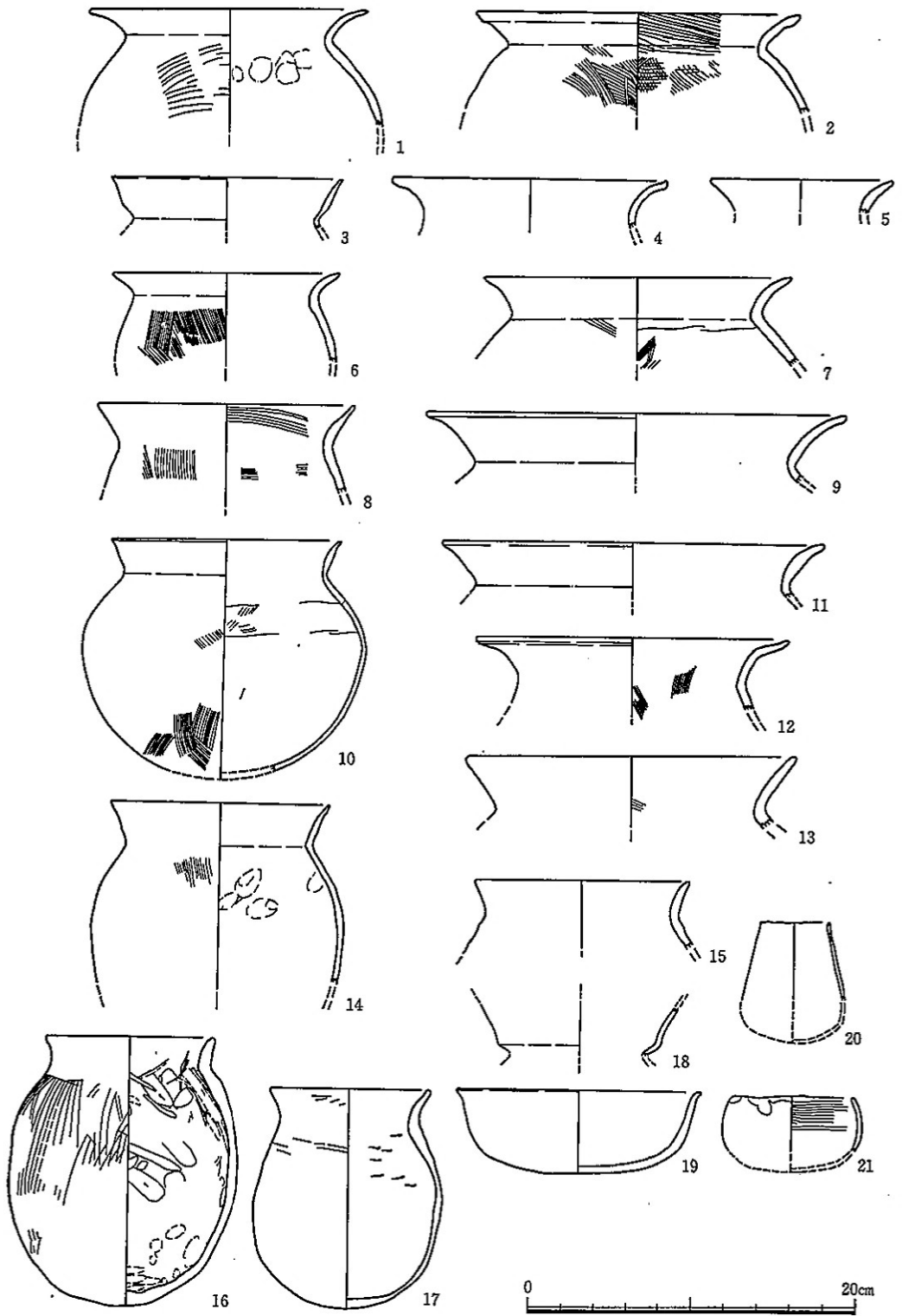
第41図 茶黑色粘質土層出土須恵器



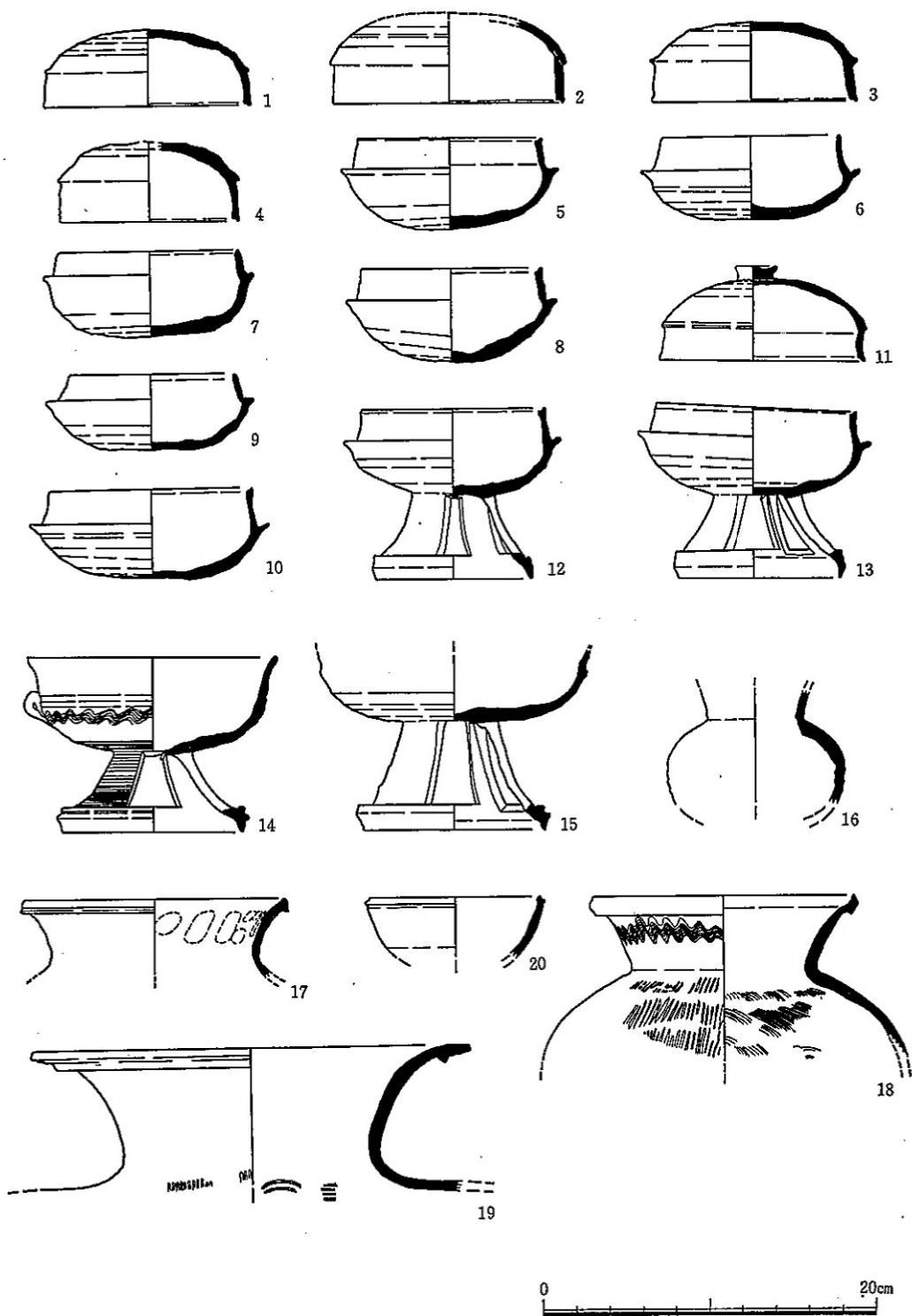
第42図 茶黑色粘質土層出土須恵器



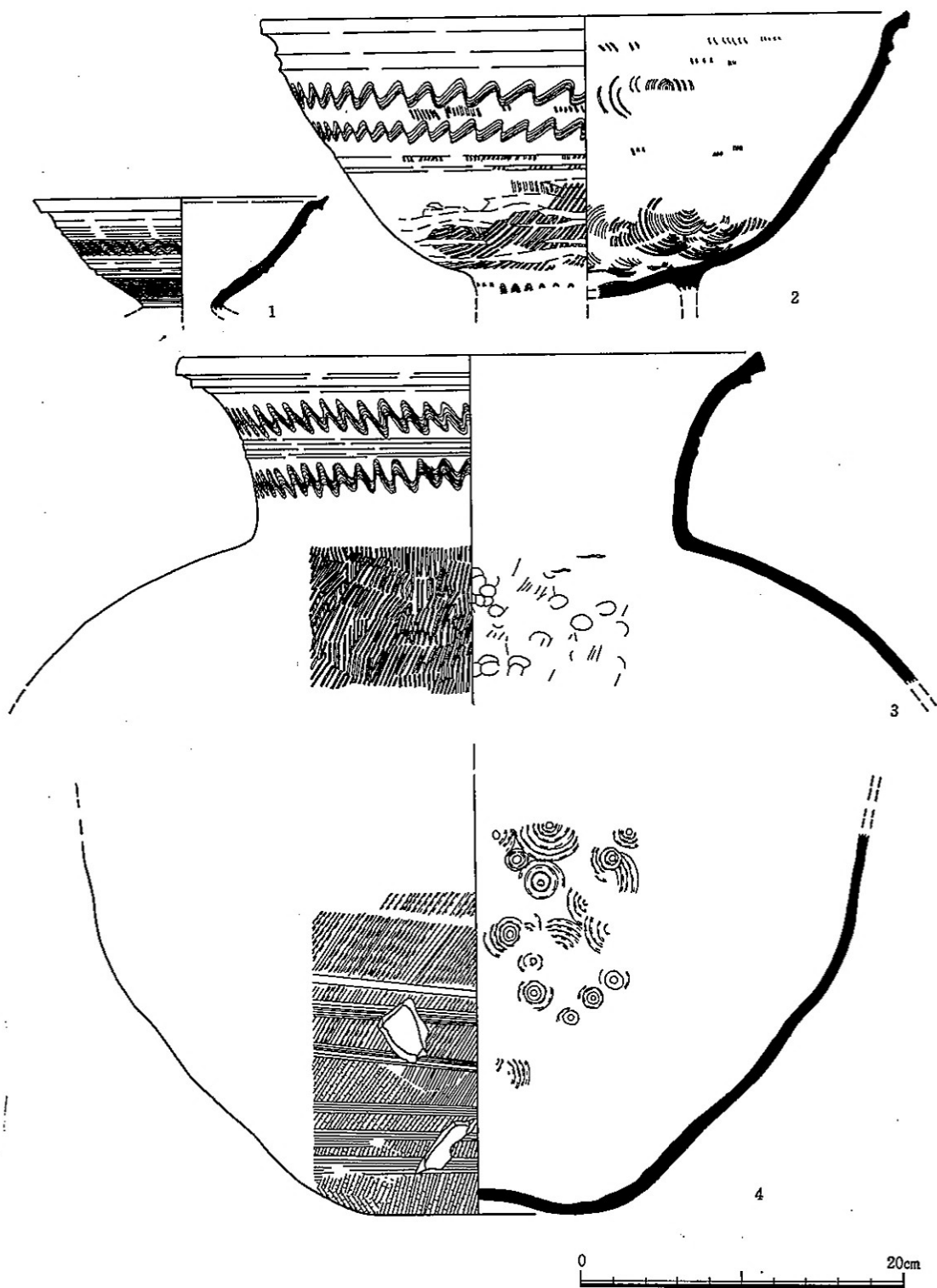
第43图 茶黑色粘質土層出土土器



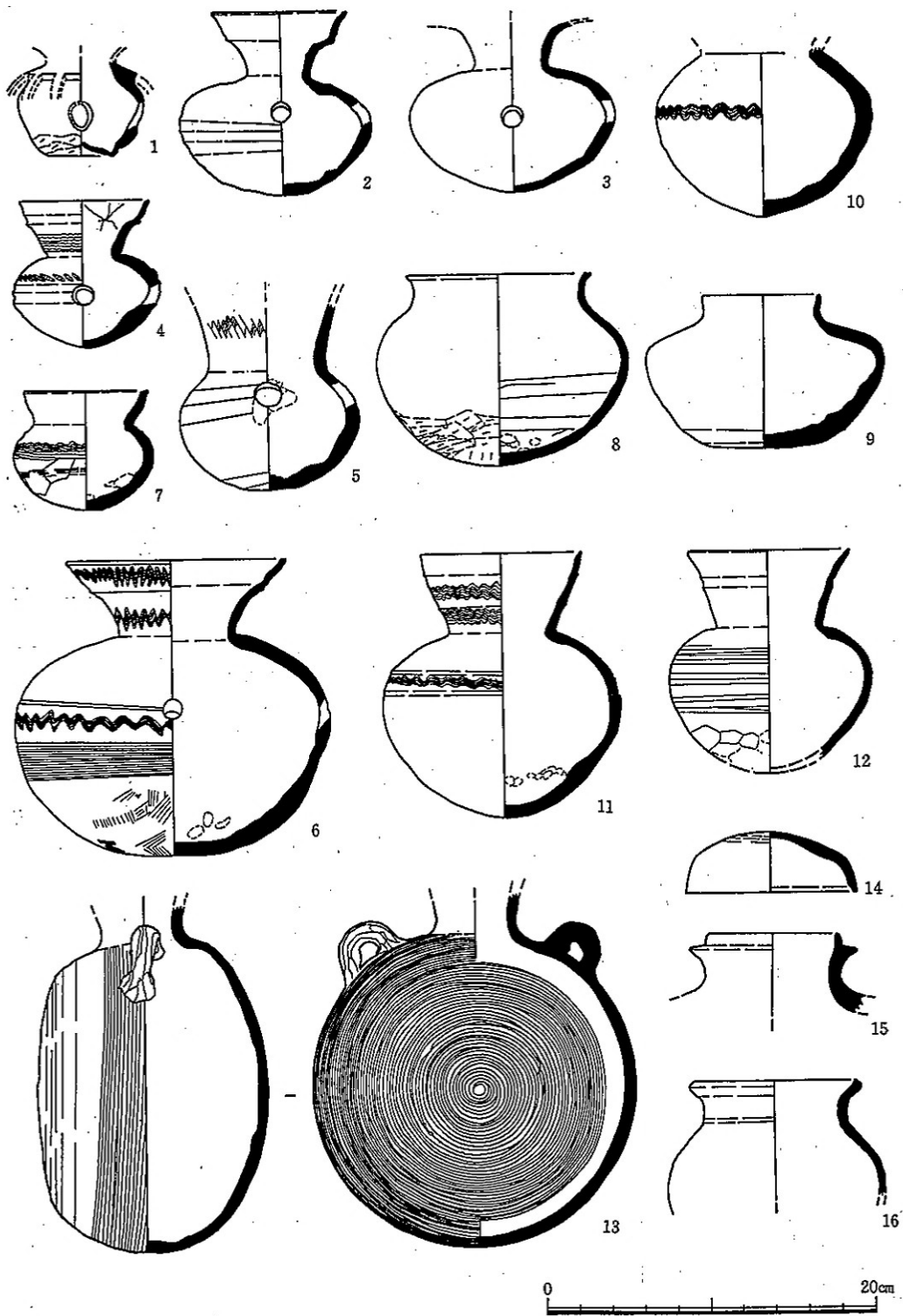
第44圖 茶黑色粘質土層出土土師器



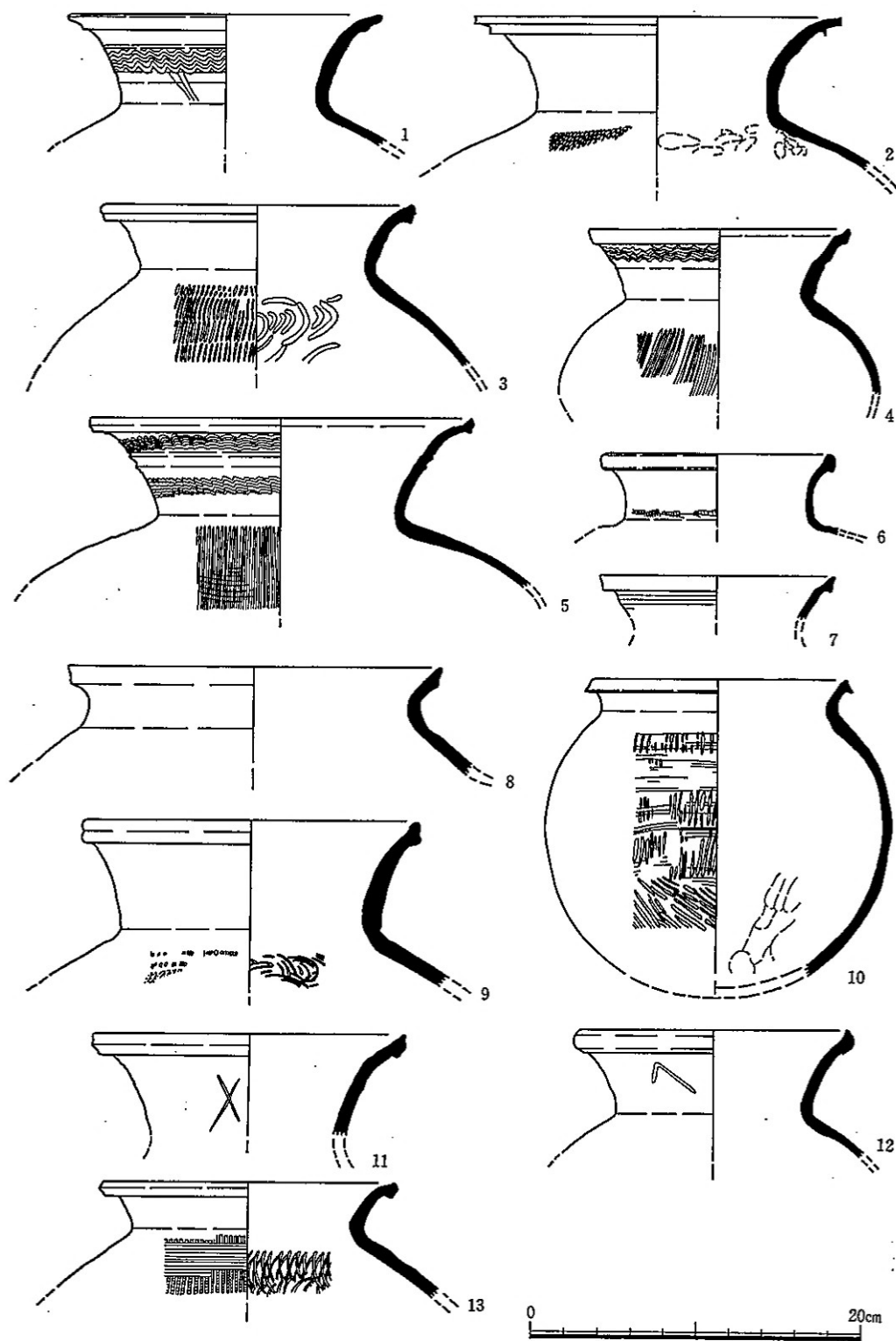
第45图 S D N 2 II期出土須惠器



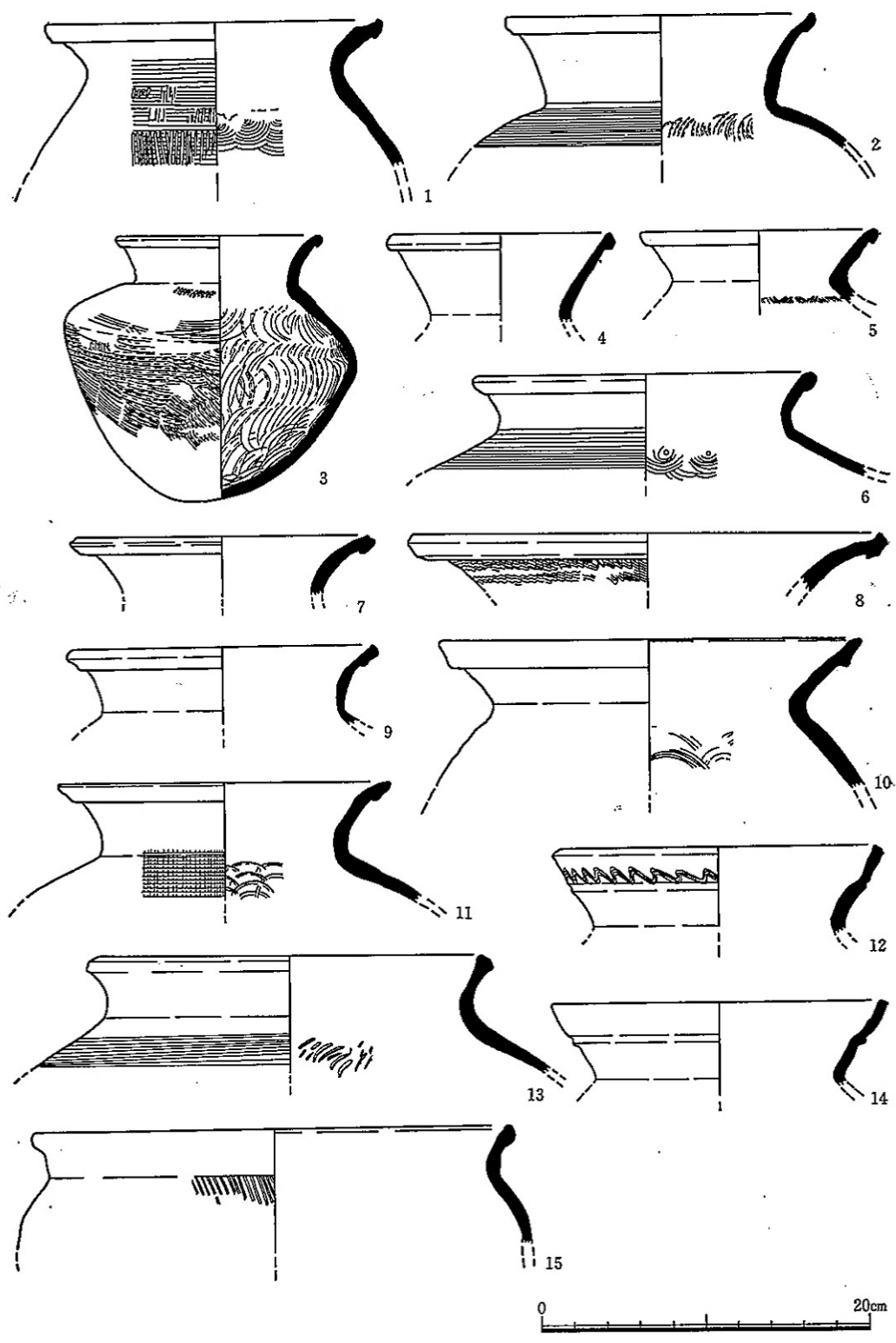
第46図 SDN 2 Ⅱ期出土須恵器



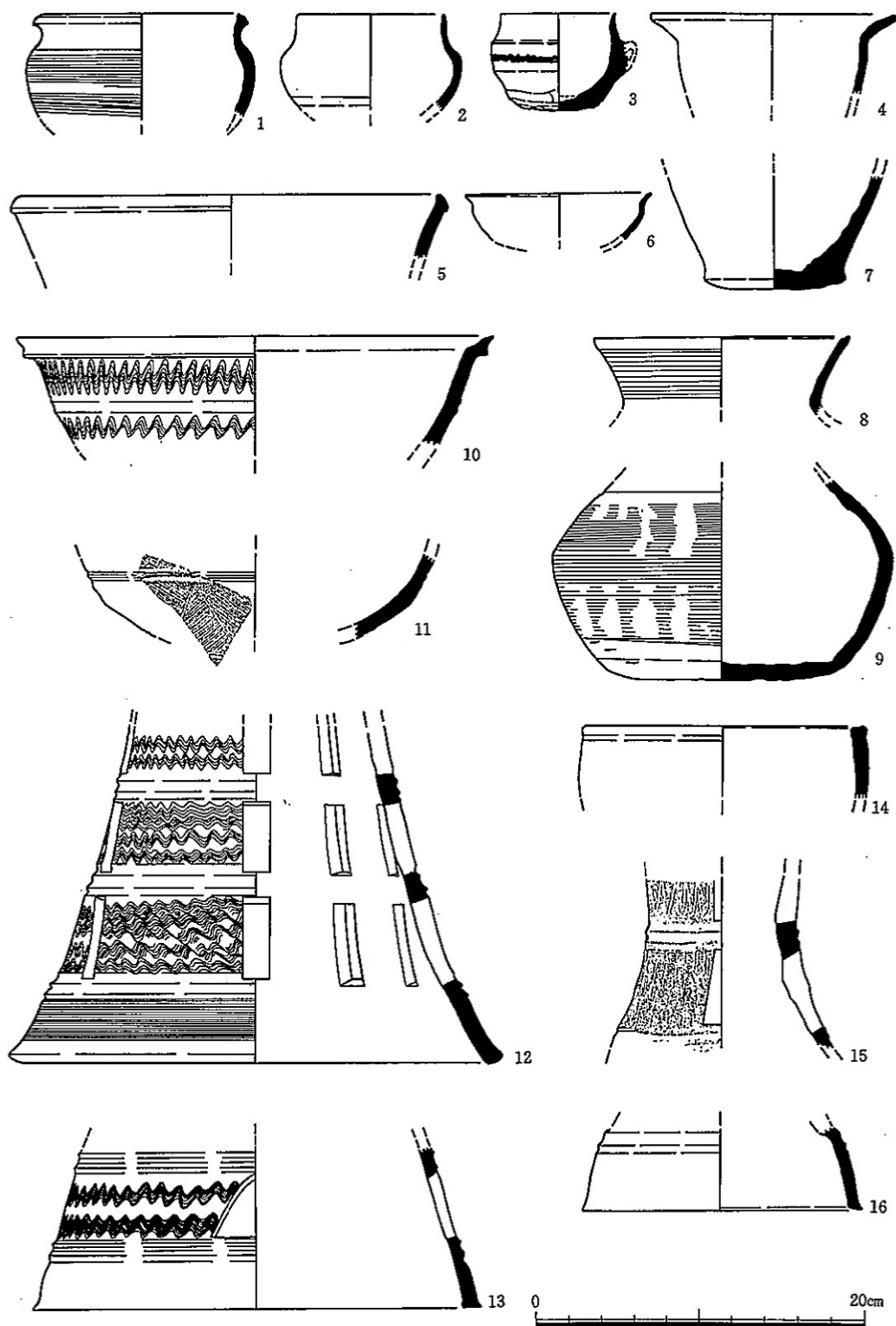
第49图 S D N 2 II · III期出土须惠器



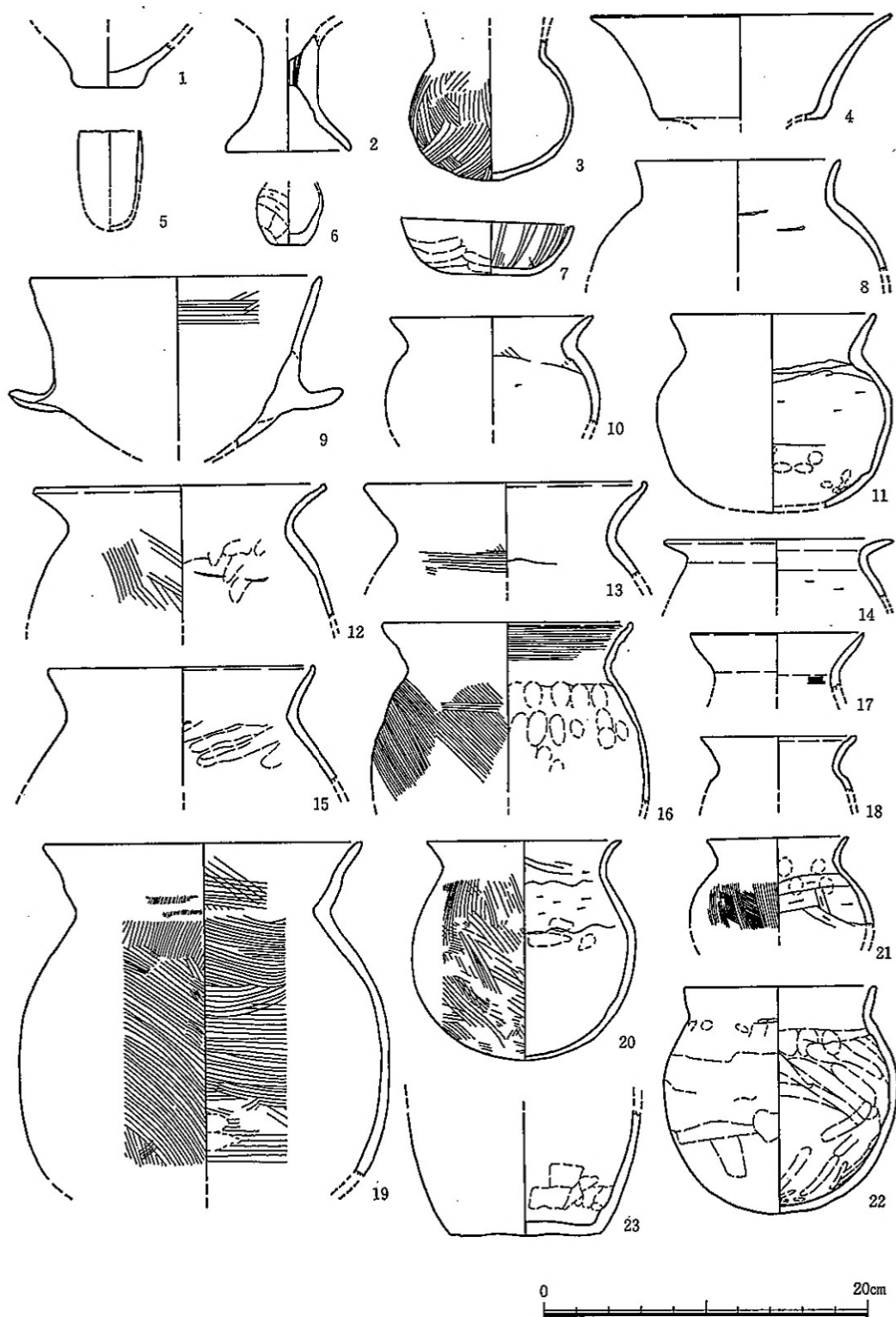
第50図 S D N 2 III期出土須恵器



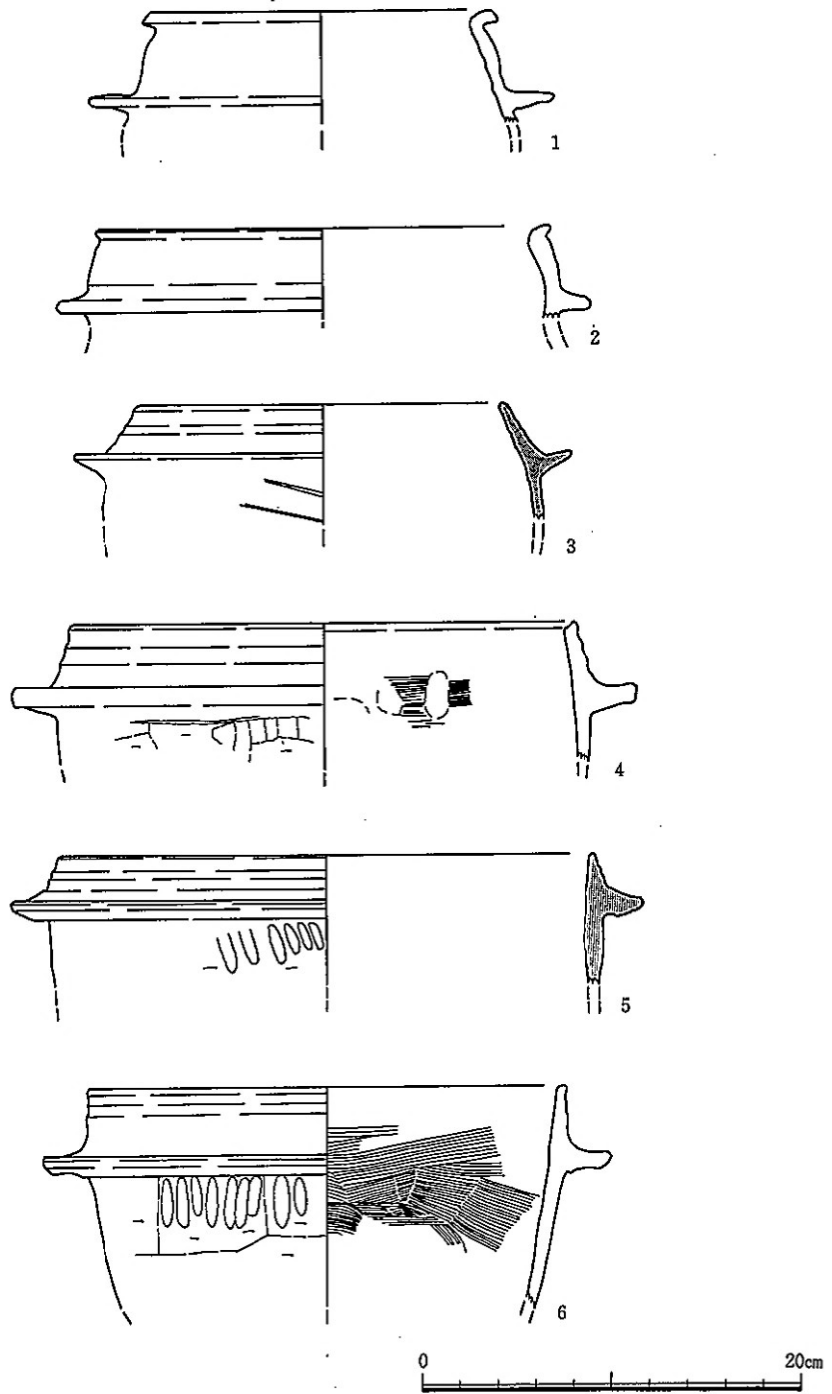
第51图 S D N 2 Ⅲ期出土须惠器



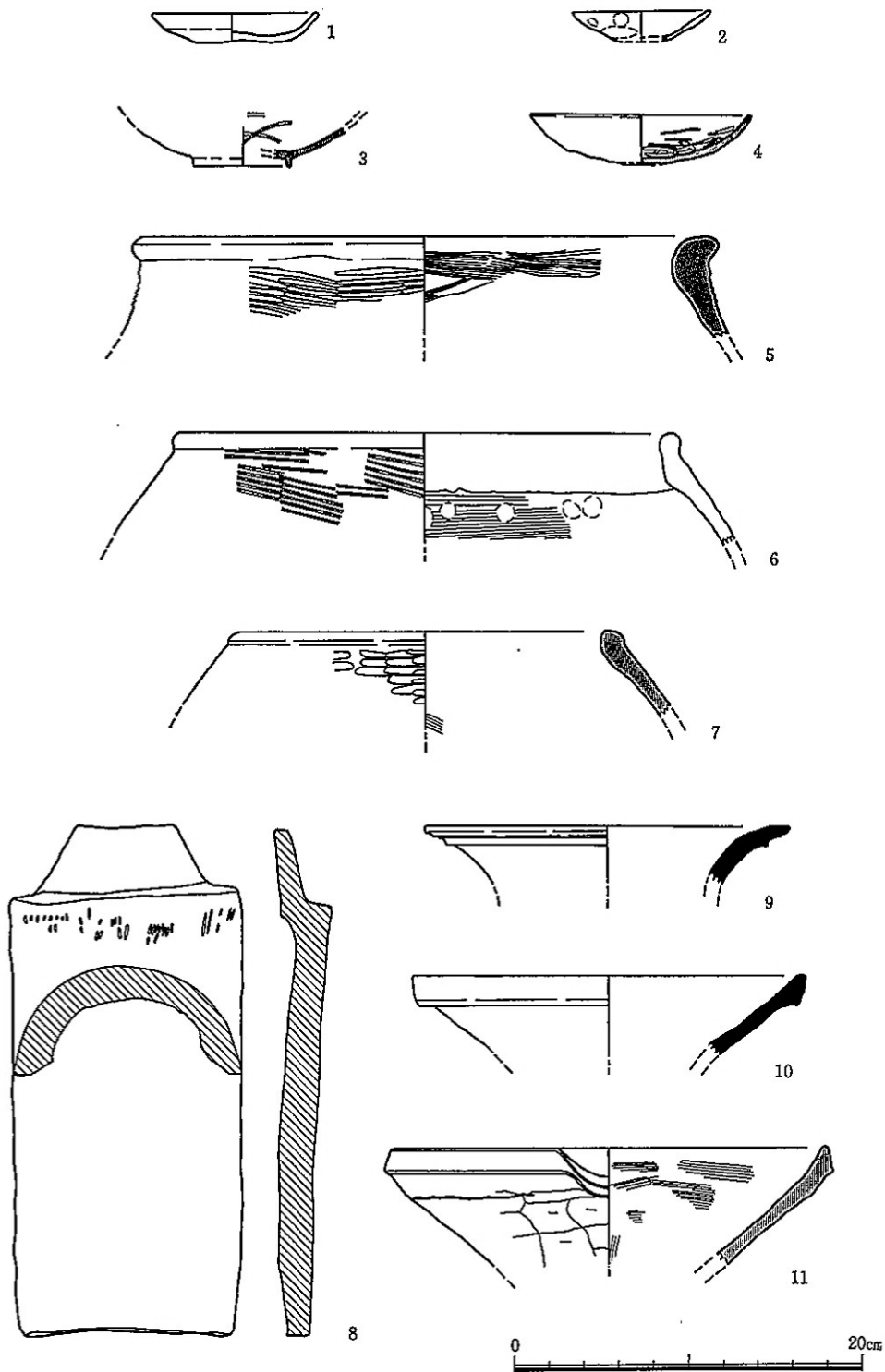
第52図 S D N 2 Ⅲ期出土須恵器



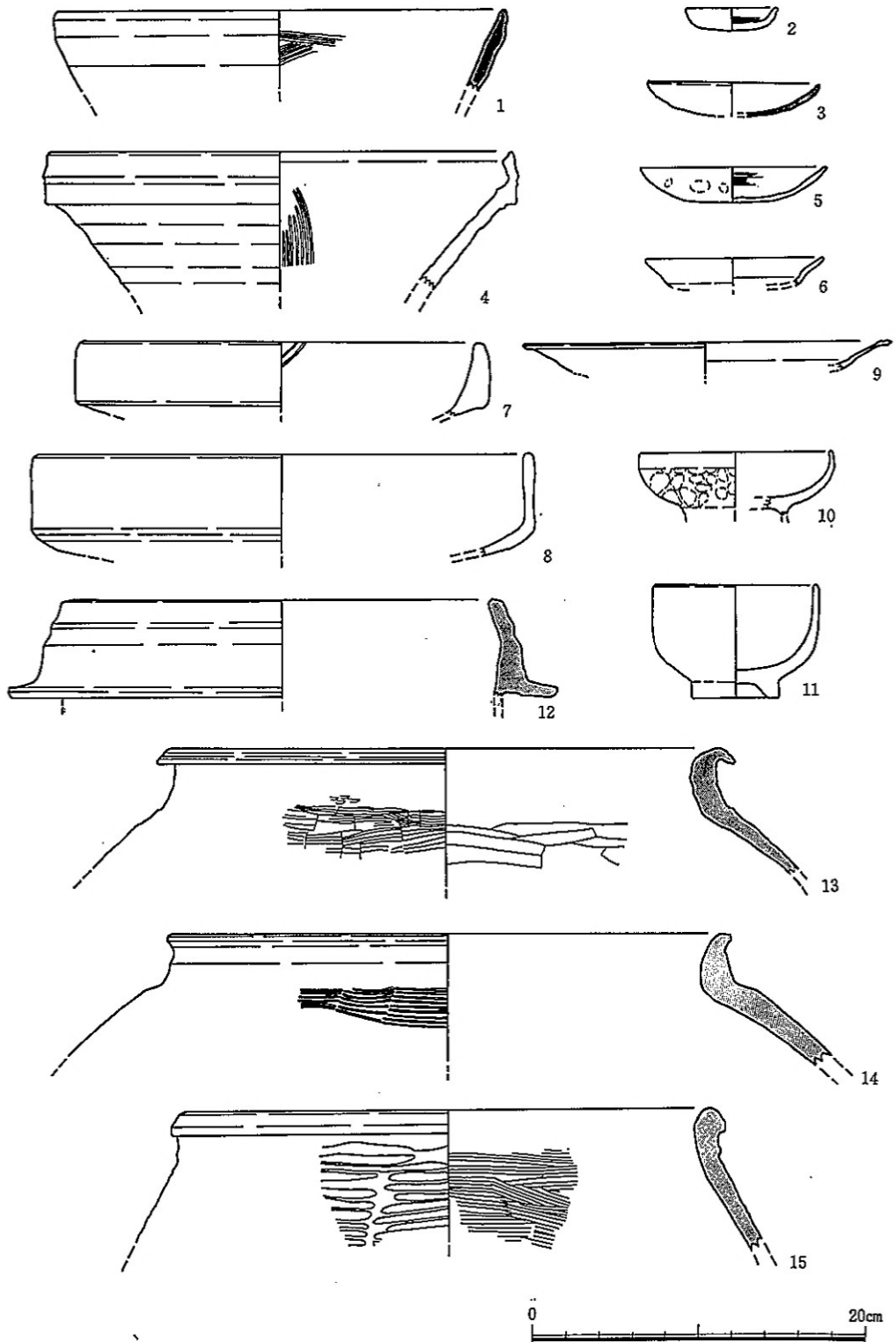
第53图 S D N 2 Ⅲ期出土土器



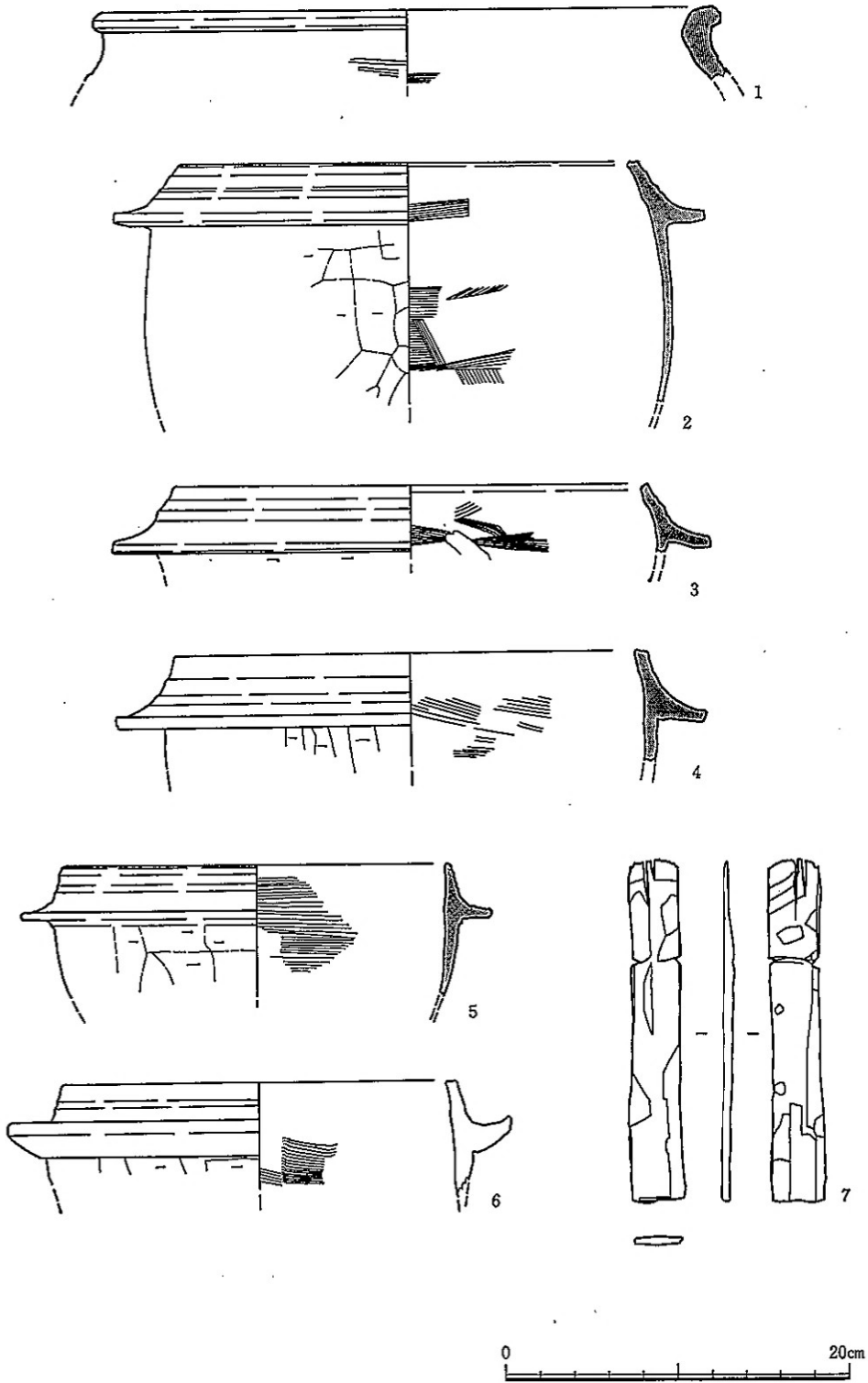
第54図 室町時代洪水跡出土土器



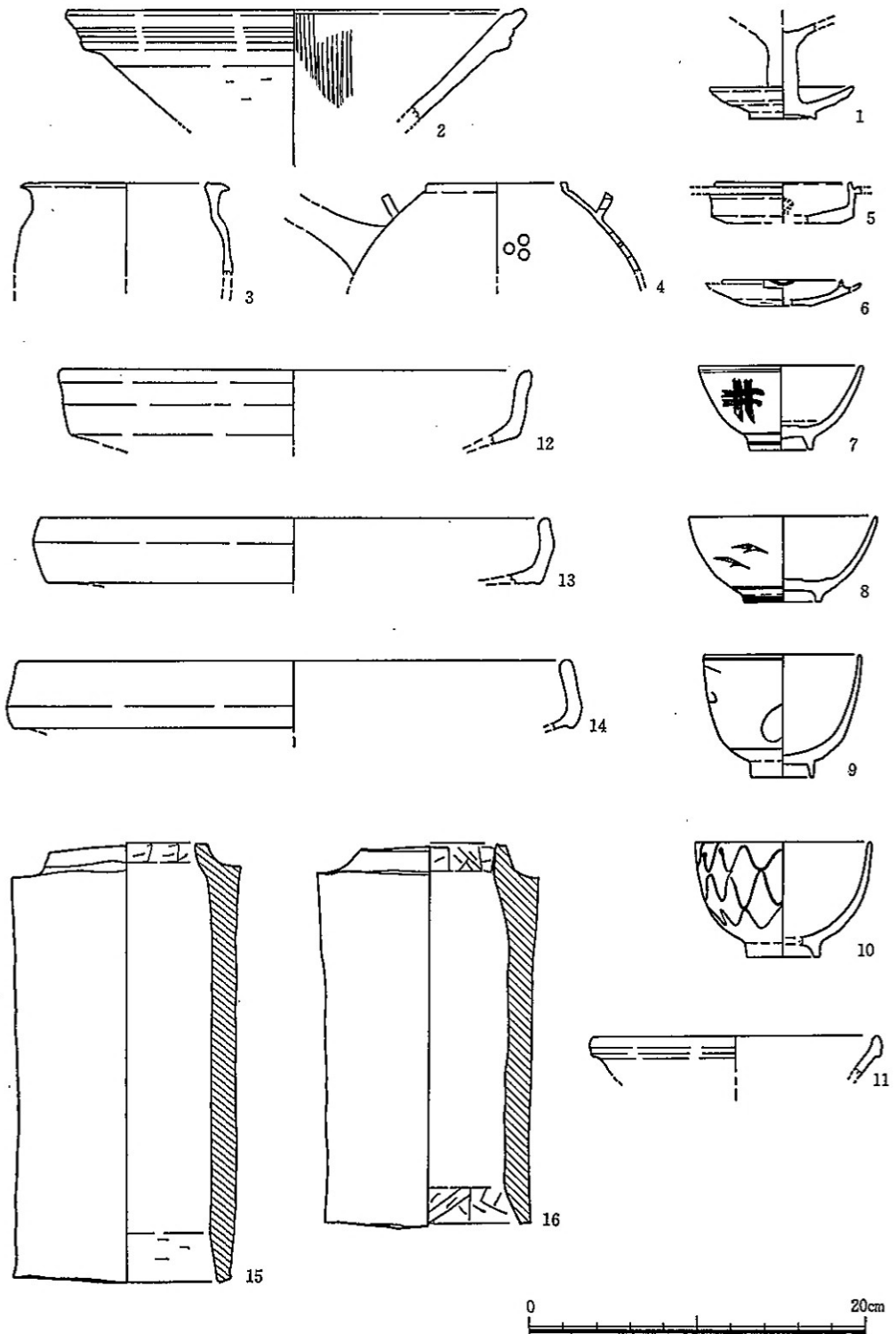
第55図 室町時代洪水跡出土遺物



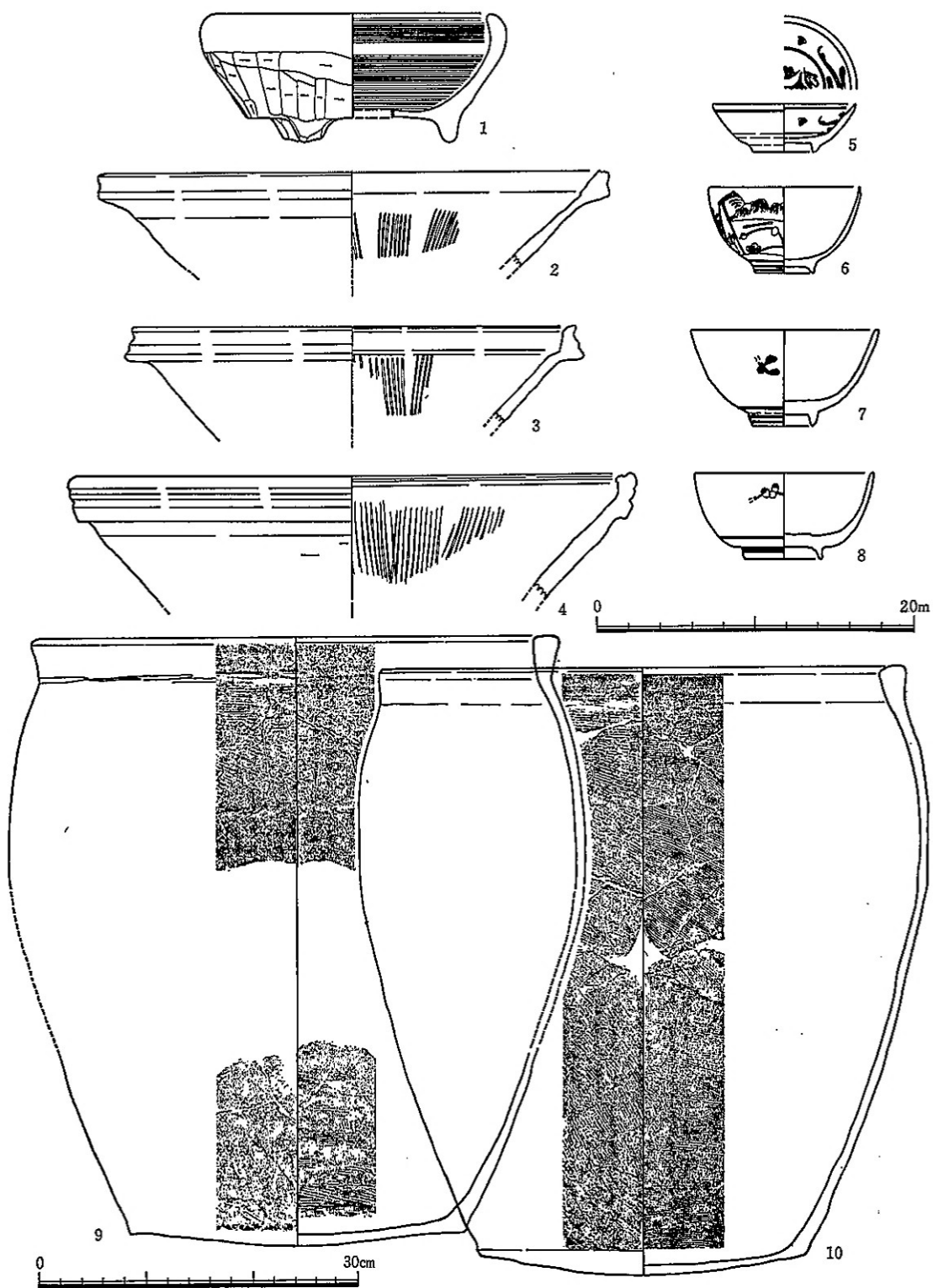
第56図 江戸時代洪水跡出土土器



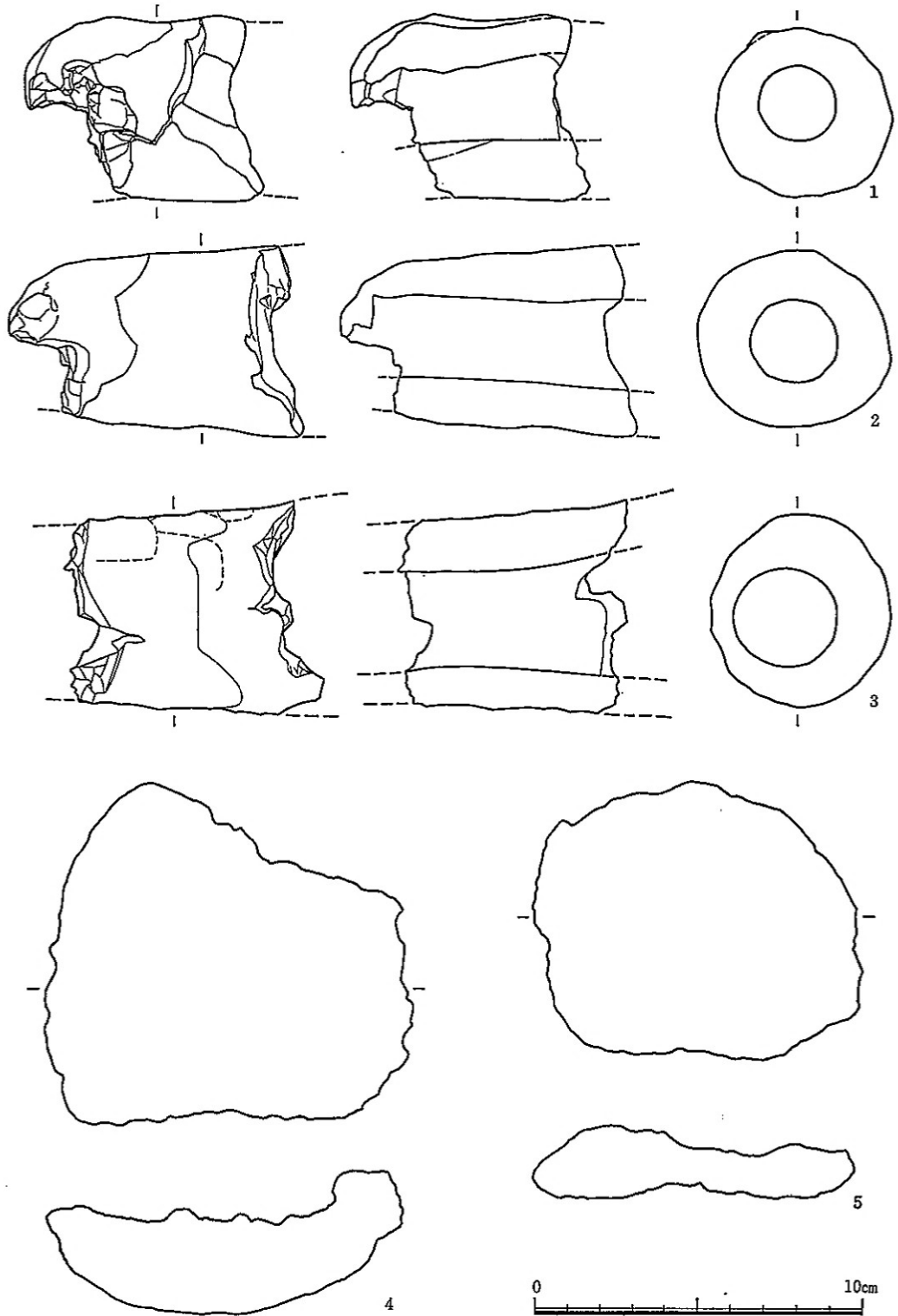
第57図 蛇行州及び後背湿地堆積層出土遺物



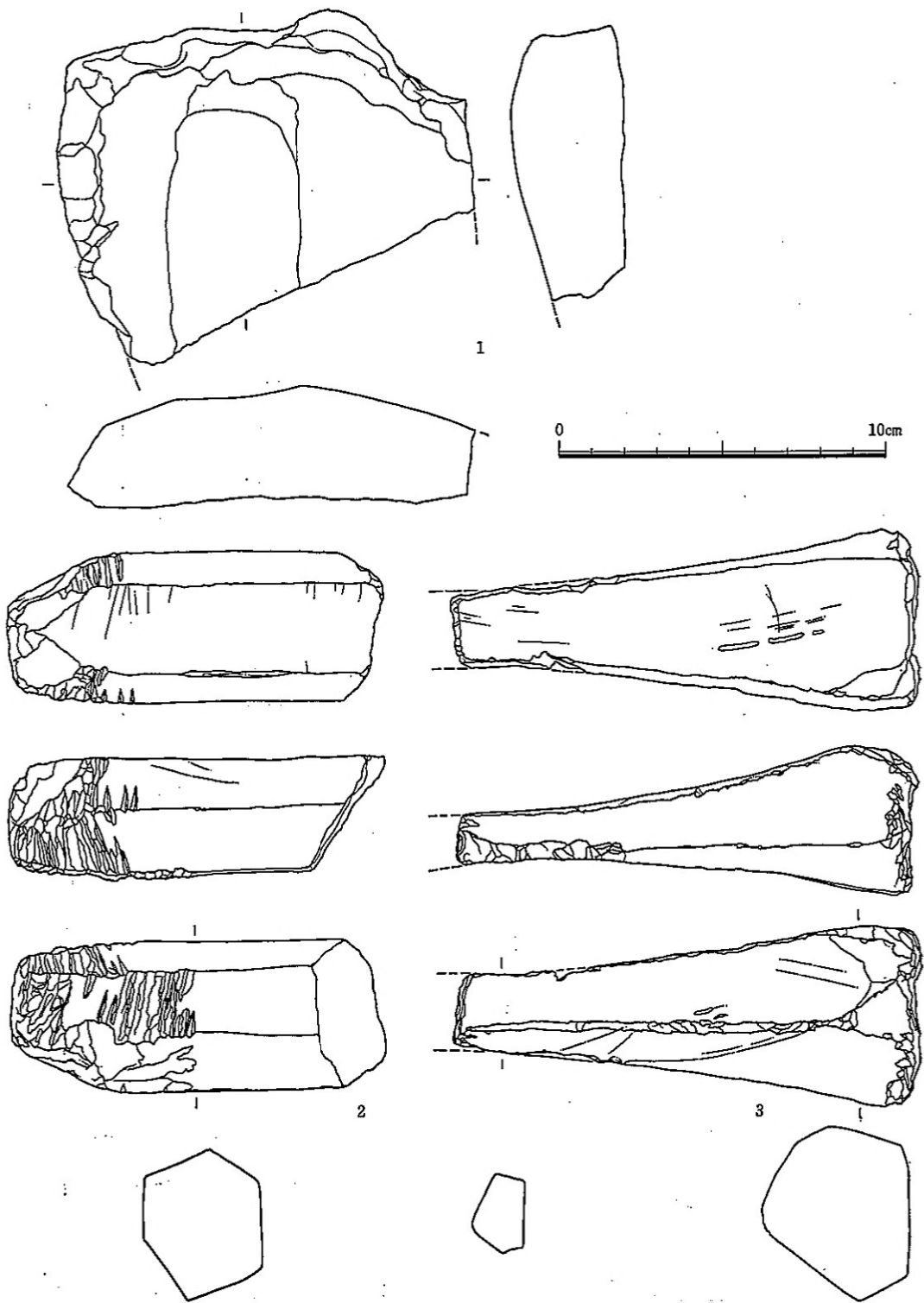
第58図 江戸時代水田跡・シルト堆積層出土遺物



第59図 SDN3、SKA4・5出土土器



第60図 轡羽口・鉄滓



第61图 砥

石

第6節 ま と め

今回の太平寺遺跡の調査は、泉北丘陵中の谷筋の一つである上神谷の西半部を横断する形で実施されたため、中位段丘崖から氾濫原、沖積段丘面の各地形上に分布する遺構群を連続して把握できる点に興味を持たれた。その内、第Ⅰ調査区にあたる中位段丘崖に関しては残念ながら完全に破壊されていたため、その様相を明らかにすることはできなかった。しかし、第Ⅱ調査区にあたる氾濫原、及び沖積段丘面は厚い盛土に覆われながらも良く保存されており、それらに分布する遺構群の一端を明らかにすることができた。ただ、第Ⅱ調査区は5000㎡ほどの面積であったが沖積段丘面は1000㎡ほど、氾濫原も掘削深度が深く調査区内にアイランドという土壁を残しながらの調査であったために実質調査面積は狭く、遺構群の性格を解明するまでには至らなかった。以下、各時代毎に明らかになったことや問題点を記す。

縄文時代 沖積段丘面の第4遺構面がこの時代に比定される遺構面であるが、T.P.19m前後のこの遺構面は従来地山下として調査の対象にしていなかった土層中のものである。遺物が出土しなかったため縄文時代とは断定できないが、和田川流域の西浦橋遺跡においても同様の土層中より晩期の遺構、遺物が検出されていることから、縄文時代として間違いないものと思われる。この遺構面の時期は、沖積段丘が縄文時代前期をピークとする海進を契機として形成されたものとすれば、海退に転じて以降のものと思われ、大雑把に縄文時代後半としか限定できない。

石津川流域の縄文時代の遺跡としては、下流部の四ツ池遺跡が後、晩期のものとして著名であり、中流域では晩期の鈴の宮遺跡が堺市によって調査されているが、現時点では遺跡の分布は極めて少ない。しかし、今回の調査で上神谷中央部の沖積段丘面下に遺構の存在が確認されたこと、また後世の河川堆積中にも前、後、晩期の土器片が少量ながらも出土していることからして、流域にはまだ未発見の縄文時代の遺跡が相当数存在するものと思われる。

弥生時代 沖積段丘面の第3遺構面がこの時代に比定されるが、性格の明確な遺構が検出されず、遺物も中期の土器片等が少量出土したのみで、不明な点が多い。今回の松原泉大津線の調査では菱木下から西浦橋遺跡にかけて中期の竅穴住居跡、方形周溝墓、水田耕作に伴うと考えられる大規模な堰跡が検出されており、泉北丘陵では中期の段階には確実に用水の得やすい開析谷や段丘崖裾部を耕作地として稲作を生活基盤の一部とする集団が定住していたことが明らかになった。前期では西浦橋遺跡で河川堆積中より若干の土器片が出土しており、また小阪遺跡、鈴の宮遺跡でも土器の出土が伝えられていることからすれば、泉北丘陵における水田開発が前期にまでさかのぼることは十分考えられる。しかし、太平寺遺跡周辺の沖積段丘面の水田開発は、石津川本流よりの直接取水が比高差からして困難なために長い用水路の設置が不可避であるが、弥生時代の段階ではここまでは開発の手は延びていなかったようである。

古墳時代 前期については沖積段丘面の第3遺構面中に該当する遺構が存在する可能性はあるが、遺物が出土していないため実態は不明である。その上面の第2遺構面が5世紀後半、陶器編

年で言うⅠ型式後半にはほぼ限定できる遺構面であるが、竪穴住居跡、落込等が検出され、遺物も多量の須恵器を主として土師器、製塩土器、甕の羽口、鉄滓等が出土している。石津川流域のこの時期の遺構としては1.5kmほど上流部の深田遺跡があげられるが、遺構としては、溝、建物、土壇等が検出されている。その内の溝、土壇各1から多量の須恵器を主とする遺物が出土しており、土壇中の遺物に関しては廃棄品置場を想定している。こうした有り様は太平寺遺跡の状況と類似しており、しかも多くの完形品を含む須恵器が焼けひずみや欠損を有する不良品である点も共通している。こうした陶器周辺部における大量の不良須恵器の出土は、近年堺市が調査を進めている辻之遺跡等においても指摘されており、その性格としては須恵器の集散、選別に関係するのではないかと考えられている。しかし、太平寺遺跡においてはそうした一面のみならず、甕の羽口・鉄滓の大量出土が小鍛冶の存在を窺わせるなど、須恵器生産にかかわる多機能な役割を果たしていたものと思われる。

この他、旧石津川と思われる埋没河川(SDN2)が調査区東隅で検出されたが、この石津川を遷移させる洪水は須恵器の第Ⅱ型式最終末に起ったものである。

出土遺物のうち、特に須恵器を対象として細かな形態分類を試みた。対象遺物が本来遺構内にあったものまで包含層出土として取り上げたもので、一括性は高いものの資料的には一等減せしめたものであり、今回そうした形態分類を時間差、地域差にまで十分発展させることはできなかった。将来、良好な資料を得ての検討課題としたい。

平安、鎌倉時代 沖積段丘面の第1遺構面において平安時代後期と同末から鎌倉時代初頭にかけての掘立柱建物が2棟検出されたが、興味深いのは古い方のSBP1の主軸が現条里の方向と一致することである。上神谷下流部の条里は石津川下流の海岸部に広範に施されている条里と規軸線を一にしており、N-16°-Wを示すが、それと同一の軸を持つ建物は当然その地割を意識した結果と思われる。今回の調査によって現条里が近世前後に整備された可能性が強くなったが、この建物は、それに先行する同一の規軸線を持つ条里地割の存在を証明するものかも知れない。しかし、この問題はSBP2が条里より10°ほど西に振っていることも含めてなお検討を要する。

室町時代 氾濫原においてこの時代の洪水堆積層が検出されている。流木が多数埋没している所からかなり大規模な洪水であったようで、流域に相当な被害をもたらしたと思われる。

江戸時代 この時代の泉北丘陵は新田開発によって急速に耕地を拡大していく。新田開発は北部の高位段丘を開いた東山新田、楯葉向山新田等が著名であるが、石津川流域においても三木閉新田が元禄年間には既に開発されている。今回の調査においてはこうした新村を作るような大規模な開発だけでなく、小規模な耕地拡大、耕地改変も同時に行なわれていたことが明らかになった。それは、沖積段丘面では中世の遺構面が時期不詳ながら大規模な削平を受けており、このような削平は耕地の作り替え以外には考えにくいこと、また氾濫原も新たに水田化されていることなどである。新田開発には大規模な土木工事が必要であるが、氾濫原において検出された性格不明な粘土掘削跡は、そうした土木工事の一端を垣間見せているのかも知れない。

付、太平寺遺跡第Ⅱ調査区出土遺物観察表

凡 例

1. 法量については、()内残存値、推：推定値、復：復原値、高：器高、残存：破片の残存値を示し、口、胴、底などは径を示す。
2. 胎土には長石、石英、チャート、くさり礫砂粒を主に含むが、それ以外の特徴的な砂粒を記入した。砂粒は大きさにより、大 $> 5\text{mm}$ 、 $2\text{mm} < \text{中} \leq 5\text{mm}$ 、 $0.5 < \text{細} \leq 2\text{mm}$ 、微 $\leq 0.5\text{mm}$ とした。

沖積段丘面灰茶色粘質土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36-1		弥生式土器	甕	E5-a	口推18.6、底9.0、高推25.5	(外)印キ後上半ナデ、下半削り?。(内)削り。	砂粒(中)、橙色、良好

沖積段丘面SDN2(I期)南壁西肩部・灰黒色粘質土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36-2		土師器	甕		口20.0、高(6.3)	(外)ナデ、ハケ。(内)ナデ、ハケ、指オサエ。	D 金雲母(微)・砂粒(中)、におい橙色、良好
3		土師器	甕	E5-C	口10.2、高(12.1)	(口)横ナデ。(外)ハケ。(内)ハケ後削り。	I 砂粒(細)、褐灰色・(内)底黒色、良好、黒色粘質土出土破片と接合

沖積段丘面黒色粘質土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36-4		土師器	甕	E5-a東壁	口13.5、高(1.6)	(口)横ナデ。	砂粒(細)、橙色、良好
5		土師器	高坏	F5-a	高(3.3)	(内)指オサエ。	砂粒(細)、橙色、良好
6	246-1	須恵器	坏	F5-c	口 $\frac{10.9 \times 10.6}{10.6}$ 、受13.2、高(4.6)	削り左。一定方向数回ナデ。	E 砂粒(中)、灰白色、良好
7		須恵器	甕	F5-a	口8.6、高(2.6)	横ナデ。	A 砂粒(微)、灰色・(断)灰赤色、良好。(内)被灰

沖積段丘面SDN2(I期)肩部・黒色粘質土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36-8		須恵器	甕	トレンチ南端壁西肩部	高(8.3)	(外)横ナデ、削り左。(内)指オサエ後横ナデ。	砂粒(細)、(外)暗青灰色・(内)灰赤・(断)赤灰色、良好、(内)被灰
9		須恵器	甕	北肩部 E4-d	口10.8、高(5.6)	横ナデ。	砂粒(細)、(外)オリブ黒色・(内)灰赤・(内)灰赤、良好、(内)被灰
10		須恵器	甕	トレンチ南端壁西肩部	口13.6、高(2.6)	波状文7条1帯?	砂粒(細)、褐灰色、良好
11	246-2	須恵器	高坏	トレンチ南端壁西肩部	底8.7、高(5.0)	削り左。一定方向1回ナデ。	A 砂粒(細)、(外)暗青灰色・(内)暗紫灰色、良好、(外)被灰
12		須恵器	短頸甕	トレンチ南端壁西肩部	口19.0、高(5.3)	(外)印キ後カキメ。(内)印キ後ナデ。	A 砂粒(細)、灰色、良好
13		須恵器	坏蓋	トレンチ南端壁西肩部	口12.3、稜12.4、高4.9	削り右。(内)印キ後不特定方向ナデ。	C 砂粒(細)、青灰色、良好
14		須恵器	坏蓋	トレンチ南端壁西肩部	口12.4、稜12.7、高(3.7)	削り右。	B 砂粒(細)、青灰色、良好。(外)被灰
15		須恵器	甕	トレンチ南端壁西肩部	底15.5、高(3.5)	横ナデ。波状文2条。	A? 砂粒(細)、暗灰色・(断)赤灰色、良好。(外)被灰
16		須恵器	坏	トレンチ南端壁西肩部	口11.4、受13.5、高(3.5)	横ナデ。	C 砂粒(中)、(外)オリブ灰色・(外)内灰白色、良好、(外)被灰
17		須恵器	坏	トレンチ南端壁西肩部	口11.9、受13.5、高4.7	削り左。一定方向2回ナデ。	C 砂粒(細)、暗青灰色、良好、(外)被灰

沖積段丘面SBK1・2出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36-18	246-5	須恵器	甕	SBK2 Pit 3 E5-a2・4、F5-c3・4	胴19.1、高(16.0)	(外)不定向削り後ナデ。(内)指オサエ、ナデ。波状文10条、列点文6条。	B 砂粒(中)、暗灰色・灰色・(断)灰赤色、良好、(口内)自然粘
19	4	須恵器	坏	SBK1・2 F5-c東壁	口11.6、受13.4、高(5.5)	削り左。不特定方向ナデ。	D 砂粒(中)、灰白色、良好、やや軟質

沖積段丘面SKN6出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
36-20		須恵器	高坏	E5-a1	底9.1、高(3.0)	スカシ?、台形状。	A 砂粒(細)、灰白色・(断)褐灰色、不良、やや軟質
21	246-3	須恵器	甕	E5-a、E5-d東壁	口11.1、胴9.6、高(10.1)	(外)削り後ナデ。(内)印キ。波状文5・12条、列点文8条。	D 砂粒(細)、青灰色・(断)灰赤色、良好。(内)底自然粘

沖積段丘面SKN7出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
37-1	247-1	須恵器	坏蓋	E5-d東壁	口12.8、稜12.6、高4.9	削り左。不特定方向ナデ。	D 砂粒(微)、(外)灰黄色・(内)におい黄褐色、良好、やや軟質
2		須恵器	坏蓋	E5-d東壁	口13.9、稜13.9、高(3.8)	削り右。	B 砂粒(細)、青灰色・(断)暗赤褐色、良好。(外)被灰
3	247-2	須恵器	坏蓋	E5-d1	口12.7、稜11.9、高4.3	削り右。一定方向3回ナデ。	E 砂粒(細)、灰色・(外)一部オリブ黒色、良好。(外)被灰
4	3	須恵器	坏	E5-d1	口10.9、受13.1、高4.1	削り右。カキメ状。(内)印キ。	C 砂粒(中)、青灰色、良好
37-5 34-8		須恵器	坏	E5-d1	口10.5、受13.0、高4.6	削り右。一定方向数回ナデ。	C 砂粒(細)、褐灰色、良好、ヘラ記号
37-6	247-6	須恵器	坏	E5-d	口10.6、受12.5、高5.4	削り右。不特定方向ナデ。	D 砂粒(中)、灰白色、良好、やや軟質
7	4	須恵器	坏	E5-d	口11.4、受13.5、高5.1	削り左。回転ナデ。	D 砂粒(中)、灰白色、不良、軟質、黒色粘質土出土破片と接合
8	8	須恵器	無蓋高坏	E5-d1	口14.7、高(6.6)	削り右。スカシ3、台形状。波状文6条。	A 砂粒(細)、褐灰色、良好。(内)自然粘
9	7	須恵器	無蓋高坏	E5-d1東壁 E5-a	口16.4、高(6.5)	削り右。スカシ3?、台形?。一定方向数回ナデ。波状文5条。	A 砂粒(中)、(外)灰赤・(内)灰白色、良好。(外)被灰
10	10	須恵器	坏	E5-b3・d	底8.1、高(6.7)	削り右。スカシ3、台形状。	A 砂粒(中)、灰色、良好
11	9	須恵器	高坏	E5-d1	底8.6、高(5.6)	削り不明。スカシ3、台形状。回転ナデ。	A 砂粒(中)、灰色、良好
12	5	須恵器	高坏蓋	E5-a・b3・d東壁	口11.5、稜11.8、高5.5	削り右。不特定方向ナデ。	D 砂粒(細)、灰色、良好
13		須恵器	短頸甕	E5-c・d東壁 床土	口10.9、胴15.4、高(6.9)	カキメ。	A 砂粒(中)、青灰色、良好。(内)被灰
14	246-6	須恵器	甕	E5-d東壁 SDN2B区西部南部 F5-c	口14.0、胴10.4、高(10.2)	削り左。カキメ。横ナデ。波状文9・10条、列点文10条×2。	砂粒(細)、(外)灰白色・赤灰色・(内)オリブ黒色、良好。(内)被灰。黒色粘質土破片と接合
15	7	須恵器	甕	E5-b1・3、c、d1 F5-a・c	口 $\frac{17.4}{16.5} \times$ 、高28.2	(外)印キ後カキメ。(内)印キ後ナデ。	C 砂粒(大)、(外)青灰色・(内)赤灰色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
37-16		土師器	甕	E5-d 東壁	口15.5、高(4.8)	(口)横ナデ。(体)ハケメ。	B 砂粒(細)に多い褐色・良好、SKN 6 出土破片と同一個体
17		土師器	甕	E5-d	口19.8、高(5.1)	(口)横ナデ。(体)ハケメ。	D 砂粒(細)、淡褐色・良好
18		土師器	製埴土器	E5-a	口3.6、高(4.1)	(外)指オサエ。(内)ナデ。	A 精細、淡黄褐色・(一部)淡赤褐色・良好

沖積段丘面茶黑色粘質土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
38-1	248-1	須恵器	坏蓋	F4-d	口11.9、横11.6、高4.2	削り左。一方向に6回?ナデ。	B 砂粒(中)、灰色、良好、(外)被灰
2		須恵器	坏蓋	E5-a1	口13.0、横12.7、高(3.9)	削り右。不明。	B 砂粒(中)、灰色、良好、(外)被灰
3		須恵器	坏蓋	E5-d	口 12.3×12.4 、横12.3、高4.3	削り左。回転ナデ。	B 砂粒(大)、灰色、良好、(外)被灰
4		須恵器	坏蓋	SDN2B区層部南側	口12.8、横12.9、高4.1	削り右。不特定方向ナデ。	B 砂粒(細)、灰白色、良好
5	248-4	須恵器	坏蓋	SDN2B区層部南側	口12.4、横12.0、高5.2	削り右。一方向2回ナデ。	B 砂粒(大)、灰色・(外)一部オリブ褐色・(断)暗赤褐色、良好、(外)被灰
6	3	須恵器	坏蓋	E5-a2・4	口12.8、横13.0、高4.4	削り右。一方向3回ナデ。	B 砂粒(細)、灰色、良好、(外)被灰
7	2	須恵器	坏蓋	F5-c	口 12.4×13.7 、横12.8、高5.3	削り右。一方向3回ナデ。	C 砂粒(中)、灰色、良好、(外)被灰
8		須恵器	坏蓋	E4-d2・4	口12.9、横11.9、高4.3	削り左。回転ナデ。	C 砂粒(細)、(外)オリブ褐色・(内)灰色、良好、(外)被灰
9		須恵器	坏蓋	E5-a東端部	口11.2、横10.6、高3.4	削り左。不明。	D 砂粒(細)、青灰色、良好
10		須恵器	坏蓋	E5-a	口12.4、横12.3、高4.5	削り右。不特定方向ナデ、推。	D 砂粒(細)、灰色、良好、(外)被灰
11	248-7	須恵器	坏蓋	E5-a	口12.4、横12.5、高4.5	削り右。不特定方向ナデ、推。	D 砂粒(中)、灰色、良好
12	6	須恵器	坏蓋	F5-c	口 12.8×13.3 、横13.0、高5.1	削り左。回転ナデ。	D 砂粒(中)、青灰色、良好、(外)被灰
13	5	須恵器	坏蓋	F5-c	口13.1、横13.1、高5.0	削り左。不明。	D 砂粒(中)、黄褐色、不良、軟質
14		須恵器	坏蓋	E5-d1	口12.2、横12.0、高5.1	削り左。一方向回数ナデ。	D 砂粒(細)、灰白色、不良、軟質
15	248-9	須恵器	坏蓋	E5-d	口12.7、横12.7、高4.9	削り左。一方向1回ナデ。	D 砂粒(細)、(外)灰白色・(内)灰色、良好
16	8	須恵器	坏蓋	F5-c	口12.8、横12.8、高4.8	削り右。十文字方向回数ナデ。	D 砂粒(細)、青灰色・(断)暗赤褐色、良好、(外)被灰
17		須恵器	坏蓋	F4-d	口12.1、横11.7、高4.3	削り右。不特定方向ナデ。	D 砂粒(細)、青灰色・(断)暗赤褐色、良好、(外)被灰
18	248-10	須恵器	坏蓋	E5-a	口11.6、横11.4、高4.3	削り右。回転ナデ。	E 砂粒(細)、灰色、良好、(外)被灰
19		須恵器	坏蓋	E5-a1・b東壁	口12.8、横12.7、高4.7	削り右。不明。	E 砂粒(中)、灰色、良好
38-20 34-13		須恵器	坏蓋	E5-c北壁	口11.8、高4.5	削り右。不特定方向ナデ。	I 砂粒(中)、灰色、良好、(外)被灰、ヘラ記号
38-21 34-12	249-9	須恵器	坏	E4-b2・4	口9.6、受12.0、高5.1	削り右。回転ナデ。	B 砂粒(細)、(外)暗灰色・(内)青灰色、良好、(外)被灰、裏面割痕、ヘラ記号
38-22		須恵器	坏	F5-c	口10.6、受12.4、高4.2	削り右。一方向1回ナデ。	C 砂粒(中)、灰色、良好
38-23 34-9	249-3	須恵器	坏	E5-a1	口 11.1×10.8 、受13.4、高4.5	削り左。一方向1回ナデ。	C 砂粒(中)、(外)灰青色・(内)灰白色、良好、ヘラ記号
38-24 34-11	8	須恵器	坏	F5-a	口9.9、受12.2、高4.4	削り右。一方向1回ナデ、叩キ。	C 砂粒(中)、灰白色・(断)暗灰色、良好、ヘラ記号
38-25	10	須恵器	坏	SDN2B区層部北側	口9.7、受12.5、高3.8	削り右。一方向1回ナデ。	C 砂粒(中)、灰白色、良好、(外)被灰
26	2	須恵器	坏	F5-c	口 11.5×11.6 、受13.4、高4.7	削り右。回転ナデ。	C 砂粒(中)、暗青灰色、良好
27	4	須恵器	坏	E5-d1	口 9.6×11.0 、受 12.2×12.9 、高4.8	削り右。一方向回数ナデ。	D 砂粒(中)、灰色、良好、(外)被灰、裏面割痕
28		須恵器	坏	SDN2B区層部南側	口10.3、受13.9、高4.9	削り右。回転ナデ。	D 砂粒(細)、明灰色、良好
29		須恵器	坏	SDN2B区層部南端	口10.4、受12.2、高5.2	削り右。回転ナデ。	D 砂粒(大)、濃い黄褐色・(外)一部灰褐色、良好
38-30 34-15	249-6	須恵器	坏	F5-c	口10.2、受12.4、高5.1	削り右。回転ナデ。	D 砂粒(中)、青灰色・(外)一部灰白色、良好、やや軟質、ヘラ記号
38-31		須恵器	坏	F5-a	口11.0、受12.6、高4.6	削り左。不明。	D 砂粒(中)、灰色、良好
32		須恵器	坏	E5-d1	口10.3、受11.8、高4.7	削り不明。回転ナデ。	D 砂粒(中)、青灰色・(断)暗赤褐色、良好、(外)自然釉
33	249-5	須恵器	坏	E5-d	口11.8、受13.6、高5.2	削り右。一方向1回ナデ。	D 砂粒(中)、灰色、良好
34		須恵器	坏	E5-d	口12.1、受13.6、高4.8	削り右。不特定方向ナデ。	D 砂粒(中)、灰色・(断)赤褐色、(外)被灰、ヘラ記号
35		須恵器	坏	E5-d	口10.4、受12.4、高4.9	削り右。回転ナデ。	D 砂粒(中)、灰色、良好、(外)被灰
36		須恵器	坏	E5-d1	口9.6、受11.7、高5.2	削り右。回転ナデ。	D 砂粒(中)、灰色、良好
37	249-1	須恵器	坏	SDN2B区層部南側	口11.1、受13.1、高4.6	削り右。回転ナデ。	E 砂粒(大)、灰色・(断)暗赤褐色、良好
38		須恵器	坏	F5-c	口10.6、受13.1、高5.2	削り右。不特定方向ナデ。	E 砂粒(細)、(外)灰色・(内)淡黄褐色、不良、軟質
39		須恵器	坏	SDN2B区層部南側	口 10.8×9.6 、受 12.8×12.0 、高4.9	削り左。回転ナデ。	E 砂粒(細)、灰色、良好、(外)被灰
40		須恵器	坏	SDN2B区層部南側	口11.0、受13.0、高4.9	削り左。回転ナデ。	E 砂粒(中)、灰白色、不良、軟質
41		須恵器	坏	E5-d1	口10.3、受12.5、高5.1	削り左。回転ナデ。	E 砂粒(細)、濃い褐色、良好、やや軟質
38-42 34-16	249-7	須恵器	坏	F5-c	口10.8、受12.8、高5.9	削り右。一方向1回ナデ。	E 砂粒(中)、灰白色、良好、ヘラ記号
38-43		須恵器	坏	E5-d1	口 10.0×8.9 、受12.1、高4.8	削り右。不特定方向ナデ。	E 砂粒(中)、(外)暗灰色・(内)灰色、良好、(外)被灰
44		須恵器	坏	SDN2区層部近 東側溝溝中	口12.4、受14.5、高4.3	削り左。回転ナデ。	H 砂粒(細)、灰白色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法 量(cm)	成 形・調 整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
39-1	250-1	須恵器	高坏蓋	SDN 2B区 冨部 東側側溝中	□13.0、横13.3、高 6.9	削り左。不特定方向ナデ。	B 砂粒(中)、(外)青灰色・(内)赤灰色、良好。(外)被灰、溶着痕
2	4	須恵器	高坏蓋	SDN 2B区 冨部南側	□12.4、横12.1、高 5.5	削り右。一定方向数回ナデ。	E 砂粒(細)、青灰色、良好。(外)被灰
3	8	須恵器	高坏蓋	SDN 2B区 冨部南側	□11.6、横11.8、高 5.1	削り右。一定方向1回ナデ。	F 砂粒(中)、(外)灰色・(内)暗青灰色、良好。(外)被灰
4	7	須恵器	高坏蓋	SDN 2B区 冨部南側	□11.9、横11.7、高 5.5	削り右。一定方向1回ナデ。	F 砂粒(中)、褐色、良好
5	3	須恵器	高坏蓋	西端中部床土	□12.8、横12.7、高 5.0	削り左。一定方向1回ナデ。	C 砂粒(中)、青灰色、良好。(外)被灰
6	6	須恵器	高坏蓋	E4-d、SDN 2 青灰色シルト10層	□12.5、横12.9、高 6.2	削り左。不特定方向ナデ、叩キ?	C 砂粒(中)、青灰色、良好
7	5	須恵器	高坏蓋	E5-b1	□12.4、横12.8、高 6.4	削り右。一定方向数回ナデ。	D 砂粒(中)、青灰色、良好
8	2	須恵器	高坏蓋	E5-d1	□12.7、横12.4、高 6.1	削り左。不特定方向ナデ。	C 砂粒(細)、(外)青灰色・(内)赤灰色、良好。(外)被灰、重凸焼痕径8.8cm。
	245-1 下段	須恵器	高坏蓋	SDN 2B区 冨部南側	□11.2、横11.4、高(4.6)	削り左。回転ナデ、叩キ。	砂粒(中)、灰色、良好。(外)被灰、重凸焼痕径7.6cm。
39-9		須恵器	有蓋高坏	SDN 2B区 冨部南側	□11.1、高(6.7)	削り左。回転ナデ。スカシ3、台形状。	A 砂粒(細)、灰白色、不良、軟質
10	251-1	須恵器	有蓋高坏	F5-c	□10.7×、底 8.5、高 9.7	削り右。不特定方向ナデ。スカシ3、台形状。(外)面取り。	Ab 砂粒(中)、(外)灰色・(内)灰黄色、良好
11		須恵器	有蓋高坏	E5-b3・d・東端部	□11.6、底 9.2、高 9.9	削り左。一定方向1回ナデ。スカシ3、カキメ。	Aa 砂粒(中)、青灰色・(脚端)灰白色、良好
12	251-4	須恵器	有蓋高坏	D5-b、E4-bトレンチ東端部、E5-a2・4	□10.9、底 8.6、高 9.9	削り右。一定方向1回ナデ。スカシ3、台形状。	Aa 砂粒(中)、(外)青灰色・(内)紫灰色、良好。(外)被灰、溶着痕
13	3	須恵器	有蓋高坏	E5-a1	□10.4×、底 9.3×、高 9.3	削り左。一定方向2回ナデ。スカシ3、カキメ。	Aa 砂粒(中)、(外)灰色、良好
14		須恵器	有蓋高坏	E5-d1	□11.4、底 9.1、高 9.8	削り右。一定方向2回ナデ。スカシ3、カキメ。	Aa 砂粒(大)、(外)灰色・(内)青灰色、良好。(外)被灰
15	251-5	須恵器	有蓋高坏	E5-d	□10.6×、底 9.2×、高 10.0	削り左。回転ナデ。スカシ3、台形状。	Aa 砂粒(中)、明青灰色、(外全体)自然粒
16	6	須恵器	有蓋高坏	SDN 2B区 冨部南側	□12.1、底 9.6、高 11.0	削り左。回転ナデ。スカシ3、台形状。	Ab 砂粒(細)、(外)灰色・(内)脚端灰白色、不良、軟質
17	2	須恵器	有蓋高坏	D5-d	□10.9、底 9.8×、高 10.0	削り右。一定方向数回ナデ。スカシ3、台形状。	Ac 砂粒(中)、明青灰色、良好。(外全体)自然粒。溶着痕
18	253-7	須恵器	高坏	E5-e	底 9.1、高(5.2)	削り左。スカシ5?、円形。	A 砂粒(中)、灰白色・(脚端一部)淡黄色、やや軟質
19		須恵器	高坏	F5-c	底 8.7、高(2.9)	削り不明。スカシ?、長方形?。カキメ。	A 砂粒(細)、灰色・(脚)暗赤褐色、良好。(外)被灰
20		須恵器	高坏	F5-c西端南部床土	底 8.1、高(3.7)	削り不明。スカシ残存せず。円孔の可能様有。	A? 砂粒(細)、灰色・青灰色、良好
40-1		須恵器	無蓋高坏	F5-e	□14.2、高(4.3)	削り左。	B? 砂粒(中)、(外)灰赤色・(内)青灰色、良好
2		須恵器	無蓋高坏	D5-bトレンチ東端部	□14.1、高(5.2)	削り不明。波状文10・5条。	A? 砂粒(細)、(外)明赤灰色・(内)灰白色、良好
3	252-8	須恵器	無蓋高坏	SDN 2トレンチ東端部北開口、一部黒色粘質土	□15.0×、底10.8、高 11.8	削り右。不特定方向ナデ。スカシ3、台形状。波状文7条。	Aa 砂粒(中)灰色、良好。(外全体)自然粒。重凸焼痕径12.2×12.7cm。
4	2	須恵器	無蓋高坏	SDN 2トレンチ東端部北開口、一部黒色粘質土	□18.7×、高(7.6)	削り右。不特定方向ナデ。スカシ3、台形状。波状文7条。把手。	A 砂粒(大)、(外)薄灰色・(内)赤灰色、良好。(内)自然粒。ヘラ記号
5	1	須恵器	無蓋高坏	SDN 2トレンチ東端部北開口、一部黒色粘質土、E4-d	□15.2、高(5.1)	削り右。スカシ?、台形状?。波状文6条。把手。	A 砂粒(細)、暗青灰色、良好。(内)紫褐色粘質土出土破片と接合
6		須恵器	無蓋高坏	E5-a、b1・3・東壁	□16.0、高(6.8)	削り左。スカシ3、台形状。波状文5条。把手。	A 砂粒(中)、灰色、良好。(外)自然粒・(内)重凸焼痕径8.5cm。
7	252-7	須恵器	無蓋高坏	E5-a 東壁、F5-c・d、F4-dトレンチ西端部(一部黒色粘質土)	□17.2、底10.6、高 12.6	削り左。一定方向数回ナデ。スカシ3、台形状。波状文7条。	Ab 砂粒(細)、青灰色、良好。(内)被灰、黒色粘質土出土焼痕11cm。
8		須恵器	無蓋高坏	E5-d	□15.0、高(4.8)	削り右。不特定方向ナデ。スカシ?、台形状。波状文7条。把手。	A 砂粒(中)、暗灰色、良好。(内)自然粒
9	252-6	須恵器	無蓋高坏	E5-d1	□13.0×、高(6.6)	削り右。一定方向数回ナデ。スカシ4、台形状。波状文6条。	A 砂粒(中)、(外)暗灰色・(内)灰色、良好。(外)被灰
10	253-2 245 F段-2	須恵器	無蓋高坏	F5-c・d、F4-dトレンチ南端部、一部黒色粘質土	□19.7、底10.0、高 12.2	削り右。一定方向数回ナデ。スカシ3、台形状。(外)面とり。波状文8条。	Ac 砂粒(中)、明灰色、良好。(内)被灰、(内)重凸焼痕径11cm。
40-11 34-17	252-3	須恵器	無蓋高坏	E5-d	□15.7×、高(5.2)	削り左。不特定方向ナデ。スカシ4、台形状。波状文12条。把手。	A 砂粒(中)、暗灰色、良好。(内)被灰、(内)重凸焼痕径10.5cm。ヘラ記号
40-12	253-1	須恵器	無蓋高坏	E5-a・d 西端中部床土	□16.2、底10.0、高 11.4	削り右。ナデ不明。スカシ3、台形状。波状文10条。	Aa 砂粒(中)、(外)青灰色・(内)灰白色・(脚)暗灰色、良好。(内)自然粒。ヘラ記号
13	3	須恵器	無蓋高坏	E4-d3、E5-a・b1・b北壁	□18.0、底13.0、高 13.6	削り右。不特定方向ナデ。スカシ4、台形状。波状文12条。把手。	Ab 砂粒(中)、赤灰色、良好。(内)被灰、ヘラ記号
14	252-4	須恵器	無蓋高坏	SDN 2B区 冨部	□18.0、高(6.4)	削り右。一定方向数回ナデ。スカシ3、台形状。波状文10条。	A 砂粒(中)、青灰色、良好。(内)被灰、(内)重凸焼痕径10.8cm。
15		須恵器	無蓋高坏	E5-c	□18.8、高(4.5)	削り不明。波状文8条。	A? 砂粒(中)、(外)暗灰色・(内)灰色、良好。(内)被灰
16	253-5	須恵器	高坏	F5-c	底10.9、高(5.7)	削り不明。スカシ4、台形状。(外)面とり。	A 砂粒(細)、暗灰色・(脚)灰赤色、良好、被灰
17	8	須恵器	高坏	E5-c・d	底 9.3、高(5.6)	削り左。スカシ3、台形状。カキメ。	A 砂粒(中)、灰色・(脚端一部)灰白色、良好。(外)被灰
18	6	須恵器	高坏	F5-c	底 9.8、高(7.4)	削り右。スカシ3、台形状。	A 砂粒(大)、灰褐色・(脚)にぶい橙黄色、良好。(脚外)被灰
19		須恵器	高坏	E5-c・d、F5-a	底10.7、高(6.9)	削り右。スカシ3?、台形状?。一部面とり。カキメ。	A 砂粒(細)、青灰色・(脚)灰赤色、良好。(外)被灰
20		須恵器	高坏	E4-b2・4、E5-a 床土	底11.0、高(5.1)	削り不明。スカシ3、三角形?。	A 砂粒(細)、暗灰色・(脚)灰白色、良好。(内)脚被灰
21		須恵器	高坏	SDN 2B区 冨部	底10.9、高(5.6)	削り不明。スカシ4?、台形状?。	A 砂粒(細)、暗青灰色、良好。(外)脚被灰
22	253-4	須恵器	高坏	E5-d1	底 9.1×、高(7.3)	削り不明。スカシ4、台形状。	A 砂粒(中)、青灰色・(脚)灰赤色、良好。(外)自然粒
23		須恵器	高坏	E4-d 床土	底11.0、高(6.5)	削り不明。スカシ3?、台形状?。一部カキメ。	A 砂粒(大)、灰色、良好
	252-5	須恵器	無蓋高坏	E5-a、b1・3	□推17.5×、高(7.0)	削り左。スカシ3、台形状?、波状文5条。把手1。	A 砂粒(中)、灰白色・(脚)灰赤色、良好。(外)自然粒、(内)溶着痕径8.5cm。重凸大
41-1		須恵器	甕	F5-a	□7.1、高(3.8)	横ナデ。	B 砂粒(細)、暗灰色・(脚)灰赤色、良好。(内)被灰
2		須恵器	甕	SDN 2B区 冨部南端	□9.3、高(3.8)	横ナデ。波状文16条。	B 砂粒(細)、灰色・(脚)灰赤色、良好。(内)自然粒
41-3 34-3		須恵器	甕	E4、D5-d、E5-a 床土	脚10.4、高(8.6)	(外・内)叩キ。波状文14・8条。	C 砂粒(中)、灰白色、良好。(脚・内)被灰、ヘラ記号
4		須恵器	甕	E5-a北壁	□10.7×、高(4.7)	横ナデ。波状文4・10条。	C 砂粒(細)、灰白色、良好。(内)自然粒

図番号	図番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
41-5		須恵器	甕	E5-a-c、E4トレンチ東端壁、西端中部床土	□9.0、胴10.8、高11.0	(胴)削り左。(胴)削り左。(底)不特定方向削り。(内底)叩キ。波状文14条、列点文10条。	B 砂粒(中)、灰色・(外底)灰褐色、良好、やや軟質。(胴・内底)被灰
6	254-2	須恵器	甕	E5-a	□10.6、胴10.6、高11.0	(外)削り後ナデ。(内)指オサエ。波状文5・10・7条。	C 砂粒(中)、灰白色、良好。(胴・内底)被灰
7	1	須恵器	甕	F5-c	□10.3、胴9.9、高(9.3)	横ナデ。(底)削り後ナデ。波状文7条。	C 砂粒(中)、灰白色、良好。(胴・内底)被灰
8		須恵器	甕	E5-b東壁	□10.3、胴14.1、高12.2	(底)削り後ナデ。波状文3・5条、列点文5条。	B 砂粒(中)、黄褐色。(胴)灰赤色、良好。(胴・内底)被灰。(底)溶着痕
9	254-5	須恵器	甕	E5-d1	□13.4×10.6、胴15.5、高15.4	横ナデ。(外)叩キ。(内)指オサエ。波状文12・9条。	B 砂粒(中)、黄褐色、良好。(胴・内底)被灰
10	3	須恵器	甕	F5-c	□12.7、胴18.3、高(9.5)	横ナデ。波状文5・7条、列点文7条。	B 砂粒(中)、(外)灰白色・暗灰色・(内)灰色、良好。(内底)被灰
11		須恵器	甕	E5-a2・4、E4-d3、東端部最上層	□14.2、高(3.0)	横ナデ。波状文5・12条。	C 砂粒(細)、灰白色、良好。(外・内)被灰
12	254-6	須恵器	甕	E5-a1・b3・c、E5-a-d北壁、西端部床土	胴17.3、高(16.4)	(外)叩キ後削り、ナデ。(内)叩キ、ナデ。波状文12条、列点文14条。	B 砂粒(細)、灰白色、良好。(胴)被灰
13	4	須恵器	甕	E5-a2・4、b3・c、E5-b-d北壁、SDN2B区東部	□14.3、胴18.7、高(17.3)	(外)叩キ後ナデ。(内)指オサエ、ナデ。波状文7・11・5条。	B 砂粒(中)、暗灰色。(胴)灰赤色、良好。(胴・内底)被灰
14		須恵器	直口甕	E5-a北壁	胴13.0、高(12.6)	(外)削り左後ナデ。(内)叩キ後ナデ。波状文7条・14条、列点文10条。	C 砂粒(細)、灰白色。(外底)にぶい褐色。(内)暗灰色、良好
15		須恵器	直口甕	E4-d	胴14.0、高(10.5)	(外)叩キ、カキメ。(内)叩キ後ナデ。	A 砂粒(中)、灰色、良好。(胴・内底)被灰
16	255-1	須恵器	直口甕	E5-a1	□10.6、胴12.9、高13.9	(外)叩キ後削り、ナデ。(内)叩キ後ナデ。波状文12・14・10条。	A 砂粒(細)、暗灰色・(胴)灰赤色、良好。(胴・内底)被灰
17	2	須恵器	直口甕	E5-d 西端中部床土	□11.5×9.4、胴13.8、高14.6	(外)叩キ後ナデ。(内)指オサエ後ナデ。波状文7・14・9条。	A 砂粒(大)、黄褐色、良好。(胴・内底)被灰
18		須恵器	直口甕	E4-b2・4、d 床土	胴11.7、高(8.6)	横ナデ。波状文7・8条、列点文9条。	C 砂粒(細)、灰白色、良好。(胴・内底)被灰
42-1	255-3	須恵器	短頸甕	F5-c3・4	□7.7、胴12.3、高7.3	削り左。(胴)カキメ。横ナデ。	A 砂粒(中)、黄褐色、良好。(胴・内底)被灰
2		須恵器	甕	E4-d、F5-a	□31.8、高(1.7)	(外)叩キ後横ナデ。	A 精製・砂粒(細)、(外)暗灰色・(内)灰白色、良好、被灰
3		須恵器	甕	F5-c3・4	□17.9、高(3.8)	(外)叩キ、カキメ。横ナデ。	B 砂粒(細)、灰白色・(胴)灰赤色、良好。(外・内)自然精
4		須恵器	甕	西端部床土	□15.9、高(3.7)	横ナデ。	B 砂粒(細)、暗灰色・(胴)灰赤色、良好。(外)自然精
5	255-4	須恵器	甕	F5-c、E5-d、SDN2B区東部南壁	□16.4、高(9.3)	(外)叩キ後一部ナデ。(内)叩キ後ナデ。波状文14・15条。	D 砂粒(中)、黄褐色・(外)暗灰色・(内)暗灰色、良好。(胴・内底)被灰
6		須恵器	甕	SDN2B区東部中央・南側	□14.8、高(4.1)	波状文10条×2。	G 砂粒(中)、(外)暗灰色・(内)黄褐色・(胴)灰赤色、良好
7		須恵器	甕	E5-c	□15.6、高(2.7)	横ナデ。カキメ。	G 砂粒(中)、灰白色、良好、被灰
8		須恵器	甕	E5-d1 西端部床土	□17.7、高(7.9)	(外)叩キ後カキメ。(内)叩キ。	G 砂粒(細)、黄褐色、良好、SKN7出土層部と同一層部か。
9	255-5	須恵器	甕	D5-a、E5-a2・4	□21.8、胴46.0、高46.2	(外)叩キ後カキメ。(内)叩キ後ナデ。	C 砂粒(中)、(外)暗褐色・(内)明赤褐色・暗灰色、良好
43-1	6	須恵器	甕	E5-a1	□24.7、底11.8、高23.2	(外)叩キ後カキメ。(内)叩キ後半スリケツ。乳棒状把手。	A 砂粒(中)、灰色、良好、把手下半約10cmに著灰に煤付著
2		須恵器	甕	F5-a	□27.0、高(8.9)	横ナデ。半円球状把手。	B 砂粒(中)、灰白色・(胴)淡黄褐色、不良、軟質
3		土師器	甕	E4-b、E5-aトレンチ東端壁	□26.6、底13.4、高22.6	(外)縦ハケ。(内)横ハケ後縦削り。	B 金雲母(微)・砂粒(細)、(外)褐色・(内)灰白色、良好
4		土師器	甕	E5-a	□30.6、高(14.4)	(外)縦ハケ。(内)横ハケ後縦削り。	A 金雲母(微)・砂粒(中)、褐色・灰白色、黒斑、良好
5		土師器	甕	SDN2B区東部南壁	底11.5、高(12.0)	(外)斜めハケ。(内)斜めハケ後右回り削り。	A 砂粒(中)、淡褐色、良好
6		土師器	甕	F5-c	□28.5、高(23.1)	(外)縦ハケ。(内)縦・斜めハケ後斜め横削り。把手。	A 砂粒(大)、褐色、良好、黒斑、黒色粘質土出土破片と接合
7		土師器	甕	F5-c	□29.5、高(10.3)	(外)ハケ。(内)横ハケ後縦削り。	A 砂粒(細)、淡褐色、良好
44-1		土師器?	甕	東端部削溝及び機械掘削残土除去時出土	□16.8、高(7.2)	(口)横ナデ。(外)叩キ。(内)指オサエ、ナデ。	A 砂粒(中)、(外)にぶい褐色・(内)赤褐色、良好、養生式土器ノミ式か?
2		土師器	甕	F5-c	□19.6、高(5.8)	(口)横ナデ。(外)体ハケ。(内)ハケ後削り。	B 砂粒(細)、(外)淡黄褐色・(内)褐灰色、良好
3		土師器	甕	E4-d	□14.0、高(2.9)	(口)横ナデ。	M 砂粒(中)、褐色、良好。(外)煤付著
4		土師器	甕	東側削溝中北東隅より矢板67~69枚目	□16.5、高(2.8)	(口)横ナデ。	D 砂粒(細)、褐色、良好
5		土師器	甕	F5-c	□10.8、高(2.0)	(内口)横ハケ後横ナデ。	F? 砂粒(細)、(外)淡褐色・(内)灰褐色、良好
6		土師器	甕	F5-c	□14.7、高(5.3)	(内口)ハケ後横ナデ。(外)縦ハケ。(内)ハケ後削り。	J 砂粒(細)、(外)赤色・(内)灰褐色、良好
7		土師器	甕	F5-c	□18.6、高(5.5)	(口)横ナデ。(外)体ハケ。(内)ハケ後削り。	B 砂粒(細)、(外)淡褐色・(内)褐灰色、良好
8		土師器	甕	E5-a2・4	□15.6、高(5.3)	(内口)横ハケ、横ナデ。(外)縦ハケ。(内)横ハケ後削り。	F 砂粒(微)、(外)褐色・(内)灰褐色、良好
9		土師器	甕	E4-b2・4	□25.4、高(3.8)	(口)横ナデ。	B 砂粒(細)、淡褐色、良好
10		土師器	甕	F5-c	□13.9、高(14.1)	(口)横ナデ。(外)体ハケ。(内)削り。	H 金雲母・砂粒(細)、にぶい赤褐色、良好
11		土師器	甕	F5-c	□23.1、高(3.3)	(口)横ナデ。	B 砂粒(中)、褐色・(端)褐灰色、良好
12		土師器	甕	西端部床土	□19.0、高(4.4)	(口)横ナデ。(内)削り。	D 砂粒(中)、にぶい褐色、良好
13		土師器	甕	E5-a北壁	□19.8、高(4.4)	(口)横ナデ。(内)削り後削り。	C 砂粒(細)、(外)にぶい褐色・(内)灰白色、良好
14	256-3	土師器	甕	E5-d	□13.4、胴15.5、高(11.1)	(外)縦・斜めハケ。(内)横ハケ後削り。	G 砂粒(中)、(外)褐色・(内)黒褐色、良好
15		土師器	甕	F5-c	□12.9、高(4.1)	(口)横ナデ。(外)縦ハケ?。(内)ハケ後削り?	L 砂粒(中)、にぶい褐色、良好
16	256-4	土師器	甕	E4-b2・4	□10.1、胴13.9、高16.5	(口)横ナデ。(外)縦ハケ。(内)削り。(外)底ナデ。(内)指オサエ。	L 結晶片岩・砂粒(大)、褐灰色、良好
17	5	土師器	甕	E5-a1	□9.6、胴11.5、高13.5	(口)横ナデ。(外)体ハケ。(内)下半削り。(内)上半横削り。	L 結晶片岩・砂粒(大)、(外)灰褐色・(内)灰白色
18		土師器	甕	F5-c	高(2.8)	(口)横ナデ。	砂粒(中)、(外)淡黄褐色・(内)褐色、良好
19	256-2	土師器	坏	E5-a・b北壁	□14.8、高5.1	(口)横ナデ。(外)底不特定方向削り後ナデ?	A 金雲母・砂粒(細)、褐色・(外)底黒色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
44-20		土師器	製土器	SDN 2 B区層部南側	□4.1、高(4.7)	(外)指オサエ。(内)ナデ。	A 精緻、浅黄褐色・(一部)淡赤褐色、良好
21	256-1 上段	土師器	製土器	SDN 2 トレンチ東端壁北厨口、一部黒色粘質土	□7.4、胴8.4、高(3.3)	(外)指オサエ。(内)貝殻腹縁赤痕。	B 精緻、によい赤褐色・(一部)灰色・灰白色、良好

沖積段丘面SDN 2 (Ⅱ期) 青灰色シルト10層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
45-1		須恵器	坏蓋	A区中腹部	□12.2、稜12.1、高4.6	削り左。回転ナデ。	D 砂粒(中)、青灰色、良好
2		須恵器	坏蓋	東端壁北厨部	□13.6、稜14.0、高(4.9)	削り左。	D 砂粒(細)、(外)褐灰色・(内)によい褐色、良好
3	257-1	須恵器	坏蓋	A区中腹部	□12.2、稜12.4、高4.7	削り右。不特定方向丁寧ナデ。	B 砂粒(中)、(外)暗紫灰色・(内)暗黄褐色、良好、(外)被灰
45-4 35-2		須恵器	坏蓋	A区中腹部	□10.6、稜10.8、高5.7	削り左。叩き後ナデ。	D 砂粒(細)、灰色、良好、(外天井)被灰
45-5	257-4	須恵器	坏蓋	A区中腹部	□10.9、稜12.9、高5.5	削り左。回転ナデ。	D 砂粒(中)、(外)灰色・(内)黄灰色、良好
6		須恵器	坏	東端壁北厨部	□10.3× 10.5、受13.1、高5.0	削り左。回転ナデ。	E 砂粒(中)、(外)暗紫灰色・(内)灰色・(断)暗赤褐色、良好
7	257-3	須恵器	坏	トレンチ東端壁北厨部	□10.6、受12.6、高5.2	削り右。一定方向一回ナデ。	E 砂粒(中)、灰色、良好、(外一部)被灰
8		須恵器	坏	トレンチ東端壁北厨部	□10.6、受12.4、高5.6	削り右。一定方向一回ナデ。	D 砂粒(中)、灰白色、良好
9		須恵器	坏	A区中腹部	□9.8× 10.9、受12.4× 13.0、高4.5	削り右。叩き後一定方向一回ナデ。	E 砂粒(細)、青灰色、良好、(外底)自然釉
10		須恵器	坏	A区中腹部	□12.0、受14.3、高5.2	削り左。回転ナデ。	D 砂粒(中)、浅黄褐色・(断)褐色、不良
11	257-2	須恵器	高坏蓋	中腹部	□12.3、稜12.3、高5.7	削り左。回転ナデ。	F 砂粒(細)、(外)黒褐色・(内)暗紫灰色、良好、(外)被灰、重む地盤厚9.1cm。
12	5	須恵器	有蓋高坏	B区北厨部	□10.8、底9.2、高10.2	削り右。一定方向一回ナデ。スカシ3、台形状。	Aa 砂粒(中)、(外)暗紫灰色・(内)灰色、良好、(外)被灰
13		須恵器	有蓋高坏	中央sec底厨部	□12.0、底9.7、高10.5	削り右。回転ナデ。スカシ3、台形状。	Aa 砂粒(細)、灰色、良好、(外)被灰
14		須恵器	無蓋高坏	中腹部、SKN7、E5-a・c d東段	□14.7、底10.7、高10.5	削り右後カキメ。不特定方向ナデ。スカシ3?台形状。把手。液状文8条。	Aa 砂粒(中)、(外)暗紫灰色・(内)暗紫灰色、良好、(外)被灰、重む地盤厚10.1cm。胎土に黒色粘質土を含有、黒褐色粘質土を混入した胎土
15	257-6	須恵器	無蓋高坏	A区中腹部東端部2m幅	□(16.2)、底10.8、高(10.7)	削り不明。叩き後不特定方向丁寧ナデ。スカシ3、台形状。	A 砂粒(中)、暗紫灰色・(断)暗紫灰色、良好、(外)被灰、重む地盤厚10.1cm。胎土に黒色粘質土を含有、黒褐色粘質土を混入した胎土
16		須恵器	蓋	中央sec	胴10.6、高(6.7)	(外)削り後ナデ、横ナデ。	砂粒(中)、青灰色、良好、(断)被灰
17		須恵器	甕	中央sec底厨部	□15.5、高(4.8)	(外)叩き後横ナデ。	F 砂粒(細)、灰白色・(断)浅黄褐色、良好、やや軟質
18	257-7	須恵器	甕	A区中腹部	□15.6、高(9.7)	(外)叩き後一部ナデ。(内)叩き後ナデ。液状文8条。	G 砂粒(細)、褐灰色・(断)褐色・(外一部)赤褐色、良好、やや軟質
19		須恵器	甕	B区	□26.0、高(8.7)	(外)叩き。(内)叩き後ナデ。	A 砂粒(中)、(外)によい褐色・(内)黄褐色・(断)浅黄褐色、良好
20		須恵器	鉢?	中腹部、厨部	□9.9、高(4.6)	横ナデ。(外)削り右。	砂粒(中)、灰色・(一部)灰白色、良好、SDN 2 東端壁北厨部4層・黒褐色粘質土を胎土とする
46-1		須恵器	器台	A区中腹部、D5-d、E4-d、E5-d北段	□18.1、高(6.9)	カキメ。液状文8条×2。	A 砂粒(中)、(外)暗紫灰色・(内)灰色・(断)暗紫灰色、良好、(外)被灰、重む地盤厚10.1cm。胎土に黒色粘質土を含有、黒褐色粘質土を混入した胎土
2	264-1	須恵器	器台	中央sec底厨部、F5-e、F6-e・d	□39.8、高(17.1)	(外・内)叩き後ナデ。スカシ5?。液状文8条×2。	Bb 精緻、褐色、良好。(内)底面に黒色粘質土層。泡盛面の青灰色砂礫土層出土層位と一致
3	257-8	須恵器	甕	中央sec	□35.6、高(20.7)	(外)叩き。(内)叩き後ナデ。液状文10条×2。	C 砂粒(大)、(外)赤褐色・(内)青灰色・(断)灰赤色、良好

沖積段丘面SDN 2 (Ⅱ期) 灰褐色砂礫土11層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
46-4		須恵器	甕	B区厨部	胴(48.6)、高(22.5)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き後ナデ。	砂粒(大)、灰色・(断)灰赤色、良好、(外・内底)被灰、(外)蓋縁・變調部?浴管

沖積段丘面SDN 2 (Ⅲ期) 3・4・6・8層・灰褐色砂礫土層、7層・灰白色砂礫土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
47-1	258-1	須恵器	坏蓋	A区6層最下部	□11.7、稜11.3、高3.9	削り左。一定方向数回ナデ。	A 砂粒(細)、(外)暗紫灰色・(内)灰白色、良好、(外)被灰
2		須恵器	坏蓋	トレンチ東端壁4層下	□12.5、稜12.6、高4.5	削り右。一定方向数回ナデ。	D 砂粒(中)、(外)灰色・(内)明暗灰色、良好、(外)被灰
3		須恵器	坏蓋	A区6層最下部	□11.7、稜11.5、高4.7	削り右。一定方向数回ナデ。	D 砂粒(中)、灰白色、良好、(外)被灰
4		須恵器	坏蓋	トレンチ南端壁4層下	□14.4、稜14.2、高5.2	削り左。一定方向2回ナデ。	D 砂粒(細)、(外)灰白色・青灰色・(内)断)灰白色、良好
5		須恵器	坏蓋	A区7層-5	□13.0× 13.7、稜13.3、高4.7	削り右。一定方向2回ナデ。	D 砂粒(中)、灰色、良好
6	258-4	須恵器	坏蓋	東段6層-6	□13.7、稜13.2、高4.8	削り左。一定方向1回ナデ。	D 砂粒(中)、灰白色、良好、(外)自然釉
7		須恵器	坏蓋	東段6層最下部	□13.8、稜12.8、高4.5	削り左。回転ナデ後叩き。	F 砂粒(中)、(外)赤褐色・(内)によい褐色、良好
8	258-2	須恵器	坏蓋	東端壁3層中	□15.2× 15.5、稜14.6、高4.6	削り左。回転ナデ。	F 砂粒(中)、青灰色、良好
9		須恵器	坏蓋	A区6層最下部	□14.2、稜13.4、高4.3	削り右。回転ナデ。	F 砂粒(中)、灰白色、良好、やや軟質
10		須恵器	坏蓋	A区6層下部	□14.5、稜13.6、高4.2	削り左。一定方向1回ナデ。	G 砂粒(細)、灰白色、良好
11		須恵器	坏蓋	B区中央6層下部	□14.6、稜13.5、高4.5	削り左。回転ナデ。	G 砂粒(細)、(外)によい赤褐色・(内)灰色、良好
12	258-3	須恵器	坏蓋	A区7層-5	□13.0× 13.4、稜12.0、高5.1	削り右。一定方向2回ナデ。	H 砂粒(中)、灰色・(断)灰赤色、良好、(外)被灰、焼済み
13		須恵器	坏蓋	B区6層最下部	□13.8× 14.3、稜13.7、高5.0	削り左。回転ナデ。	H 砂粒(中)、灰色、良好、(外一部)被灰、焼済み
14	258-5	須恵器	坏蓋	B区6層最下部	□13.8、稜12.6、高4.2	削り左。一定方向1回ナデ。	I 砂粒(中)、青灰色、良好、(外)僅かに被灰
15	6	須恵器	坏蓋	B区6層最下部	□13.3、稜13.7、高4.4	削り左。不特定方向ナデ。	I 砂粒(大)、(外)灰白色・(内)灰色、良好、(外)被灰
16		須恵器	坏	南段・青灰色砂礫	□12.0、受14.0、高5.3	削り左。一定方向1回ナデ?	D 砂粒(細)、灰色、良好、(外)被灰、焼済み
17		須恵器	坏	A区6層最下部	□9.6、受11.5、高5.5	削り左。一定方向1回ナデ。	D 砂粒(細)、灰白色、良好、焼済み

VI 太平寺遺跡

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(胎土・色調・焼成・その他)
47-18		須恵器	環	B区6層最下部	口10.9、受12.9、高4.8	削り右。一定方向数回ナデ。	E 砂粒(細)、灰色、良好、(外)被灰
19		須恵器	環	B区南半6層中部	口10.5、受12.7、高5.2	削り右。一定方向数回ナデ。	E 砂粒(中)、青灰色、良好、焼通み、ヘラ記号
20		須恵器	環	中央sec-8層-2	口10.0、受12.1、高5.5	削り右。叩き後ナデ。	E 砂粒(中)、灰白色、良好、(外)被灰、焼通み、ヘラ記号
21		須恵器	環	B区中央6層下部	口11.8、受14.7、高(4.3)	削り左。	F 砂粒(中)、灰色、良好、(外)被灰
22	258-7	須恵器	環	A区6層下部	口12.2、受14.6、高4.3	削り左。一定方向1回?ナデ。	F 砂粒(中)、紫灰色・(断)赤灰色、良好、(外)被灰、溶着痕
23		須恵器	環	A区7層-4	口12.9、受15.1、高4.9	削り右。一定方向ナデ。	G 砂粒(大)、灰白色、良好、(外)被灰
24		須恵器	環	B区中央6層下部	口12.7、受15.3、高(4.6)	削り左。	G 砂粒(細)、青灰色、良好
47-25 35-3		須恵器	環	トレンチ東端壁4層上	口10.3、受13.3、高4.7	削り右。叩キ。	G 砂粒(中)、灰白色、良好、焼通み、溶着痕
47-26	258-8	須恵器	環	A区7層上	口 $\frac{12.9 \times 11.5}{11.5}$ 、受 $\frac{15.2 \times 14.2}{14.2}$ 、高4.5	削り左。叩キ。	G 砂粒(中)、(外)灰色・(内)灰白色、良好、(外)被灰
27		須恵器	環	A区7層-2	口13.9、受16.2、高4.4	削り左。	G 砂粒(細)、灰色・(断・外一部)赤灰色、良好、(外)被灰
28		須恵器	環	B区6層最下部	口12.7、受14.6、高4.0	削り左。	H 砂粒(細)、灰白色・(外一部)灰色、良好、(外一部)被灰
29	258-9	須恵器	環	A区東半4・6層	口12.1、受 $\frac{14.8 \times 15.1}{15.1}$ 、高3.5	削り左。一定方向数回ナデ。	H 砂粒(中)、灰色、良好、(外)被灰
30		須恵器	環	B区南半6層下部	口12.9、受15.1、高4.4	削り右。回転ナデ。	H 砂粒(中)、(外)灰色・(内)灰白色・(断)赤灰色、良好、(外一部)被灰、ヘラ記号
31		須恵器	環	中央sec-8層-2	受19.3、高(7.1)	削り左。波状文?条?×3。	A 砂粒(中)、青灰色、良好
32		須恵器	環	壁除去時壁土中より検出	口7.8、受10.5、高(4.5)	削り左。波状文10条。	A 砂粒(細)、灰色、良好、(外口・内底)被灰
33	258-10	須恵器	環	A区4層	口10.9、受12.0、高3.5	削り左。一定方向数回ナデ。	I 砂粒(中)、灰白色、良好、(外)自然粒
48-1	259-1	須恵器	高坏蓋	東壁6層北側部	口11.4、壁11.2、高5.7	手持ちヘラ削り。回転ヘラ削り右。横ナデ。不特定方向ナデ。	A 砂粒(細)、(外・断)赤褐色・(内)紫灰色、良好
2	259-2	須恵器	高坏蓋	A区6層F部	口12.4、壁12.2、高5.8	削り右。不特定方向ナデ。列点文10条×2	E 砂粒(中)、(外)明褐色・(内)橙色、不良、軟質
3	4	須恵器	高坏蓋	A区6層下部	口12.4、壁12.0、高5.4	削り右。一定方向1回ナデ。	B 砂粒(中)、灰色・(断)赤灰色、良好、(外一部)被灰、溶着痕
4		須恵器	高坏蓋	B区6層最下部	口 $\frac{11.5 \times 11.7}{11.7}$ 、壁11.6、高5.1	削り右。不特定方向ナデ。	F 砂粒(細)、(外)暗赤色・青灰色・(内)赤灰色、良好、(外)被灰、溶着痕
5	259-3	須恵器	高坏蓋	東端壁3層上	口12.8、壁12.2、高5.1	削り右。一定方向数回丁寧ナデ。	B 砂粒(中)、(外)赤灰色・(内)灰白色、良好、(外)被灰
6		須恵器	高坏蓋	A区6層最下部	高(2.1)	削り左。一定方向数回ナデ。	砂粒(中)、によい橙色、不良、軟質
7		須恵器	有蓋高坏	A区6層下部 排土中	口14.4、高(4.7)	削り左。一定方向ナデ。スカシ3?、台形状?	A 砂粒(細)、(外)暗赤灰色・(内)明青灰色・(断)赤灰色、良好、(外)被灰
8	259-5	須恵器	有蓋高坏	トレンチ東端壁4層中	口10.7、底9.2、高9.4	削り右。不特定方向ナデ。スカシ4、台形状?	Aa 砂粒(中)、(外)灰白色・(内)紫灰色、良好、(外)被灰
9		須恵器	有蓋高坏	B区南半6層下部	口 $\frac{10.4 \times 11.0}{11.0}$ 、底 $\frac{10.0 \times 8.6}{8.6}$ 、高10.6	削り右。回転ナデ。スカシ3、台形状。	Aa 砂粒(中)、灰色・(外一部)暗灰色、良好、(外)被灰
10	259-6	須恵器	有蓋高坏	A区6層下部	口10.8、底8.9、高9.6	削り右。不特定方向丁寧ナデ。スカシ4、台形状。	Ac 砂粒(中)、(外)灰色・(内)赤灰色、良好
11	7	須恵器	有蓋高坏	8層	口9.9、底8.8、高5.6	削り左。一定方向1回ナデ。スカシなし。	Ba 砂粒(中)、灰白色、良好、(外)被灰、溶着痕
12	8	須恵器	有蓋高坏	A区7層-3	口11.9、底10.0、高7.9	削り左。一定方向数回ナデ。スカシなし。	Bb 砂粒(細)、(外)暗赤灰色・(内)暗青灰色・(断)赤灰色、良好、(外)被灰
13		須恵器	有蓋高坏	A区6層最下部	口12.5、高(6.5)	削り左。一定方向数回ナデ。スカシなし。	Bb 砂粒(細)、青灰色、良好、裏の溶着痕
14		須恵器	高坏	トレンチ南端壁4層下	底9.2、高(4.7)	削り不明。不特定方向ナデ。スカシ3?、円形。	B 砂粒(細)、灰色・(断)赤褐色、良好
15	260-8	須恵器	高坏	東端壁3層下	底8.9、高(4.5)	削り左。不特定方向ナデ。スカシ4、円形。	B 砂粒(中)、(外)灰色・(内)灰白色、良好、(外)被灰
16	1	須恵器	無蓋高坏	トレンチ東端壁4層上	口14.8、底10.0、高11.8	削り右。一定方向1回ナデ。スカシ3、台形状。波状文7条。	Aa 砂粒(中)、灰色、良好
17		須恵器	無蓋高坏	B区8層	口16.3、高(7.9)	削り右。不特定方向ナデ。スカシ4、台形状?。波状文8条。	A 砂粒(中)、灰白色・(断)橙色、不良、軟質
18		須恵器	無蓋高坏	東南壁青灰色砂礫最下層	口16.8、高(6.3)	削り左。不特定方向ナデ。スカシ3or4台形状?。波状文6条。	A 砂粒(細)、灰色、良好、(内底)重ね焼痕径約12cm
19	260-2	須恵器	無蓋高坏	南壁6層-4 排土中	口15.5、高(5.9)	削り右。スカシ不明。波状文12条。	A 砂粒(細)、灰色、良好、(内)被灰、(内底)重ね焼痕径11.3cm
20		須恵器	無蓋高坏	東壁6層-4	口10.9、高(4.1)	削り左。回転ナデ?。スカシ3、三角形。列点文10条。	A 砂粒(細)、暗赤灰色・(断・外一部)灰赤色、良好、(内)被灰
21		須恵器	無蓋高坏	東壁6層-3最下部	口13.5、高(4.4)	削り左。回転ナデ。スカシ不明。	B? 砂粒(中)、灰白色、不良、軟質
22	260-4	須恵器	無蓋高坏	中央sec-3、4層	口11.6、底 $\frac{8.6 \times 8.2}{8.2}$ 、高8.7	削り左。回転ナデ。スカシなし。	Ba 砂粒(中)、灰白色、良好
23		須恵器	無蓋高坏	中央sec-4、4層	底8.3、高(7.4)	削り左。一定方向数回?ナデ。スカシなし。	B 砂粒(細)、褐色、良好
24	260-3	須恵器	無蓋高坏	A区6層最下部	口 $\frac{14.8 \times 14.5}{14.5}$ 、底8.2、高8.7	削り左。一定方向1回ナデ。スカシなし。	Bb 砂粒(中)、灰色、良好、(内環・外脚)被灰
25		須恵器	高坏	B区7層中	高(6.4)	カキメ。スカシなし。	B? 砂粒(中)、淡黄褐色、不良、軟質
26		須恵器	高坏	6層最下部	高(5.9)	(内脚柱)絞り目。指オサエ。スカシなし。	B 砂粒(細)、灰白色、良好
48-27 34-2	260-6	須恵器	高坏	B区6層下部	底7.0、高(4.6)	削り不明。スカシ1、杏仁形。	B 砂粒(細)、(外)暗赤灰色・(内)灰色、良好、(内底・外脚)自然粒、ヘラ記号
48-28	9	須恵器	高坏	A区6層最下部	底14.2、高(13.4)	削り不明。スカシ3、三角形、台形状。カキメ。	A 砂粒(中)、灰白色、(一部)赤褐色、良好、やや軟質
29	5	須恵器	高坏	A区東北半4層	底9.9、高(5.6)	削り不明。スカシなし。	B 砂粒(中)、灰色、良好
30	7	須恵器	高坏	6層最下部	底8.8、高(4.5)	スカシなし。	B 砂粒(中)、灰色・(断)橙色、良好
31		須恵器	高坏	B区中央6層下部	底8.0、高(4.1)	スカシなし。	B 砂粒(中)、灰白色、良好
49-1	261-1	須恵器	特殊器	壁除去時排土中	胴7.6、高(5.8)	(外)叩き後ナデ。(底)削り右。(内)ナデ。	F 砂粒(細)、灰色・(内底)暗赤色・(断)紫灰色、良好、(内底)被灰
2	2	須恵器	甕	東南壁灰白色砂礫	口8.2、胴11.6、高11.0	(外)削り後ナデ。(内)ナデ。	A 砂粒(中)、灰色、良好、(断・内口)被灰、(外底)ヘラ記号

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法 量(cm)	成 形・調 整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
49-3		須恵器	冠	A区東半6層下部	胴12.3、高(10.0)	(外)削り後ナデ。(内)ナデ。	A 砂粒(中)、暗灰色・(一部)灰白色、良好。(削)自然釉
4	261-3	須恵器	冠	南壁6層-3	口 9.3×、胴 8.9、高 8.9 7.9	(外)削り後ナデ。(内)ナデ。列点文5条、波状文12条。	B 精緻・砂粒(細)、灰色・(外底・内)灰白色、良好。(削・内口)自然釉、(内口)ヘラ記号
5		須恵器	冠	中央sec-11、6層	胴10.9、高(11.2)	(外)削り右後横ナデ。(内)ナデ。波状文8+α条。	E 砂粒(中)、灰白色、不良、軟質
6		須恵器	冠	青灰色砂礫土	口13.1、胴18.9、高 17.8	(外)叩き後削り後ナデ、一部カキメ。(内)叩き後ナデ。波状文13条×3。	C 砂粒(中)、灰色・(外底)灰赤色、良好。(削・口・内底)自然釉
7	261-4	須恵器	小形登	A区7層-5	口 7.3、胴 8.4、高 7.2	(外)削り後ナデ。	砂粒(大)、灰色、良好、(外)被灰

沖積段丘面SDN2(Ⅱ期)9層・灰褐色シルト層

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法 量(cm)	成 形・調 整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
49-8	262-3	須恵器	短頸蓋	中央sec	口11.0、胴15.2、高 11.7	(外底)手持ち削り。(内)削り左。(内)不特定方向丁寧ナデ。	A 精緻・砂粒(細)、暗灰色・(内・削)赤褐色、良好。(削・内底)被灰
	245-3	須恵器	直口蓋?	—	胴14.6、高(12.8)	(外)叩き後底、手持ち削り左、横ナデ。(内)叩き、横ナデ。波状文に列点文8条。	B?砂粒(中)、青灰色、良好

沖積段丘面SDN2(Ⅲ期)1・3・4・6・8層・灰褐色砂礫土層、7層・灰白色砂礫土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法 量(cm)	成 形・調 整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
49-9 35-6	262-2	須恵器	短頸蓋	中央sec-3、4層	口 7.1、胴14.4、高 9.3	横ナデ。(外底)削り右。(内)叩き。	B 砂粒(中)、灰色・(削)紫灰色、良好。(削)被灰、蓋して焼成?径10.3cm
49-10		須恵器	地又は直口蓋	トレンチ東端壁4層上	胴12.6、高(10.1)	(外)叩き後削り後ナデ。(内)叩き。波状文12条。	C 砂粒(中)、灰色・(底)灰白色、良好。(削・内底)自然釉
11	261-5	須恵器	直口蓋	南壁6層-4	口 9.5、胴14.2、高 16.1	(外)叩き後削り後ナデ。(内)叩き。波状文10条×3。	A 砂粒(細)、青灰色、良好。(削・内口)被灰
12	6	須恵器	直口蓋	トレンチ東端壁4層上	口 9.8、胴12.2、高(12.8)	(外底)削り。(内)叩き。(外)カキメ。	B 砂粒(細)、暗緑灰色・(削・削)灰白色、良好。(削・削・内底)被灰
13	262-5	須恵器	提瓶	B区南半6層下部	胴19.4、高(21.1)	(正面・側面)カキメ石。(背面)削り右。把手2。	砂粒(中)、(正面)褐色・(側面)赤褐色・(背面)灰色、良好。(背面)被灰
14	1	須恵器	蓋蓋	A区6層最下部	口10.2、高 3.7	削り左。一定方向数回ナデ。	砂粒(細)、灰白色、良好
15		須恵器	有蓋短頸蓋	A区6層最下部	口 7.8、受10.2、高(4.7)	肩に波状文7+α条。	砂粒(中)、灰色、良好。(外)被灰、蓋して焼成の痕跡有
16	262-4	須恵器	蓋	A区7層-5	口 9.8、高(7.0)	(外)削り後ナデ。	砂粒(中)、灰色、良好。(削・内口)被灰
50-1 34-7		須恵器	甕	中央sec-4、6層	口18.4、高(7.9)	(内口)一部削り左?後横ナデ。(外体・内底)叩き後ナデ。波状文12条。	A 砂粒(細)、青灰色、良好、ヘラ記号
50-2		須恵器	甕	B区南壁中	口22.1、高(9.2)	(外)叩き。(内)叩き後ナデ。	A 砂粒(中)、暗灰色・(削・内口・削)灰赤色、良好。(削・内口)被灰
3	263-1	須恵器	甕	B区灰白色砂礫土上層	口18.4、高(9.7)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き後ナデ。	G 砂粒(中)、(外)灰色・(明赤褐色・内)淡褐色、不良、軟質
4	2	須恵器	甕	A区6層最下部	口14.4、高(4.9)	(外・内)叩き後ナデ。波状文11条。	D 砂粒(大)、灰色・(削一部)赤褐色、良好。(削・内口)僅かに被灰
5		須恵器	甕	トレンチ東端部4層上	口23.0、高(10.2)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き後ナデ。波状文13条×2。	G 砂粒(中)、(外)紫灰色・(内)暗青灰色、良好。(削・内口・外底)自然釉
6		須恵器	甕	B区7層上部	口13.3、高(4.7)	(外)叩き後ナデ。	I 砂粒(細)、灰色、良好。(外口・内底)被灰
7		須恵器	甕	B区6層最下部	口14.0、高(2.5)	(外)カキメ。	F 砂粒(中)、(外)灰白色・(内)オリーフ灰色、良好、(内)自然釉
8		須恵器	甕	6層下部、最下部	口22.4、高(6.3)	叩き後ナデ。	E 砂粒(細)、淡黄色、不良、軟質
9	263-5	須恵器	甕	東端壁3層下	口20.0、高(10.0)	(外)叩き後一部ナデ。(内)叩き。	E 砂粒(細)、灰色、良好。(外)僅かに被灰
10	4	須恵器	甕	B区8層	口15.3、胴20.9、高(17.8)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き後ナデ。	F 砂粒(中)、灰白色・(削)褐色、不良、軟質
50-11 34-4		須恵器	甕	A区東端部6層下部	口18.7、高(6.1)	横ナデ。	G 砂粒(中)、灰白色、良好、やや軟質、ヘラ記号
50-12 34-6	263-3	須恵器	甕	A区南半4層	口16.2、高(7.8)	(外)叩き。(内)叩き後ナデ。	H 砂粒(細)、暗灰色・(削)灰赤色、(外)自然釉、ヘラ記号
50-13		須恵器	甕	トレンチ南端壁西半4層上	口17.6、高(6.9)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き後一部ナデ。	H 砂粒(大)、灰白色、良好
51-1		須恵器	甕	A区6層最下部	口20.1、高(8.9)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き。	H 砂粒(細)、(外)淡黄色・(内)灰白色、不良、やや軟質
2		須恵器	甕	東端壁3層下	口18.4、高(8.2)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き後ナデ。	H 砂粒(細)、灰色・(内一部)灰赤色、良好
3		須恵器	甕?	B区8層	口12.1、胴18.0、高 16.2	(外)叩き後一部?カキメ、ナデ。(内)叩き。	I 砂粒(中)、灰白色、不良、軟質
4		須恵器	甕	B区中央6層下部	口13.2、高 5.4	横ナデ。	I 砂粒(中)、(外)灰色・(内)赤褐色、良好。(外内一部)自然釉
5		須恵器	甕	B区6層最下部	口14.0、高(4.5)	(外・内)叩き。	I 砂粒(中)、暗灰色、良好。(外内一部)自然釉
6		須恵器	甕	A区東端部6層最下部	口20.4、高(6.8)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き。	I 砂粒(中)、灰色、良好
7		須恵器	甕	6層下部、最下部	口17.7、高(3.7)	横ナデ。	K 砂粒(中)、灰白色、不良、軟質
8		須恵器	甕	トレンチ東端壁4層下	口28.2、高(3.5)	横ナデ。波状文6条×2。	K 砂粒(細)、灰色、良好、(外)被灰
9		須恵器	甕	A区6層下部砂土中	口18.1、高(4.9)	横ナデ。	L 砂粒(中)、淡黄褐色、不良、軟質
10		須恵器	甕	B区6層下部	口25.4、高(9.1)	(外)叩き。(内)叩き後顔部寄り体部ナデ。	J 砂粒(中)、青灰色・(削)紫灰色、良好。(外・内口)自然釉
11		須恵器	甕	トレンチ南端壁西半4層上	口20.0、高(7.4)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き後一部ナデ。	J 砂粒(細)、明青灰色、良好、(内口)ヘラ記号
12		須恵器	甕	6層下部	口18.9、高(5.4)	(外)叩き後横ナデ。波状文7条。	M 砂粒(細)、灰色・(削)灰赤色、良好
13	263-6	須恵器	甕	トレンチ東端壁4層下	口23.3、高(7.3)	(外)叩き後カキメ。(内)叩き後一部ナデ。	N 砂粒(細)、灰白色、不良、やや軟質
14	7	須恵器	甕	南壁青灰色砂礫土最下部	口19.9、高(5.1)	横ナデ。	M 砂粒(細)、暗灰色、良好、(内)被灰
15		須恵器	甕	A区6層最下部	口28.8、高(7.2)	(外・内)叩き後横ナデ。	O 砂粒(細)、灰色、良好、(外)僅かに被灰
52-1		須恵器	鉢	トレンチ東端壁4層上	口12.0、径14.0、高(6.3)	(外)カキメ。(内)横ナデ。	砂粒(大)、灰色・(削)赤褐色、良好、(外)被灰
2		須恵器	碗	A区西半6層中層	口 8.9、径11.0、高(5.8)	(外底)削り左、横ナデ。	砂粒(細)、灰色・(削一部)赤褐色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
52-3		須恵器	埴	中央sec-7、6層	口7.0、底4.2、高5.9	(外底)へう削り横ナデ。波状文6条。	砂粒(中)、暗青灰色、良好。(内)被灰
4		須恵器	播鉢	南段1層	口14.8、高(4.8)	横ナデ。	砂粒(細)、青灰色・(胎)赤灰色、良好
5		須恵器	甌	B区中央6層下部	口25.4、高(3.8)	横ナデ。	砂粒(細)、灰白色、良好
6		須恵器	鉢?	A区4層	口11.3、高(2.9)	(外・内)ナデ。	砂粒(細)、灰白色・(一部)淡黄色。不良、軟質
7		須恵器	播鉢	B区8層中部-2	底8.6、高(6.8)	横ナデ。	精緻・砂粒(細)、灰白色、良好。(外)自然釉
8		須恵器	壺	B区6層最下部	口15.6、高(4.8)	(外)カキメ。	砂粒(細)、灰色・(内一部)紫灰色、良好
9		須恵器	壺	B区南半6層	底13.8、高(12.2)	(外)カキメ。(外底)削り灰。	砂粒(細)、淡黄色・(一部)明赤褐色。不良、軟質
10	264-2	須恵器	器台	トレンチ東端壁4層中	口28.8、高(6.6)	横ナデ。波状文14条、10条。	Ba 砂粒(中)、灰色、良好。(内)自然釉
11	3	須恵器	器台	B区東半6層中部	高(4.9)	横ナデ。波状文4+α条、銘伯文。	Ba 精緻・砂粒(細)、(外)暗紫灰色・(内)紫灰色、良好。(内)被灰
12	5	須恵器	器台	A区西半6層中部	底28.0、高(20.5)	横ナデ。(外)カキメ。波状文7条×8、9条。スカシ5、長方形×3段。	Ba 粗・砂粒(中)、灰色・(胎)紫灰色、良好。(外)被灰
13	6	須恵器	器台	中央sec-11、6層	底27.2、高(9.7)	横ナデ。波状文11条×2。スカシ三角形。	Bb 砂粒(中)、暗灰色、良好。(外)自然釉
14		須恵器	器台	中央sec-8層-2	口17.0、高(4.3)	横ナデ。	Bc 砂粒(中)、(外)灰白色・(内)灰色、良好
15	264-4	須恵器	器台	東壁3層下	高(10.1)	横ナデ。波状文10条×3。スカシ4?長方形2段×α。	Bc 砂粒(細)、灰白色、良好。(外)自然釉
16		須恵器	器台	東端壁4層中	底16.9、高(5.0)	横ナデ。	Bc 精緻・砂粒(細)、灰白色、良好。(外)自然釉

沖積段丘面SDN2(Ⅲ期)1・4・6・8層・灰褐色砂礫土層、2層・灰褐色シルト層

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
53-1		弥生式土器	甕	断面取り外し時粘土中	底4.4、高(3.1)	調整不明。	金雲母・砂粒(中)、にぶい赤褐色・黒斑、良好
2		弥生式土器	高坏	トレンチ東端壁4層下	底7.6、高(7.1)	(外)ナデ。(内)削り横ナデ。内被灰充填法。	砂粒(中)、灰白色・(一部)明褐色、良好
3	265-2	土師器	小形甕	トレンチ東端壁4層下	胴10.1、高(8.7)	(外)ハケメ。(内)削り。	砂粒(細)、(外)淡黄褐色・(内)淡黄色、良好
4		土師器	高坏	A区6層最下部	口18.2、高(6.5)	横ナデ。	C 精緻・金雲母(微)・砂粒(細)、明褐色、良好
5		土師器	製土器	4層中	口3.6、高(3.3)	指オサエ、ナデ。	A 金雲母(微)・砂粒(細)、灰黄色、良好
6	265-1	土師器	ミナフツ土器	B区8層	底1.8、高(3.4)	指オサエ、手づくね。	砂粒(細)、灰白色・(胎)褐色、良好
7	3	土師器	坏	A区1・2層上層	口10.4、底4.3、高3.4	(外)へう削り。(内)放射状暗文。(内底)輪状暗文。	B 砂粒(細)、褐色、良好
8		土師器	壺	6層最下部	口12.5、高(6.9)	(外)不明。(内)横方向削り。	砂粒(細)、灰褐色・(一部)淡黄褐色、良好
9		土師器	甌?	B区北半4層(一部5層)	口17.7、高(10.5)	(外)不明。(内)横ハケ。把手挿入法。	C 精緻、褐色、良好
10		土師器	甕	B区南半中央6層下部	口12.3、高(6.8)	(外)ナデ。(内)横ハケ削り。	K 砂粒(中)、褐色、良好
11	265-5	土師器	甕	A区6層下部	口12.4、胴14.5、高(11.9)	(内口)横ハケ後横ナデ。(外)ナデ。(内)横方向削り。	K 粗・砂粒(中)、(外)赤褐色・(内)淡黄褐色・にぶい褐色、良好
12		土師器	甕	A区南半4層	口17.8、高(8.3)	(外)斜めハケ。(内)指オサエ後横方向削り。	E 精緻、(外)黄褐色・(内)淡黄褐色、良好
13		土師器	甕	中央sec-1、1層	口16.9、高(6.0)	(外)斜ハケ。(内)指オサエ、ナデ。	F 金雲母(微)・砂粒(中)、淡黄褐色、良好
14		土師器	甕	A区6層最下部	口10.6、高(3.4)	(外)不明。(内)横方向削り。	J 砂粒(細)、(外)暗赤褐色・(内)明褐色・灰黄褐色、良好
15		土師器	甕	中央sec-1、1層	口16.1、高(7.3)	(外)斜ハケ。(内)斜方向削り。	F 砂粒(大)、(外)にぶい褐色・(内)にぶい黄褐色、良好
16	265-4	土師器	甕	トレンチ東端壁4層上	口15.2、高(11.2)	(内口)横ハケ。(外)斜ハケ。(内)指オサエ。(下部)斜め方向削り。	F 砂粒(中)、(外)灰黄褐色・(内)灰白色、良好
17		土師器	甕?	B区6層最下部	口10.7、高(3.4)	(口)横ナデ。(内)横方向削り。	G? 砂粒(中)、(外)褐色・(内)にぶい褐色、良好
18		土師器	甕?	A区6層下部	口9.5、高(3.4)	(外)不明。(内)指オサエ。	F? 砂粒(中)、(外)明褐色・(内)灰白色、良好
19		土師器	甕	B区8層中部-2	口19.6、胴22.8、高(20.5)	(内口)横ハケ。(外)斜めハケ。(内)横ハケ。	C 砂粒(細)、(外)黒褐色・(内)灰褐色、良好
20	265-6	土師器	甕	東壁西半6層-2	口11.9、胴13.8、高13.6	(内口)横ハケ。(外)斜めハケ。(内)削り。	H 砂粒(中)、褐色、黒斑、良好
21		土師器	甕	東壁6層-4排土中	口8.6、高(5.5)	(内口)横ハケ。(外)斜めハケ。(内)指オサエ後横方向削り。	H 砂粒(細)、(外)にぶい黄褐色・(内)淡黄褐色、良好
22	265-7	土師器	甕	A区6層下部	口11.7、胴14.4、高13.9	(外)ナデ。(内)指オサエ、ナデ。	I 黒雲母・金雲母・砂粒(大)、灰褐色、良好
23		土師器	鉢	A区6層最下部	底9.2、高(7.5)	(外)横方向削り。(内)指オサエ、ナデ。	漢式系土器 砂粒(大)、(外)灰黄色・明褐色・(内)暗褐色

沖積段丘面SBP1・2灰褐色粘質土層、その他出土中世遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
29-1	266-5	土師器	羽釜	SBP1 Pit 6	口16.1、胴19.0、高(7.5)	ナデ。	砂粒(中)、灰褐色・(胎)褐色、良好
2		土師器	埴	SBP1 Pit 9	口17.0、高(4.8)	ナデ。	砂粒(細)、(外)黄褐色・(内)灰白色、良好
3	266-1	土師器	小皿	SBP1 Pit 5	口8.9、高1.9	ナデ。指オサエ。	金雲母(微)・砂粒(中)、褐色、良好
4		黒色土器	埴	SBP1 Pit 8	口15.8、高(3.2)	口縁端内面に沈殿。ナデ。暗文詳細不明。	砂粒(細)、暗灰色・(胎)暗褐色、良好
5		黒色土器	埴	SBP1 Pit 6	口14.5、高(3.4)	ナデ。暗文詳細不明。	砂粒(細)、(外)オリブ黒色・(内)灰色・(胎)黄褐色、良好
6	266-3	瓦器?	埴	SBP1 Pit 2	底7.0、高(3.6)	ナデ。暗文不明。	精緻・砂粒(細)、(外)黒褐色・(内)褐色、良好
7		瓦器	埴	SBP1 Pit 12	底8.4、高(2.4)	ナデ。暗文不明。	精緻・砂粒(細)、暗褐色・(胎)淡黄色、良好
8	266-2	土師器	小皿	SBP2 Pit 1	口8.8、高1.8	ナデ。指オサエ。	砂粒(中)、褐色・淡黄褐色、良好

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法 量(cm)	成 形・調 整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
29-9	266-4	瓦器	埴	西端部床土	底6.4、高(5.3)	ナデ。指オサエ。暗文不明。	精緻・砂粒(中)・(外)明黄灰色・黒色・(内)灰黄色・灰色・良好
	6	中国青磁	碗	床土&茶黒色粘質土上面	高(3.5)	(外底)削り。(内底)ヘラによる陰刻文。	精緻・(釉)灰オリーブ色・(断)淡黄色
	7	瓦器	小皿	SDN西部床土&灰褐色砂礫土(1層)	口9.8、底8.5、高2.0	ナデ・横ナデ。(外底)指オサエ・ミガキ残存。	砂粒(中)・灰色・(断)淡黄色・灰白色・良好
	8	瓦器	埴	SDN2区灰褐色砂礫土(1層)・灰褐色シルト(2層)上面	口13.1、底6.3、高5.9	ナデ・横ナデ。(外口)やや密ミガキ・(内)密ミガキ。	精緻・砂粒(細)・灰色・良好

泥濘原 室町時代洪水跡 青灰色砂礫土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法 量(cm)	成 形・調 整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)	
54-1		土師器	羽釜	H7北壁	口17.8、鈎24.6、高(5.9)	横ナデ。	砂粒(大)・淡黄色・(鈎下)黄褐色・良好	
	2	土師器	羽釜	F6 層-1	口23.6、鈎28.2、高(4.8)	横ナデ。(外体)削り。	砂粒(中)・灰黄色・良好	
	3	瓦器	羽釜	G6北壁	口19.2、鈎26.3、高(6.2)	(外体)削り。(内)不明。	砂粒(細)・灰白色・良好・(鈎下部)煤片着	
	4	267-6	土師器	羽釜	現説前清堀中出土	口26.4、鈎33.1、高(7.4)	(内口)横ハケ。(外体)横方向削り。(内)横ハケ後削り。	金雲母(薄)・砂粒(中)・(外)淡黄褐色・灰褐色・(内)灰黄褐色・(断)橙色・良好
	5	瓦器	羽釜	F6 層-2・3 排土中	口28.0、鈎33.4、高(6.8)	(外体)横方向削り。(内)ナデ?	砂粒(中)・灰白色・良好・(体)煤片着	
	6	267-7	土師器	羽釜	F6-c	口25.2、鈎30.0、高(11.6)	(外体)横方向削り。(内)横ハケ。	砂粒(中)・灰白色・(断)淡黄褐色・橙色・良好
55-1	1	土師器	小皿	F6-c・d 層-2	口9.4、底5.7、高1.8	(口)横ナデ。(外底)指オサエ。(内)ナデ。	砂粒(細)・(外)淡黄色・(内)淡黄色・良好	
	2	土師器	小皿	H7東壁	口7.8、底2.9、高1.7	指オサエ。(口)横ナデ。	砂粒(細)・(外)淡黄褐色・(内)明黄褐色・良好	
	3	瓦器	埴	I9	底5.5、高(2.3)	(外底)指オサエ。(内)ナデ。斜格子・凹線状暗文。	精緻・砂粒(細)・灰色・(断)灰白色・良好	
	4	瓦器	埴	H7筋掘部	口12.5、底2.8、高(2.8)	(外)指オサエ。(内)ナデ。ラセン状暗文。	砂粒(中)・(外)灰白色・(内)灰褐色・良好	
	5	267-4	瓦器	甕	G6-a 筋掘部	口32.2、高(5.6)	(外)叩キ。(内)ハケ目。	砂粒(中)・灰色・(断)灰白色・良好
	6	5	土師器	甕	H7北壁排土中	口27.0、高(6.4)	(外)叩キ。(内)ハケ目・指オサエ。	砂粒(中)・淡黄褐色・良好
	7	瓦器	甕	I8	口21.3、高(4.8)	(外)叩キ。(内)ハケ目・指オサエ。	砂粒(中)・(外)灰黄色・(内)灰白色・良好	
	8	270-5	丸瓦	H7筋掘部	幅13.2、長29.0	(外)叩キ後ナデ。(内)布目。	砂粒(中)・灰色・(断)灰白色・良好	
	9	須恵器	甕	現説前清堀中出土	口20.8、高(3.3)	横ナデ。	砂粒(細)・(外)灰白色・(内)黄灰色・良好	
	10	267-2	須恵器	播鉢	G6・7	口22.3、高(4.5)	横ナデ。	砂粒(中)・灰白色・良好・(口端)自然釉
	11	3	瓦器	播鉢	F6 層-2・3 排土中	口24.7、高(6.7)	(外)削り。(内)ハケ目。播目の茶文不明。	砂粒(中)・灰白色・(内)淡黄色・良好

泥濘原 江戸時代洪水跡 灰褐色砂礫土層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法 量(cm)	成 形・調 整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)	
56-1		瓦器	播鉢	I8 下層排土中	口27.0、高(4.7)	(外)削り。(内)横ハケ。	砂粒(中)・(外)灰白色・(内)にぶい橙色・良好	
	2	土師器	小皿	H8筋掘部排土中	口5.3、高1.4	(口)横ナデ。(内底)ハケ目。	砂粒(細)・灰白色・淡赤褐色・良好	
	3	瓦器	小皿	I8・9排土中	口10.2、高(2.0)	(口)横ナデ・ナデ。	精緻・砂粒(細)・灰白色・良好	
	4	268-2	彌前焼	播鉢	I8 排土中	口27.6、高(8.3)	横ナデ。播目7条1帯。	砂粒(大)・にぶい橙色・(外口)明黄灰色・良好
	5	1	土師器	皿	I8・9排土中	口11.2、高2.1	(口)横ナデ。(外)指オサエナデ。(内)ナデ。	精緻・砂粒(細)・淡黄褐色・良好
	6	中国製青磁	小皿	I9東説清堀中出土	口10.7、高(1.7)	(内底)線刻による圓線1条。	精緻・(釉)オリーブ黄色・(断)灰白色・良好	
	7	土師器	地持	I8・9排土中	口24.0、底24.7、高(4.3)	(外)口ナデ。(内)ハケ後横ナデ。(外底)削り?	砂粒(細)・(外)灰褐色・(内)明黄褐色・良好	
	8	268-3	土師器	地持	I9-a	口29.6、底30.1、高(6.0)	(口)横ナデ。(外底)削り。(内)横ナデ。	砂粒(中)・(外)灰褐色・にぶい褐色・(内)橙色・良好
	9	中国製白磁	皿	I8・9排土中	口21.7、高(1.7)	(口内)沈線文。(内底)線刻による圓線各1条。	精緻・(釉)灰白色・良好	
	10	唐津焼	皿	H7 一部青灰色砂礫土	口11.5、高(3.8)	(外)指オサエ。(内)ナデ。削り出し高台。	砂粒(細)・灰オリーブ色・(断)にぶい褐色・良好	
	11	268-4	肥前系	埴	I9-a	口9.6、底5.1、高6.8	ときん高台。胎貫入。	砂粒(細)・(外)明黄褐色・(内)淡黄色・良好
	12	瓦器	羽釜	I8 排土中	口25.0、鈎22.8、高(5.9)	(鈎部下面)削り。(内)横ハケ。	砂粒(細)・(外)灰色・(内)灰白色・良好	
	13	瓦器	甕	H8筋掘部排土中	口33.2、高(7.5)	(外)叩キ。(内)ハケ目・ナデ。	砂粒(中)・(外)灰色・(内)灰白色・良好	
	14	瓦器	甕	I9-b	口32.8、高(7.8)	(外)叩キ。(内)不明。	砂粒(細)・灰白色・(一部)灰色・良好	
	15	瓦器	甕	I8北説清堀中出土	口31.6、高(8.4)	(外)叩キ。(内)ハケ目。	砂粒(中)・(外)灰白色・(内)淡黄色・良好	

泥濘原 自然堤防および背湿地堆積層(暗青灰色粘土)出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法 量(cm)	成 形・調 整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)	
57-1	268-6	瓦器	甕	F6 下層	口35.2、高(3.9)	(外)叩キ。(内)ハケ目。	砂粒(中)・(外)灰色・(内)灰白色・良好	
	2	瓦器	羽釜	F6-b 下層・青灰色細砂含む	口26.3、鈎34.4、高(12.5)	(鈎部下面)削り。(外)削り。(内)横ハケ。	砂粒(中)・黒褐色・(断)にぶい黄褐色・良好	
	3	268-5	瓦器	羽釜	F6	口27.4、鈎34.6、高(3.9)	(口)横ナデ。(鈎部下面)削り。(内)横ハケ。	砂粒(中)・灰色・(内)淡黄褐色・良好
	4	瓦器	羽釜	F6	口27.2、鈎34.0、高(6.4)	(口)横ナデ。(鈎部下面・外)削り。(内)横ハケ。	砂粒(中)・灰色・良好	
	5	瓦器	羽釜	F6 青灰色粘土下層	口21.9、鈎27.1、高(7.6)	(口)横ナデ。(鈎部下面・外)削り。(内)横ハケ。	砂粒(大)・黒褐色・(断)淡赤褐色・良好	
	6	268-7	土師器	羽釜	F6-b 下層・青灰色細砂含む	口22.6、鈎29.0、高(5.8)	(口)横ナデ。(外)削り。(内)横ハケ。	砂粒(中)・淡黄褐色・(断)淡赤褐色・良好・(外)煤片着
	7	8	木器	人形	F6	長19.7、幅3.0、厚0.7	(左端部)両面より削り磨い。(両面)括り。(裏面)括りを結ぶ方向に浅い凹み(指痕?)。	狂目取りの薄い板材

泥濘原 近世水田面、近世シルト堆積層出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
58-1	269-1	瀬戸焼	しよく台	牛足跡面小落込、E6-d1 灰褐色砂礫土	口8.6、底2.0、高(5.2)	横ナデ。(下段皿の外、高台)削り。貫入。	精緻、(胎)灰オリーブ色・(断)灰白色、良好
2		備前焼	楯鉢	E6 青灰色シルト	口26.8、高(6.6)	横ナデ。楯目の単位不明。内全体に楯目?	砂粒(中)、赤褐色、良好
3		唐津焼	甕	F6 灰褐色シルト	口9.5、高(5.4)	横ナデ。	砂粒(細)、極暗赤褐色・(断)赤褐色、良好
4	269-2	京焼	土瓶	F6 灰褐色粘土	口8.3、高5.3	ナデ。注口部裏・穿孔3。	精緻、(胎)オリーブ灰色・(断)淡黄色、良好。(口端・内)粒なし
5		京焼	土瓶蓋	F5 青灰色粘土	口8.0、高(2.4)	(外)削左。(内)横ナデ。	精緻、(外)灰褐色・(内)極暗赤褐色・(断)淡褐色、良好
6		瀬戸焼	灯明皿	H7 灰褐色土	口7.2、受8.5、高1.5	(外)削左。(内)横ナデ。	精緻、灰白色、良好、(内)粒
7		磁器	染付碗	F6 青灰色粘土	口9.6、底3.5、高5.0	横ナデ。(底付)砂付着。(外)図線3本の間に非文様。	精緻、(胎)明緑灰色・(断)白色、良好、(内底)蛇の目状に粒なし
8	269-4	磁器	染付碗	F5 青褐色粘土	口11.0、底4.6、高5.1	横ナデ。(底付)砂付着。(外)図線1本、鳥状?文様。	精緻、(胎)明緑灰色・(断)灰白色・(底付)にふい黄色、良好、(内底)蛇の目状に粒なし
9		磁器	染付碗	G6 青灰色粘土最下層部及び青灰色砂礫土	口9.2、底3.7、高7.3	横ナデ。(底付)砂付着。(外)図線2本の間に文様。	精緻、(胎)明オリーブ灰色・(断)灰白色、良好
10	269-3	磁器	染付碗	E6 青灰色粘土、暗灰白色砂礫(東斜面)	口10.4、底4.2、高6.9	横ナデ。(外)網目文。	精緻、(胎)灰白色・(底付・断)淡褐色、良好
11		中国製白磁	壺	F6北魏 青灰色粘土・灰褐色粘土	口17.0、高(2.2)	横ナデ。	精緻、(胎)明オリーブ色・(断)灰白色、良好
12		土師器	埴埴	E6 青灰色粘土、暗灰白色砂礫土	口27.8、底26.8、高(4.3)	横ナデ。(外底)砂付着。	金雲母・砂粒(細)、灰黄褐色・(断)にふい黄色、良好、(外)煤付着
13		土師器	埴埴	G7 灰褐色シルト	口30.0、底29.2、高(3.9)	(口)横ナデ。(外底)削り、砂付着。(内)ナデ。	金雲母・砂粒(細)、にふい赤褐色・(断)褐色、良好、(外)煤付着
14		土師器	埴埴	G6 灰褐色粘土	口32.7、底33.2、高(4.2)	横ナデ。(外底)不明。	金雲母・砂粒(中)、灰黄褐色・褐色、良好
15	270-6	瓦葺	土管	E6 青灰色砂礫(青灰色粘土中の間層)	直径13.4、長26.0	(外)叩き後ナデ。(内)布目。	砂粒(細)、暗灰色・(断)灰白色、良好
16		瓦葺	土管	E6 青灰色砂礫(青灰色粘土中の間層)	直径13.0、長22.7	(外)叩き後ナデ。(内)布目。	砂粒(細)、暗灰色・(断)灰白色、良好

泥濘原 SDN 3 出土遺物

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
59-1		土師器	火鉢?	I9 青灰色微砂	口17.2、脚19.2、高8.1	(外)削右。(内)ハケ目。(外底)砂付着。脚3。	砂粒(中)、(外)淡黄色・(一部)灰褐色・(内)にふい赤褐色・(断)淡褐色、良好
2	269-6	備前焼	楯鉢	I9 青灰色砂礫	口31.0、高(6.0)	横ナデ。(内)ナデ。楯目8条。	粗・砂粒(中)、黄褐色・(断)灰白色、良好
3	7	備前焼	楯鉢	I9 青灰色砂礫	口27.4、高(6.0)	横ナデ。	砂粒(中)、褐色・(断)灰白色、良好
4	8	備前焼	楯鉢	I9 青灰色砂礫	口34.2、高(7.6)	(外)削右。(内)横ナデ。楯目11条。	砂粒(大)、明赤褐色・(外一部)赤灰色、良好
5		磁器	染付小皿	I9 灰褐色シルト	口9.0、底3.9、高3.0	(高台)削り出し。(外)図線1本。(内)図線2本、花状の文様。	精緻、(胎・断)白色、良好
6	269-5	磁器	染付碗	H9 青灰色砂礫	口9.5、底3.6、高5.4	横ナデ。(底付)砂付着。(外)花状?文様。	精緻、(胎)明緑灰色・(断)灰白色、良好
7		磁器	染付碗	I9 灰褐色シルト最下層	口11.8、底3.7、高6.1	横ナデ。(底付)砂付着。(外高台付近)図線3本。	精緻、(胎・断)灰白色・(内底)蛇の目状に粒なし
8		磁器	染付碗	I8-b 灰褐色シルト	口11.2、底4.8、高10.4	横ナデ。(底付)砂付着。(外高台付近)図線3本。花状文様。	精緻、(胎)明オリーブ色・(断)灰白色、良好、(内底)蛇の目状に粒なし

沖積段丘面 SKA 4・5

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
59-9		土師器	甕	SKA5 D5-d4	口63.4、底42.0、推高76.8	(外)叩き。(下部)削り、ナデ。(内)ハケ目。(外底)指頭庇傷。(内底)ナデ。	砂粒(大)、褐色、良好
10	266-9	土師器	甕	SKA4 E5-d3	口62.6、底41.6、高76.5	(外)叩き。(下部)削り、ナデ。(内)ハケ目。(外底)指頭庇傷。(内底)ナデ。	砂粒(大)、褐色、良好

泥濘原 出土瓦

図番号	図版番号	種類	器種	遺構・地区・層位	法量(cm)	成形・調整	備考(類・胎土・色調・焼成・その他)
30-1	270-1	瓦	軒丸瓦	SDN3 I8 灰褐色シルト	径14.8	ナデ。(裏一部)砂付着。	砂粒(中)、灰色・(表)銀光り・(断)灰白色、良好
2	2	瓦	軒丸瓦	E6 暗青灰色粘土	径13.5	(表)砂付着。(裏)ナデ。	砂粒(細)、灰白色、良好
3		瓦	軒丸瓦	I9-a 灰褐色砂礫土	径14.4	ナデ。	精緻・砂粒(微)、暗灰色・(断)灰白色・(表)銀光り、良好
4	270-3	瓦	軒平瓦	G6・7 青灰色砂礫土	幅(3.8)	(瓦当表・凸面)砂付着。(凹面)不明。(側面)ヘラ削り?。(額)ヘラナデ。	砂粒(大)、灰色・(断)灰白色、良好
5	4	瓦	軒平瓦	I9-a 灰褐色砂礫土	幅(3.3)	ナデ。(額)ヘラナデ。	砂粒(中)、灰色・(断)灰白色、良好

Ⅶ ま と め 一周辺遺跡との関連において—

1. The first part of the document is a list of names and titles, including the names of the authors and the titles of their works. This list is organized in a structured manner, likely serving as a table of contents or a reference list for the document.

VII まとめ 一周辺遺跡との関連において一

1 はじめに

ⅢからⅦにおける各遺跡の詳細な調査報告が基本的な調査成果である。従って、ここではその成果を骨格にしなが、周辺遺跡の成果とかかわりあわせてまとめとしたい。

今回の調査によって語られねばならないいくつかのうち、最も必要なことは、遺跡群総体がどのような特質を有しているかを語ることであろう。幸い、今回の調査地がこの地域の母なる川としての2本の川の間を横断する位置にあり、流域の歴史を語る上で、定点としうる成果をもつことができた。それは河口より約6km上流であるという点での同一河川における下流域と中流域の差をみる上で、又、二本の河川に挟まれた遺跡群として川に面した遺跡（西浦橋遺跡、菱木下遺跡、太平寺遺跡）と段丘上の開析谷にのぞむ遺跡（万崎池遺跡）の差を知る上でも有利な条件をそなえている。そして、単に同一流域における定点にとどまらず、和泉北部におけるいくつかの河川流域との比較の上でも十分三角点になりうるであろう。同一時点における地域的特質の解明とともに、時間差の中で遺跡間、地域間の動的变化をどう捉えるかも重要である。

今回の考古学的調査成果を基準にして、大きく三期に分けて述べていく。第Ⅰ期は漂泊の時代から農耕文化の摂取、定着までの時期、即ち旧石器時代から弥生時代までの時期である。第Ⅱ期は百舌鳥古墳群造営時期を中心とする古墳時代、古墳時代以降を概括的に第Ⅲ期とする。第Ⅲ期については古代中世を含むかなりな時間巾を含んでいるが、古代については今回の調査ではあまりふくらませられる資料がなかった為一期とした。

2 各期の概論

第Ⅰ期（旧石器時代～弥生時代）

今回の調査ではほぼ全面的とっていいぐらい、中位段丘上及びその縁辺に、旧石器が散布していた。後世の削平により、原位置を保つものはどこにも検出できなかったが20点近くのナイフ形石器、翼状剥片、チップ等が採集できた。いずれも国府型ナイフ形石器文化に属するものであろう。残念ながらそれにつづく時期の遺物は検出できなかったが、野々井遺跡¹⁾の有舌尖頭器等からみて、このあたり一帯に旧石器文化が連続して存在したことは確実であろうし、原位置を保った旧石器もいずれ検出されるであろう。

和泉における縄文土器の最古例は貝塚市島中遺跡出土の押型文土器²⁾である。その次の段階として今回太平寺遺跡で出土した早期末前期初頭の土器があり、同じ太平寺遺跡で出土した前期前半の北白川下層式がその次の段階である。太平寺遺跡出土のものはいずれも中世の河川堆積層中より出土したものであるが、ほとんど表面が磨耗していないので、ごく近い所に、原位置が存在すると考えられる。

中期の土器は今回の報告分としては太平寺遺跡で出土したものだけであるが、昭和58年度にお

ける西浦橋遺跡の調査では沖積段丘内河川堆積層中より畷田式が出土しており、太平寺遺跡も同じであるとすれば石津川、和田川の沖積段丘形成の現在における上限時期を示している。

和泉において、明確な遺構を伴う集落として確認できるのは後期に入ってからである。石津川流域においては、四ツ池遺跡の洪積台地北の沖積段丘上で検出された後期前葉から中葉にかけての遺構遺物が古くから知られている³⁾。詳細は不明であるが、礫の両端を打ち欠いた石錘が目立って出土したとされている。四ツ池遺跡では先にⅡでのべた様に、台地の東側の沖積段丘上でも、最近、後期後半の遺物が検出されていて、今後の沖積地の調査の進展によって多くの遺構遺物の検出が予想される。

西浦橋遺跡における後期土器は先にふれたように遺構に伴ったものではなく、河川堆積層内からのものである為その集落实態は不明であるが、その出土量からみて、沖積段丘層形成時期にこのすぐ近くで生活していたことは明らかであり、このことは上遺跡⁵⁾、四ツ池遺跡東地区（第17地区）、太平寺遺跡においても同様であったろうと考える。

和泉全体としてとらえた場合でも、旧石器時代以後の第1の画期は縄文時代後期前葉としえるであろう。少なくとも石津川流域から淡輪遺跡の番川流域まで、ほぼ一斉といえる程、この時期に集落が出現する。今の所後期の遺跡として10遺跡が知られている（第1表）。勿論同時的にするべきの遺跡が存在したものではないであろうが、巨視的には和泉全域にこの時期の集落が存在している。残念ながらこの時期の集落实態について十分解明されていない為、集落間の特質を十分に抽出しえていない状況、さらには何故この時期に急に集落が和泉一和泉だけではないが一に出現しえたのかについての基本的命題も解きえていない状況にある。しかしいくつかの指摘できる点をあげるなら、この時期の遺跡立地としては 1. 春木八幡山遺跡⁷⁾（岸和田市）に代表してみられる砂堆上の遺跡立地 2. 洪積段丘縁辺もしくは沖積段丘に立地する四ツ池遺跡F地区に代表される遺跡立地 3. 板原遺跡⁸⁾（泉大津市）のような低位段丘上の埋積谷に面した遺跡立地の3タイプに分けられる。この条件はそれ以後の歴史においても最も一般的にみられる集落立地である。第1のタイプとしては春木八幡山遺跡以外この時期の遺跡は確認されていない。第2のタイプとしては四ツ池遺跡の他、西浦橋遺跡、上遺跡（以上堺市）、三軒屋遺跡⁹⁾（泉佐野市）があり、第3タイプとしては板原遺跡の他に池上遺跡¹⁰⁾、伯太北遺跡¹¹⁾、府中遺跡¹²⁾、和気遺跡¹³⁾（以上和泉市）、豊中遺跡¹⁴⁾（泉大津市）、淡輪遺跡（岬町）がある。これらの立地条件に加えてさらに、海や山への関係度が問題になる。つまり水稻農耕開始以後においては水田としての可耕地の条件がその集落存否にかかわる基本条件であるのに対し、縄文時代のこの時期の生業基盤としては大きくは海、野、川、山に依存せざるをえなかったであろうと想像される。その意味では恐らくすべての集落において、拠って立つ基盤の構成は集落立地によって異なると考えられる。しかし、今日迄の調査成果によれば、各遺跡間の差をそこまで追究できてはいない。しかし解明されているこの時期の石器のあり方からみて、大きくは海型と山型の集落として分けられる。つまり、海への距離が比較的近い、春木八幡山遺跡、淡輪遺跡などにおける石鏃と石錘との比率は石鏃を100として

石錘が15から20である。四ツ池遺跡も石錘の出土が目立ったとされているので同じ位の比率が想定される。これに対し、泉佐野市三軒屋遺跡¹⁵⁾における後期から晩期にかけての遺跡からはほとんど石錘は出土せず、圧倒的に凹み石、敲石の類が多い。このことは三軒屋遺跡における植物食物への依存度、更にいえば山への依存度が高いことが想定される。そして太平寺遺跡や西浦橋遺跡、上遺跡はいずれも山型集落としてのあり方を示すだろうと考える。しかしさきにふれた第3のタイプの中で池上遺跡や板原遺跡がどのような石器組成を示すか興味深い。

以上の立地、石器組成以外にも和泉の縄文土器の胎土についていえることがある。それはこの地域の縄文土器にいわゆる河内の胎土を有した土器がかなり存在する事実である。時代を異にするが、鈴の宮遺跡の晩期末の土器胎土が在地のもの¹⁶⁾と河内のものとがほぼ同じ位であるという事実、後期前半の四ツ池遺跡でもかなり目立っているという指摘¹⁷⁾など、和泉の各地でこれらと同じ事実が認められる。数は少ないが、太平寺遺跡の土器も在地のものより河内のものが多かった。この事実は十分な検討の結果ではないが、特定時期だけの問題ではなく、むしろ縄文時代全時期を通じてのことである。縄文文化の成立期でもない、一定の定着性をもった後期の段階で、集落内の他地域産土器の多量の存在は、単なる交流の問題にとどまらず共同体と共同体の諸関係を示している。つまり血縁的紐帯を基盤にした広範囲な共同体的紐帯の実態を示していると考えられる。そしてそれは、地域性が確立する弥生時代中期以前の、和泉と河内の一体性、生活基盤の共有性を基礎に成立しえた¹⁸⁾と考える。同族関係を有した共同体間における、恒常的な気前のよい贈物として、土器もしくは土器に入れた何かを贈与しあった結果、和泉に河内土器が多く存在するのかもしれない。

いずれにしても、河内と和泉の網の目の様な結合は長い歴史の中で強固に培われたであろう。そして同時に、地域における定住性の拡大の中で地縁的紐帯も序々に形成され、弥生文化成立の条件も醸成されたのであろう。

この時期の生活基盤のテリトリーがどのように確立されていたのかの問題も基本的命題として残っているが、先にふれた海のムラと山のムラの生活基盤の基本的な相違は、決して柔軟にその基盤を交換しえるものではないであろう。つまり、海に依存した生活のムラ人はその生活の場所を移動するとしても決して山に依存する生活の場所に移動するのではない。つまり垂直移動ではなく、平行移動するのではないのだろうか。その意味では単純に川と川の流域全体をテリトリーの1単位とするのは早計ではないかと考える。勿論テリトリー自体、生産基盤、社会的、政治的变化に応じて時代とともに大きく異なったものであったろうが。

今の所この流域で縄文時代以後は晩期後半に至るまでその実像は知られていない。わずかに鈴の宮遺跡¹⁸⁾で晩期中葉の土器片が、検出されているが、ほとんど資料的にはないに等しい状況である。晩期前葉の遺跡がほとんど検出されていないことが、単に検出していないだけなのか、本当に存在しないのかは不明である。しかし何らかの理由で減少したことはあっても近い将来その存在は確認できると考える。それは、西浦橋遺跡¹⁹⁾や鈴の宮遺跡で、わずかであるが、滋賀里■

第1表 和泉地域縄文時代遺跡存続期 (渡辺1983原図加筆修正)

遺跡名	時期	草創期			早期			前期			中期			後期			晩期		
		前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後	前	中	後
1	四ツ池													—	—				
2	鈴の宮																		—
3	西浦橋													—	—	—	—	—	—
4	上														—				—
5	万崎																		—
6	太平寺							—	—										
7	鶴田池東																		—
8	陵南																		—
9	和気																	—	—
10	万町北																		—
11	伽羅橋																		—
12	大園																		—
13	池上														—				—
14	伯太北														—	—			—
15	府中																		—
16	豊中														—				—
17	板原														—				—
18	虫取																		—
19	春木八幡山														—	—	—	—	—
20	箕土路														—				—
21	軽部池西														—				—
22	米の池東																		—
23	畠中			—															—
24	葛城山頂														—	—	—	—	—
25	三軒屋														—	—	—	—	—
26	フキアゲ山東								—										—
27	淡輪														—	—			—

式の土器の出土がみられており、集落立地を不可能にするような状況は考えられないからである。

しかし今の所、後期以降、晩期前半の歴史を絡めて語る資料はなく、突然縄文文化の終末、弥生文化成立の歴史に至らざるをえない。とはいえ、この縄文時代から弥生時代への移行の過程はその後のこの地域における弥生文化の展開を考える上でどうしても整理しておかねばならない問題である。

Ⅱでのべたように石津川流域のこの時期の遺跡は全部で7遺跡である。しかし十分な遺物論を展開する程多くの遺物を出したのは鈴の宮遺跡ぐらいである。上遺跡は調査の進展に伴って遺物は増加するであろうが、今の所遺物量は少ない。もっとも鈴の宮遺跡にしても、出土した土器のほとんどは自然河川からのもので、遺物総体を問題にしえる様な遺物の出方ではない。少なくとも石器の内容は本来あるべき姿からは離れたものになっているのではないかと考える。ここでは主として土器について触れることにする。

四ツ池遺跡は古くから弥生時代の最古型式の土器の存在が知られている。そして又靱痕を有する凸帯文土器の存在も有名である²⁰⁾。従来からのかなりの調査面積の蓄積にもかかわらず、凸帯文土器の出土は極めて少ないことは指摘できるであろう。鈴の宮遺跡でも凸帯文土器の中から靱痕のある土器が検出された²¹⁾。両遺跡とも、靱痕のついた土器は河内の胎土を有するものであった。このことは土器をつくった河内の人間が米を知っていた一作っていたかどうかは不明一事実だけを示している。決して鈴の宮遺跡のムラ人が米をつくったことにもならないしひょっとして米自体を知らなかった可能性すら存在する。

上遺跡における凸帯文土器は弥生前期新段階の土器と共伴する可能性がある²²⁾とされる。和泉においては虫取遺跡と同じ共伴関係が指摘されていたし、最近、三軒屋遺跡でも同一の調査結果が得られたとのことである²⁴⁾。一方東大阪市水走遺跡第26層中で、凸帯文土器と弥生前期中段階が共伴することが明らかにされた²⁵⁾。かつて東大阪市鬼塚遺跡において指摘されたことが確認されたともいえる。同一の事実は姫路市今宿丁田遺跡²⁷⁾でも認められている。

この凸帯文土器が弥生時代前期中段階土器と新段階土器の両方に共存するとすれば、3点について再考の必要がある。つまり凸帯文土器を更に細分するか、弥生土器の見直しをするか、調査事実の誤認とするかのいずれかである。しかし少なくとも弥生土器についての今日の確立された型式編年から考えて、又、上遺跡他2遺跡の異った調査担当者が出した同一の結論からみて、凸帯文土器のさらなる細分の必要が提起されているのではないかと考える。

以上のことから少なくともこの地域では人々が弥生文化を受容するのに2段階あったことを示している。この2段階説をとって当時の錯綜した集団を類型化すれば次のようになるであろう。

1. 凸帯文土器が日常土器のすべてであった集団
2. 凸帯文土器を基本にしながらかつて弥生土器も使用していた集団
3. 弥生土器を基本にしながらかつて凸帯文土器もわずかに使用していた集団
4. 弥生土器がほとんどすべてであった集団の4タイプに分けられるであろう。

第1のタイプは長原遺跡に代表される。石棒が10数個も検出され、膨大な量の打製石器の存在と石庖丁、蛤刃石斧の欠落等、このムラの生活様式がほとんど縄文様式一色であったことを示している。²⁸⁾ 鈴の宮遺跡も典型的なこのタイプであろう。もっとも長原遺跡の土器棺として弥生土器が使用されていること²⁹⁾や、土器に靱痕がかなりみられる事実は物々交換として米や弥生土器を手に入っていた可能性は考えられる。鈴の宮遺跡も稲作は行なっていなかったと考える。但しあとのべるように四ツ池遺跡の稲作については見聞きし、米の交換も行っていた可能性はある。

第2タイプは水走遺跡に代表される。調査担当者によれば、縄文土器と弥生土器の比率が8.5 : 1.5位で圧倒的に縄文土器が多かったとされている。³⁰⁾ 従ってこの集団の基本的な生活様式は未だ縄文文化のそれであった可能性が強い。但し壺等の弥生土器の使用からみて序々に弥生文化が生活に浸透しつつある段階で、水稻耕作も一部開始しはじめていたのかもしれない。

第3のタイプは四ツ池遺跡を想定している。つまり弥生土器と縄文土器の実数は不明であるが、少なくとも最古の在り地弥生土器の生産は基本的には水稻栽培開始を意味していると考えられるからである。亀井遺跡³¹⁾などもこのタイプの遺跡と考える。すぐ近い位置に長原の縄文人のムラがあり、そのの煙を見ながら弥生のムラを営みはじめた亀井のムラ人は当然近くにいる縄文人と様々な交換をなしたであろう。その結果としての凸帯文土器の入手であり、長原遺跡における弥生土器の存在であろう。

第4のタイプは山賀遺跡³²⁾に代表される。つまり在地でもともと生活していた集団ではなく板付式土器文化の東進の結果として、「ほとんど完成された形」での河内への弥生文化の定着の結果であったのだろう。和泉では池浦遺跡³³⁾がこれにあたるだろう。勿論このタイプであっても縄文人と何らの交流もなかったとはいえないが、少なくとも土器の持ち込みがほとんどなかったということであろう。しかし凸帯文土器の量が確定できない現段階では第3タイプと第4タイプは分ける必要がないのかもしれない。

弥生前期中段階における以上のあり方の上に新段階の動きがそれぞれにあったと想像される。つまり、虫取遺跡、三軒屋遺跡のようなタイプは恐らく、第1、第2のタイプの次段階の様相としてありえたのであろう。そして又、第3、第4のタイプは凸帯文縄文文化の急速に滅びゆく後姿に目もくれず、弥生文化の新たな展開につき進んだ遺跡ではなからうか。勿論第1、第2タイプの中からドロップアウトしていった集団はいくらでもあったろうし、山に移っていった集団もあって当然であろう。しかしいずれにしろ新段階の後半以降基本的には凸帯文土器はその姿を消すことになり、平地遺跡における全面的な弥生化が果されたことになる。

今回の調査区域において余り明確には前期の土器は検出されていず、西浦橋遺跡と万崎池遺跡第Ⅶ調査区でわずかに出土しているのみである。

土器の動態に表わされた縄文文化から弥生文化への推移は表面的にはそれ程の確執もなく完了したようにはみえても、共同体間、共同体内に様々な混乱といさかいが絶え間なく存在したと想像される。そしてそれは基本的に水稻農耕を開始、展開することによる縄文ムラでの血縁集団間

と集団内における再編成の結果として生じたと考える。それは長原遺跡のムラ人が、極めて近い位置に居住していた弥生文化で彩られた亀井遺跡のムラ人と日常的に接触する中で、はじめにいただいていた興味と珍しさはいつかは大きな不安と恐怖に変わり、ムラの中に種々の分裂が生じ、拡散せざるをえない状況が生じたであろう事態については、かつて稲作以前から稲作への変容の過程でふれた所³⁴⁾である。縄文のムラの中に血縁をたよって、他の縄文文化を営むムラに移りすむ小集団と新興の弥生文化のムラに稲作をはじめめる為に移住する小集団に分かれていかざるをえなかったのである。

鈴の宮遺跡や西浦橋遺跡の弥生文化が、四ツ池遺跡における弥生文化の成立と一定の展開の結果成立したことは想像に難くないが、縁もゆかりもない集団が農耕に適した新たな土地としてムラを営み始めたというより、凸帯文土器時代のムラ人ゆかりの人が元のムラに戻ったということもありえたことであろう。

四ツ池遺跡の前期新段階において、少なくとも3群の住み分けが行なわれていることはすでにⅡでのべたが、その3群がどのような共同体関係をもっていたのか、又石津川流域のムラムラとの関係がどのようなものであったのが最大の問題となる。つまり、弥生文化成立以降の経緯よりみて、四ツ池遺跡がこの流域の弥生文化の展開において果たした役割は極めて大きかったことは確かであろう。その場合、弥生文化の進展の過程で縄文時代の海のムラと山のムラの基本的な集落パターンが跡形もなく編成しなおされ、地域の土地利用を含むすべてが、例えば四ツ池ムラの長の指導のもとに行なわれたのであれば、弥生前期以降の石津川流域における権力がこの時点で確立したことになる。しかし恐らくそんなことはなく、基本的には縄文時代からの細いがち切ることのできない紐帯がかなりの部分にわたって長い間継続したと考える。つまりこの時期の水利体系が決して地域内で一連の統一的なものではなく、分節的³⁵⁾で不連続なものである中で、ムラとムラの諸関係は生産力総体の差としてゆるやかに生じたであろう。そして中期中葉までは、集落レベルとしては弥生文化の自然的拡大、進展として捉えることができる。それはこの流域における弥生集落の増加と継続が上遺跡を除いて極めて順調に推移していることから明らかである。ただしそれはあくまでも表面上のことであって、集落における矛盾の激化は常にそして時を降るに従って大きくなっていったと考えられる。

西浦橋遺跡、菱木下遺跡における弥生文化の定着も、この流域における弥生文化の進展の中で成立する。中期の居住区が台地上に立地しているのに対し、前期の居住区は台地の縁辺に立地した可能性がある。しかし前期の集落实態はごくわずかの土器の出土以外不明である。

中期中葉の集落は菱木下遺跡として成立する。西浦橋遺跡は同一のムラの生産地―農耕及び河川漁撈の両面における―と墓域の一部として存在したのであろう。同じ時期毛穴遺跡も成立する。

菱木下遺跡には第Ⅱ様式の集落が2群存在する。第Ⅰ調査区と第Ⅲ調査区である。第Ⅰ調査区で同時期1～2棟、第Ⅲ調査区で1棟の竪穴住居址が検出された。両群は約250m離れて存在する。恐らく両地区とも南側にもう少し住居址があり、1単位集団をなしていたと推定される。そ

これは、第Ⅰ調査区住居址のすぐ西に存在する方形周溝墓群の存在によって明らかで、仮に1棟ごとに1基の方形周溝墓を造営するとしても住居址数が足りず、まして単位集田ごとに1基とした場合さらに多くの住居址が必要となる。

方形周溝墓は隣接する西浦橋遺跡の2基も含めて9基となる。第Ⅱ様式時は6基である。第Ⅲ調査区の住居址に伴う方形周溝墓が近くにあるのか、第Ⅰ調査区の方形周溝墓群に含まれるのかは不明である。

今回の菱木下遺跡、西浦橋遺跡における方形周溝墓群の特徴としては基本的に溝を共有せず、同一時期としては独立的に存在している。その結果第Ⅱ様式の墓と第Ⅲ様式の墓が対をなすように存在している。今回の結果だけからみれば、第Ⅱ様式に造営された周溝墓6基なのに第Ⅲ様式時には3基になり、集落の構成にかなりな変化があったように受けとれる。事実第Ⅲ調査区の住居址が継続しないのであるが、比較的大きな溝も存在するので早計には判断しがたい。

今回の調査で検出できた弥生時代の最大の収穫の1つは、西浦橋遺跡で検出された杭列群である。この遺構が厳密には中期のある時期としかいえないが、周辺状況からみて中期中葉としておく。この時期の生産技術段階がどの程度のものであるかを知る為の貴重な遺構である。幅10m以上もある自然河川の屈曲部を利用して、そこから別の溝に導水する為杭と横木を組み合わせて、堰をつくっている。その規模はこの時期としては最大級のものと考えられる。材木は周辺に豊富にある材を使用している。恐らく、後の時代に水田として利用される沖積段丘部分はこの時期には未だ安定せず、少し高い位置の谷部分を利用して水稻耕作を行っていたと考えられる。水田規模等は不明であるが、少なくとも菱木下遺跡第Ⅰ調査区の住居址数棟分の水田はあったと考えられる。この施設が埋れた時期は不明であるが、中期後半頃には機能なくなっている可能性が強い。

菱木下遺跡における第Ⅲ様式時の集落は基本的に第Ⅱ様式時と変わらないと考えられるが、第Ⅲ調査区の住居は検出されていない。しかし比較的大きな溝が埋積谷を利用してつくられていて、土器の出土もみられるので、恐らく小規模集落はそのまま存続したと考えられる。

第Ⅲ調査区におけるこの時期の住居址は、南部分に検出されていないが存在したと考えられる。第Ⅱ調査区における溝の開削が、第Ⅲ調査区集落の独自のものなのか、菱木下弥生ムラの沖積段丘上の用水施設の埋没に伴う新たな対応なのかは不明であるが、段丘上の小埋積谷内の新たな開発を指向したことは確かであろう。この溝は少なくとも中期後半まで存続している。

中期中葉から後葉にかけては万崎池遺跡の土壙墓が検出され、東側谷より出土した土器から、すぐ南に小規模な集落があると調査担当者は考えている。又太平寺遺跡の沖積段丘でも同時期の落ち込みが検出されている。つまり前期から中期前半にかけて切り拓いてきた弥生文化が主として人口圧の問題から新たな開発の地を外にむかって、この地域では新たな沖積段丘—太平寺遺跡—と段丘上の埋積谷—万崎池遺跡—へと求めはじめたことがしられる。

この動向は決して石津川流域の動きにとどまらず、池上遺跡の変容及びその周辺の新たな遺跡の出現として現出する³⁶⁾。四ツ池遺跡においても中期後半段階の方形周溝墓が複数あり、とりわけ

台地北にある周溝墓群の数が多く、それを台地上の集落集中との対応関係で捉えるなら、中期における台地上集落の優位性の確立を想定することができる。³⁷⁾

毛穴遺跡における中期後半の遺物量の減少化³⁸⁾、鈴の宮遺跡第4地区における中期中葉と後葉の方形周溝墓の立地、あり方(単独墓)³⁹⁾の差などからよみとれる共同体内の変化なども大きくは和泉北部の動向と軌を一にするものとして捉えることが可能である。

このような動向が何によって引き起されるかは明確には指摘できないが、基本的には人口圧の高まりによるのであろう。そのような動きの中で動産の少数者への集中、それに対応する先進技術体系の少数者による掌握、その結果としての祭祀権の私化が集団内において深化し、他方、共同体間においても同じ流れとなって地域内での優劣の関係として編成が行なわれたのであろう。残念ながら各集団内における有力者、集団間における支配的ムラを具体的に指摘できないが、鈴の宮遺跡1号方形周溝墓の存在はその規模、立地からこのムラの有力者の墓として捉え、有力者の成立の具体事例として捉えることも可能であろう。

万崎池遺跡の北約900mにある万崎遺跡で磨製石剣が出土しており、弥生時代中期に集落のあったことは確実であるが十分なことは分らない。立地としては沖積段丘上の遺跡である。⁴⁰⁾

弥生時代後期の具体像はそれ以前と比較してあまり十分には抽出しえていないことは「環境」の所ですでにのべた。住居址以外のわずかな遺構、土器の検出は、さきのにべたほとんどの集落でも見い出せるが、少なくとも、菱木下遺跡からは後期の遺物は検出しえていない。西浦橋遺跡や万崎池遺跡第Ⅲ調査区谷内より土器の出土はみられるが、遺構としては見出しえていない。極めて小規模なムラが細々と存在したのかもしれない。こういった、石津川中流域の状況の中で、唯一住居址の検出をみたのは万崎池遺跡第Ⅴ調査区における2棟の方形堅穴住居址である。後期前半に属するものである。2棟が併存したかどうか微妙な住居間隔である。遺物も余り多くない。恐らく西浦橋遺跡においても万崎池遺跡第Ⅲ調査区と同じ位の規模の集落が存在していたのであろう。それらは後期後半以降すべて姿をけし、古墳時代中葉までこの調査区内には集落は営まれなくなる。

周辺の遺跡では四ツ池遺跡も後期の集落はそれ以前と比較して遺構遺物が少なくなる。全くなくなるということではなく、小規模化、分散傾向の集落動態を示している。鈴の宮遺跡においてもごくわずかな土器の出土量しか第Ⅴ様式の時期にはないとされている。その後は布留式の土器の時期迄鈴の宮遺跡に空白の時期が生ずる。

弥生時代末から古墳時代初頭にかけての時期、新たなムラを営み始めるのは小阪遺跡⁴¹⁾と野々井遺跡である。前者は比較的従来の集落立地と余り変らない所であるが、その後集落がどう展開したかは不明である。それに対し、野々井遺跡の集落は農耕を大規模に展開するには余りに異常な地にあることは確かである。この集落の変遷についてはすでに「環境」で比較的詳しく論じているので省略するが、重要なことは、この集落が須恵器生産のはじまる少し前まで、一定の秩序だった構成をもって、集落を営んだことが判明していることである。

この時期の社会的変動を示すもう1つの例としては、四ツ池遺跡の第3地点の新たな集落の開始がある⁴²⁾。そしてそれ以後の四ツ池ムラの中心的集落となる。このことは従来の台地を中心とした四ツ池ムラから新たな第3地点のムラへの主導権の移動を示している。

石津川流域における弥生時代後期から庄内式の時代にかけての地域内における変動は、少し時期は異なるが、大津川流域（榎尾川・松尾川流域）においてもみられる。和泉市観音寺山遺跡⁴³⁾、同郷の池遺跡⁴⁴⁾などの高地性集落の出現である。これらの遺跡は少なくとも野々井遺跡よりも早く成立している。両地域における時期差が何に由来するものか、石津川流域においても第Ⅱ様式末から第Ⅰ様式にかけて同じ状況が存在したものが今の所みつかっていないのかもしれないが、少なくとも野々井遺跡⁴⁵⁾成立の時期は、大津川流域においてはほぼ新しい地域内編成が終りつつある段階である。つまり、3世紀～4世紀、和泉市府中遺跡⁴⁶⁾、泉大津市豊中遺跡⁴⁷⁾、同曽根遺跡⁴⁸⁾といったそれ以降継続する集落が成立し、この地域の編成がほぼ終了した段階で、高地性集落はもはや存在していない時期である。この点からいっても両地域の歴史的条件が何らかの原因により異なるとしかいいようがない。地域内の動乱が若干早く始まり早く終結した大津川流域に対し、石津川流域はやや遅く始まり遅くまで継続したといえる。

このような両地域における差は、和泉で最大で最古の古墳・岸和田市摩湯山古墳が大津川流域に存在することに示唆されているとしてもよいのかもしれない。又、野々井遺跡の第Ⅰ期のムラ⁴⁹⁾の終末は、石津川流域における地域的再編成の時期と重なり、乳の岡古墳の造営とも重なりあっている。つまり地域再編の動きの中で、野々井遺跡の移動があったのだろう。

第Ⅱ期（古墳時代）

石津川流域の歴史の中での最大の画期はいわゆる百舌鳥古墳群造営開始であろう。それはまさしくヤマト王権の意志として、在地首長への経済外的強制として行なわれ、在地首長はその完遂を通して自らの権威の確立と大王よりの庇護を獲得したのであろう。

先にのべた、摩湯山古墳の系譜は久米田古墳群としてその系譜はそれ自体としてたどれるが、⁵⁰⁾乳の岡古墳の現出は、和泉地域の首長がこれによって交代したことを意味するであろう。そして乳の岡古墳とほぼ近い時期に大王陵が造営され始めたとすれば、大王権の意志をうけて、大王陵造営の在地における最高責任者として君臨したのは、乳の岡古墳の次の首長であった大塚山古墳⁵¹⁾の被葬者であったのだろうか。そして、須恵器生産をはじめとする地域内の体制づくりを行なったのがいたすけ古墳の被葬者であったのだろう。

「環境」において石津川流域の5世紀中葉から後半にかけて存在した集落を、面している河川によって5群に分け、その概要についてもすでに述べた。しかしもう1群の集落が存在する。それは須恵器生産に直接携ったと考えられる人々の遺跡で、すべて中位から高位段丘上に立地している。すでにふれた野々井遺跡と陶器川の上流にある田園遺跡⁵²⁾と辻之遺跡⁵³⁾である。これらのうち田園遺跡、辻之遺跡を丘陵上遺跡として捉え、陶器山丘陵遺跡群として呼称する。これらの遺跡の立地する位置は標高60mである。野々井遺跡は榎丘陵遺跡群の1つとして捉えたい。

今回の調査で検出された古墳時代前期以降の遺跡のうち、最も早く遺跡として成立するのは万崎池遺跡第Ⅶ調査区の堅穴住居群である。この集落は、基本的に2棟の堅穴と掘立柱倉庫1棟を1単位として数時期にわたって存続した集落である。小規模な埋積谷に立地した集落であったと考えられる。5世紀前葉の時期を想定している。泉北窯址群が成立した時期にほぼ併行して存在した集落である。基本的には土師器が日常土器として使用せられ、初期須恵器が少量検出されている。この土器組成からみて、一般的な農耕集団としてこの集落成員を位置づけることが可能であろう。時期によって若干の建物の規模に大小はあってもほぼ安定した生活を営んでいたことが知られる。倉をもち、集落祭祀の跡、墓域も存在しており、この時期の最も基本的な生産単位の集落のあり方をこの遺跡は示している。この集落の廃絶時期が、石津川流域に一斉といえるぐらいに集落が成立しだす時期とほとんど変わらないという点で、この集落の廃絶そのものも政治性の高いものといえる。

ほとんど同時期のムラが西浦橋遺跡にも存在したらしいことは出土する遺物から判っているが、遺構は検出されていない。この遺跡が明確な遺構を伴うのは5世紀後半になってからで、それ以降6世紀後半まで、一時の断絶はあっても、ほぼ同じ所に継続して集落が営まれている。堅穴住居が2棟1単位として変遷した点は、万崎池遺跡第Ⅳ調査区集落と同様である。ただし倉は第Ⅱ期になってからつくられている。さきの万崎池遺跡における集落と最も大きく異なる点は、その出土土器組成である。万崎池遺跡においては、出土する須恵器が5%にも満たないのに対し、西浦橋遺跡SDN2における6世紀初頭の組成では、逆に土師器が5%にも満たない状況である。須恵器生産の拡大によって、土器の組成が、数10年の間に逆転したことを示している。

太平寺遺跡の第Ⅱ調査区沖積段丘面において、明確に確認できる遺構は、さきののべた万崎池遺跡集落廃絶からさほど離れない時期の所産である。堅穴住居2棟が検出されたが、同時併存は無理で、1時期でいえば今の所1棟のみ検出したことになる。恐らく、万崎池遺跡や西浦橋遺跡同様、2棟から3棟が1単位となった小集落があったと推定される。住居地の両側に後の時代の河があり、それによって、この集落がかなりけずられたことは、河の下層に住居址検出面の土層が落ちていることから明らかである。又、50m東の堺市⁵⁴⁾の調査によって同時期の集落が検出されていて、遺跡が東に拡がることが明らかになっている。万崎池遺跡の集落範囲が東西約70m、南北40mとされているが、少なくとも同じ位の集落範囲が想定できる。そして、出土する土器の量と時間中からみて、比較的まとまった集落になる可能性も含まれている。

今回の調査で確認できた3遺跡のうち、万崎池遺跡と他の2遺跡とはその成立時期の差からかなり対照的な遺物組成を示している。それは単に須恵器生産開始直後と展開期における土器組成の違いにとどまらず、鉄滓、フイゴ、製塩土器といった遺物差としてもあらわれている。万崎池遺跡が5世紀前葉のこの地域の伝統的な一般農耕集落の姿を我々にみせているとするなら、他の2遺跡は、百舌鳥古墳群造営を契機としたこの地域の新たな集落のあり方を示しているといえる。

石津川流域の遺跡においては5世紀後半から6世紀中葉にかけての須恵器と土師器の比は大体

第2表 遺跡出土土器数量・比率

遺跡名	全体比率		須 恵 器													土 師 器					数量 比率	備 考				
	現 存 数	土 器 数	蓋 環	カ メ	高 環	冠	壺	埴 台	坏	埴 壇	コ ツ 形	鉢	罎	提 瓶	模 瓶	甗	其 の 他	高 環	カ メ	壺			埴 台	甗	鉢	其 の 他
西浦橋 E1	SDN2 (6C初)	786	525	45	125	24	1		60							6			約20						点 %	
	SDN2 6C後半 ~7C	627	393	54	89	12	34		30							15			約20						点 %	
太平寺 E2	全体	198 79	52 21	128 64	7 4	30 14	21 11	9 5								3 2		3 6	2 4	42 81	1 1		4 8		点 %	
	SKN7	75 81.5	17 18.5	45 60.1	3 4	13 17.3	10 13.3	3 4								1 1.3			3 17	2 11	10 56		2 11		点 %	点数は個体 数。
	SKN6	76 85.3	13 14.7	51 68	2 3	13 17	6 8	4 4												12 92	1 8				点 %	
	SKB1-2	47 68.1	22 31.9	32 68	2 4	4 9	5 11	2 4								2 4				20 91			2 9		点 %	
深田 E3	SD001	564 69.9	243 30.1	140 24.8	212 37.6	60 10.6	15 2.7	34 6.0	1 0.2	7 1.2	24 4.3	11 2.0	4		16 2.8	不明 40 7.1		22 9.1	119 49	59 24.3	2 0.8	2 0.8	不明 39 16.0	点 %	須恵器窯窯 壁、フイゴ、 紡錘車は計 算に入れず。	
	SK006	228 82.5	621 17.5	1207 41.2	942 32.2	198 6.8	47 1.6	112 3.8		12 0.4	218 7.4	16 0.5	1		不明 175 6.0	3 0.5	6 1.0	318 51.2	96 15.5	9 1.5	9 1.5	不明 180 29.0	点 %			
東上 野芝 E4	I期			12 29.3	12 29.3	8 19.5	3 7.3	2 4.9		1 2.4	2 4.9														点 %	製塩土器、 埴輪は数量 に含めず。
	II期			63 77	42 42	24 28	8 16	3 5.3	3 2	6 4	3 2	1 0.7					27 点	48	54	27		14		点 %		
	III期			21 53.8	11 28.2	6 15.4	1 2.6																	点 %		
	IV期			25 83.3	3 10	2 6.7																			点 %	
船 尾 E5			277 25.3	324 29.7	69 6.2	38 3.5	372 34	3 0.3	1 0.1	1 0.1	3 0.3				4 0.4	皿1 0.1									点 %	古墳時代中期 の須恵器土師 器の比率は53 .2%、46.7% である。土師 は含めず。
大園 E6	6C後半	601 83.1	122 16.9	約 490 81.5	35 5.8	45 7.5	2 0.3	25 4.1		2 0.3					たこ 壺42 —	2 1.6			110		数点	約2 数点	4.1	4.1	点 %	壺を一括、数 点は5点とし て計算。たこ 壺は含めず。
船橋 E7	0-I																	12 26	25 53	10 21					点 %	
	0-II																	1 5	3 23	12 14		1 5			点 %	
	0-III	52 61.1	33 38.9	30 57	8 16	10 20		2 4	1 2		1 2							3 9	2 6	15 45	1 3	5 15	5 15	6 6	点 %	
	0-IV	165 52.7	148 47.3	125 76	10 6	10 6	2 1	12 7	2 1	2 1		2 1	2 1					6 3	5 2	87 46	19 9	26 12	13 6	11 5	点 %	
	0-V	114 43.8	146 56.2	91 81	18 16	5 2												2 1	19 13	68 47	12 8	15 10	29 20	1 0.5	点 %	
野中 E8	古墳				1 2.1	19 40.4	1 2.1	26 55.4																	点 %	
楠 E9	見			8 6.8	41 34.8	20 16.9	10 8.5	21 17.8		8 6.8	2 1.7	2 1.7	2 1.7		2 1.7	壺手 不明 1									点 %	

註1. 本文 P112 第34表

註2. 本文 P731 第13表

註3. 中村 浩編『陶邑・深田』P10、11 大阪府文化財調査抄報第2輯 大阪府教育委員会 1973

註4. 樋口吉文『東上野芝遺跡発掘調査報告』P30、31『堺市文化財調査報告』第10集 堺市教育委員会 1982

註5. 北野俊明、樋口吉文『船尾西遺跡発掘調査抄報』P13、14 堺市教育委員会 1978

註6. 広瀬和雄『第1地区の調査』P25『大園遺跡発掘調査概要』VI 大阪府教育委員会 1981

註7. 原口正三、田中 琢、田辺昭三、佐原 真『河内船橋遺跡出土遺物の研究』(2) 大阪府教育委員会 1962

註8. 北野耕平、『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告 第2冊 1976

註9. 藪田香融、網干善教、河上邦彦、奥田 豊、『和歌山市における古墳文化』P8~10 関西大学文学部考古学研究所 第4冊 関西大学 1971

8 : 2である(第2表)。基本的には土師器甕が煮沸機能を担った形で存在している。しかし辻之遺跡や田園遺跡においてはほとんどないに等しいと報告されている⁵⁵⁾。掘立柱建物がかかりの数あることが分っているにもかかわらず、煮沸具としての土器が分らない状態である。須恵器が代用していたのかもしれない。須恵器を極端に日常雑器として使用する和泉地域の中でもとりわけ極端なあり方を示している。このようなあり方は特別としても、同じ石津川中流域右岸遺跡群中の深田遺跡と太平寺遺跡の同じ時期の須恵器の器種構成に大きな差があることがしられる。それは坏(蓋も含む)と甕が器種全体に占める割合が深田遺跡で43.8%と37.5%であるのに対し、太平寺遺跡においては65%と4%であった。深田遺跡における甕の割合が極めて高いのに対し、太平寺遺跡のそれは極めて低い。西浦橋遺跡の6世紀初頭のSDN2における比率も太平寺遺跡と似た数字を示し69.8%と6%となっている。2つの集落で今日みられる遺構としては2棟1単位で成立している小規模集落であるという点で、この地域における相対的位置がほぼ同じであることの証明になるかもしれない。しかし、一方が5世紀後半の時期であるのに対し、一方は6世紀初頭の時期である点で一定の考慮はすべきであろう。

同じ時期の集落として、百舌鳥川流域遺跡群中の東上野芝遺跡で同様の検討をしたところ⁵⁶⁾、全器種の中に占める比率は相対的に下がるが、第Ⅰ期(Ⅰ期—2段階)においては27%と29%、第Ⅱ期(Ⅰ期—3・4段階)で42%と28%と深田遺跡に近いあり方を示している。船尾西遺跡においても同様の数値を示している⁵⁷⁾。

須恵器が本来持っていた実用容器と葬祭用儀器としての役割の半分を、生産開始段階で甕が担っていたことは明らかである。その後の坏蓋の普及による甕の相対的数値が下がったとしても、須恵器の中で最もその特性を発揮できたものが甕であることには変りない。須恵器生産開始の段階でその需要先は決して共同体成員一般ではなかったであろう。須恵器生産の拡大とともに在地集落に何らかのルートを通じて普及する段階であっても、甕本来のもっている意義は極めて高いものであったと考えられる。大甕の所有量こそステータスシンボルとして存在しえたであろう。その点をふまえて先のことを考えるならば、同じ遺跡群にあって、深田遺跡と太平寺遺跡における集団間の格差を認めざるをえないのではないだろうか。そして鉄滓とフィゴの羽口のかかりな量の出土、製塩土器の出土などから野鍛冶的な鉄器生産も行なうような生産集団の集落として太平寺遺跡を捉えることができる。鉄器生産だけでなく、農耕は勿論、須恵器生産にも従事するといった隷属的な集団として太平寺遺跡を捉えるのはいきすぎであろうか。その場合、その直接の支配者として深田遺跡⁵⁸⁾の長を想定するのである。

同じ論理からいけば西浦橋遺跡の5世紀後半から6世紀初頭の集団も同じ位置にあったことになる。それはほとんど同じ場所にしか居住地を選ばなかった点からもいえるであろう。恐らくこの時期の鈴の宮遺跡⁵⁹⁾、豊田遺跡も同じではないかと考える。つまり、深田遺跡の長に統轄される数個の集団が、石津川中流域右岸遺跡群の集団構成なのではないかと考える。

以上にのべたような集団間の関係は恐らくどの遺跡群においてもみられると考えられるが、今

の所同一時期で比較できる資料がなく省略せざるをえない。

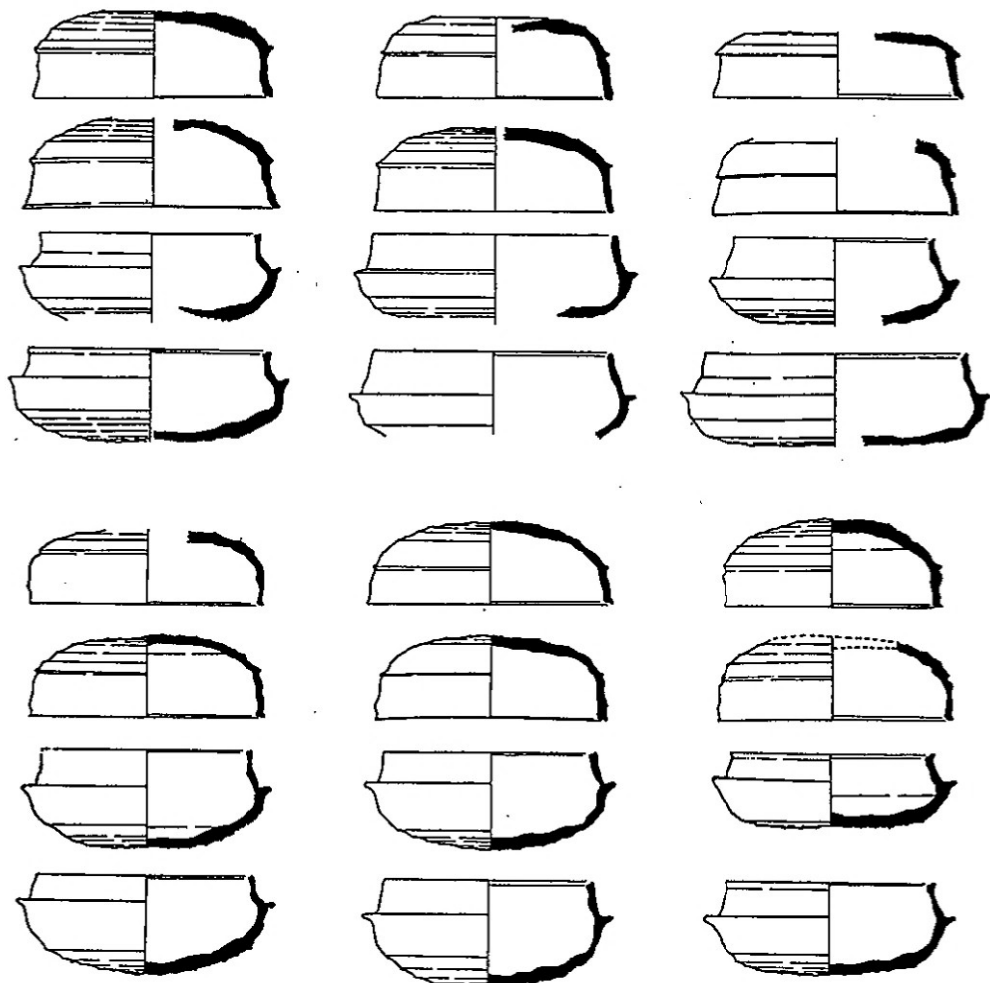
百舌鳥川流域遺跡群の中でも東上野芝遺跡で鉄滓、フイゴ羽口、製塩土器が出土している他、土師遺跡⁶⁰⁾でも同じ遺物が出土している。両遺跡ともその農耕基盤としては余り大きなものは期待できず、最少限の農耕を営みながら何らかの形で大王陵造営に携ったのであろう。具体的に何に携ったかはよく分らないが土師遺跡の南北溝から検出された9基の円筒棺は円筒棺そのもののあり方を見極めた上でしか語れないが、土師氏伝承とは別に、その従事していた内容を示唆しているのではないかと考える。

石津川下流域遺跡群の四ツ池遺跡でも5世紀中葉の堅穴住居と倉が検出されており、初期の須恵器も出土している他、最近の調査でさらに古い須恵器の出土をみている⁶¹⁾。しかし、詳細は不明である。

和泉市、高石市、泉大津市にまたがって存在する大園遺跡は古墳時代中期から後期の最大級の集落跡としてつとに有名である⁶²⁾。弥生時代・古墳時代初頭を除けば、このムラの成立は古墳時代中期である。その後掘立柱建物のたち並ぶ集落がつくられ、6世紀の段階では8~9ヶ所の群にわかれ、数10棟をこえる掘立柱建物が存在していたとされる。このように、5世紀の後半から6世紀の初頭にかけて、この大園遺跡から泉大津市豊中遺跡の地域では、従来の堅穴住居から掘立柱建物にかわることは、すでに知られている。石津川流域についてみた場合、四ツ池遺跡では6世紀前半段階で掘立柱建物に変わっているとされている⁶³⁾が、今回調査した菱木下遺跡第Ⅰ調査区における堅穴住居は6世紀後半とされるものである。又、陵南遺跡⁶⁴⁾、土師遺跡⁶⁵⁾でもこの時期の堅穴住居が残存しているし、野々井遺跡においても同時の堅穴住居がしられている。東上野芝遺跡では6世紀のはじめに掘立柱建物に移行したとされている⁶⁷⁾。このように、石津川流域における大方の集落の住居形式の変化が6世紀後半以降であった中で、唯一の例外として深田遺跡がある。検出された建物はいずれも倉と考えてもいいもので、明確な屋はでていないが、溝に沿った柵列が検出されている。明らかに堅穴住居形式からは出てこない遺構である。この遺跡の裏にひかえた広い土地と初期高蔵地区窯址群に極めて近い位置にあたり、先程のべた土器の器種など含めて、深田遺跡の長が周辺遺跡を束ね、須恵器生産における現地の長として存在したのではないかと考えるのである。5世紀の掘立柱建物群を有する大園遺跡は「ヤケ」に近い⁶⁸⁾その住居景観の特異性と出土する初期須恵器の圧倒的豊富さ一全体量と器種両面で一の点、そしてなによりも「ヤケ」とそれを囲む溝を挟んで隣接する「従者」の屋の存在によって中世の屋敷に近いあり方をこの集落が示している点で、在地首長としての性格をその遺跡総体の中に見出しえるのである⁶⁹⁾。大園遺跡の長に比較して一段下としても、それに近い性格を深田遺跡において見出せるのではないかということである。ただし深田遺跡のその後がどう展開したかは不明であるが、大園遺跡におけるような5世紀後半以後6世紀末葉までのすさまじい展開は、今の所見出しえていず、将来に俟たねばならない。

5世紀段階における須恵器生産の現地におけるあり方は大規模、集中的になされたというより

も、比較的小規模な単位の分散的あり方をしていたのではないかと考える。つまり太平寺遺跡のようなせいぜい数棟単位のムラが点在し、農耕を営みながら、深田遺跡の長の命令の下に必要な労働力の提供を行っていたのではないのだろうか。TK 206—1号窯で「カマ印」と蓋⁷⁰⁾環の器形細部の特徴が一致し、それぞれ3タイプに分けられたとされているが、他の窯址においても3



第1図 TK103 (上段) ON222 (下段) 出土蓋環 「陶邑」Ⅲによる

タイプ前後の同一器種がみられる(第1図)。それは単に、個人差として現われるというよりも、一定のグループの差としてよいものではなかろうか。そして須恵器生産を直接掌握する首長—深田遺跡の長を想定している—が小単位の生産集落を把握し、ヤマト王権から地域首長に要求してくる貢納物の生産を行っていたのだらう。どの集落から出土する須恵器も決して同一手法をもつ同一器種でない所から、生産集団への須恵器の移入は、自分たちの生産物をそのまま自分たちのものにするのではなく、首長からの配分品として手に入れたものなのだろう。

最近、多くの人が「陶邑」について論じている。例えば、田辺昭三氏のいわゆる陶邑の一元的供給体制論⁷¹⁾に対する、新たな地域での初期須恵窯の発見からの問題提起や窯分布、窯体構造から

の研究⁷²⁾などである。しかし最も本質的なヤマト王権と「陶邑」の関係、工人組織の問題、「陶邑」地区間の関係、各地域と「陶邑」の関連等は未だ未解決のままである。

近年、宮城県大蓮寺窯址⁷³⁾、愛知県菟投窯址⁷⁴⁾、香川県宮山窯址⁷⁵⁾などから、「初期須恵器」が出土した。このことについては必ずしも「陶邑」からの伝播ではないかもしれないという説と、他地域への工人を伴った「陶邑」からの移動⁷⁷⁾という二説に代表されている。前者の考古学上の根拠は主として文様や技法上の問題から論じられていて、朝鮮半島から直接伝えられた可能性もあるとされるが、基本的に兼ねそなえた器形、器種構成からみて、私には直接的な半島色は薄く、日本化の経過の中で成立したように思われる。又後者については基本的にはそうであると考えられるが、一元的供給体制についての一定の見直しは必要となろう。つまり、5世紀末から6世紀の前半にかけての、地域窯成立以前の極めて初期の段階に、地域窯が一部地域で成立し、菟投窯址群では「陶邑」とほとんど変わらない時期の成立の可能性が論じられ、その器形に特異なものも存在し、それ以後連綿と窯が存続していくといったあり方⁷⁸⁾、大蓮寺窯址でもそれ以後の窯址の存在が見通されている状態⁷⁹⁾の中で、「陶邑」が果してどの範囲に、どの程度供給していたかについては、再検討が必要である。少なくとも従来の6世紀前葉の地域窯の成立までは、一元的に「陶邑」から供給されていたとする状況に大きな考え方の変更を強いるものである。つまり、同じ大阪府下にあっても、須恵器と土師器の比率は生産地に近い和泉と摂津では全く異っており、和泉北部において須恵器と土師器の比は8：2であるのに、摂津では圧倒的に土師器が多いとされて、河内の船橋遺跡がちょうど中間的なあり方を示している点、さらに近畿地方外の他地域ではめったに集落からは出ず、ほとんどが古墳又は祭祀遺構からの出土である点から「陶邑」産須恵器の行方は極めて重要な問題として残る。宮山窯址、大蓮寺窯址のその後、池の上Ⅰ式の破片を採集している福岡県小隅窯址⁸¹⁾のその後の展開など、古い地域窯の成立以降の展開如何によっては、「陶邑」の須恵器の供給先はヤマト王権中枢部と畿内を中心とした地域、とりわけ和泉北部の在地集落を中心としていた可能性も存する。勿論これ程の限定されたものでなくても、古墳が分布している地域全域に全面的に供給していたとする点は大巾な修正を余儀なくされるであろう。

初期須恵器の段階における地域窯の成立は、泉北窯址群の成立と同様渡来系の技術者集団が直接かかわったこと、つまり工人の移動が存在したことは確かであろう。しかし考慮せねばならない点は「陶邑」の成立そのものが、ヤマト王権の意志であり、その意をうけた在地首長の意志であったということである。つまり、「陶邑」の意志で各地域に工人が移動するのではなく、あくまでもヤマト王権が地域首長への贈与としての性格をもたせて工人を派遣したと考えられる。工人は単に須恵器工人としてだけでなく、先進的な諸知識の伝達をその地域に行なったことは想像に難くない。菟投窯址の中で初期須恵器生産が東山地区と城山地区の2地区で行われている。とりわけ東山111号窯はTK 216号窯よりわずかに古い。周辺でより古式の須恵器がでて、さらに古い窯址がみつかる可能性⁸²⁾があるとすれば、一須賀窯址、TK 73号窯址などとともに最も古い時期にこの地域に工人が派遣されていたことになる。器形の一部に「陶邑」でみられないものもあ

って、このことを裏付けている。大蓮寺窯址がTK 216号窯址からON46号窯址の時期であるとすれば、理論的にはヤマト王権の意志により、狹投窯址群から工人が派遣されてもいいのである。って、「陶邑」中心史観は、再検討の時期にきていることは確かである。

泉北窯址群の全期間を通じての展開を論じるだけの力量は今不足しているので、その成立時期の問題についてのみふれるとすれば、「環境」でのべたように、泉北窯址群の成立は百舌鳥古墳群造営に直接的契機をもっている。このことは狹投窯の成立と周辺首長墓造営の一体性と軌を同じくするものであろう。

須恵器生産の開始は、摩湯山古墳以降の和泉における在地首長としての百舌鳥古墳内いたすけ古墳の被葬者が、ヤマト王権の意志一贈与的側面と収奪的側面を合せもった一により「郡」レベルの首長としての後の大鳥郡域の首長と、同じく後の和泉郡域の首長に命じて須恵器生産を開始させたのであろう。この段階での窯址は泉北丘陵におけるTK73号窯であり、信太山丘陵における和泉市濁り池窯⁸⁴⁾である。すぐあと、その周辺、とりわけ泉北丘陵においては大野池地区、榎地区でも生産が開始される。大野池地区（光明池地区）の成立をどう捉えるかは、信太山丘陵における窯址の動向が詳細に分らない為、判断に窮するが、少なくとも濁り池窯周辺の系譜を直接受けて成立したものではないように思われる⁸⁵⁾。その意味で西村氏が三大地区⁸⁶⁾とするのは信太山丘陵に立地する窯の展開の独自性を否定することになり一不明な点が多すぎる点でやむをえない点は認めた上で一後のTN地区窯址群成立のもつ意味を失わせめるのではないかと考える。少なくとも泉北窯址群の須恵器生産が、2つの地域首長を媒介として行われている点の基本的認識が欠落しているのではないかと考える。又I期からII期における窯の造営が1時期1基を原則⁸⁷⁾としているとされているが、決してそうではなく、すべての窯が複数回数の焼成を行っており、その結果としてほとんどの窯で複数型式の須恵器が出土している。その点でみるとTK73号窯出土須恵器のうちの新しい時期の遺物はTK85号窯の遺物と交叉しており、TK85号窯とTK305-1号窯とTK87号窯は交叉している。少なくとも初期の段階においては薪などの現地調達を基準にその立地を選定していたのであろう。そして現地の首長が複数の窯で複数の生産小単位を使役しながら経営していたと考えられる。

生産された須恵器が、どのように流れていったかについてはほとんど解明されていず、先にふれた初期須恵器窯の他地域での検出によって、より複雑化していく傾向にある。この問題にふれる前に一応、初期須恵器について整理しておく。

生産開始時における器種は、さきにふれた甕と祭祀の為の壺、器台、高坏、甗などであって、当初朝鮮半島から入った段階の坏は手づくねに近い渡来人の雑器であったものが、次第に形を整えられ、地域の供膳形態の主要な器種となっていくのだろう。TK73号窯からTK85号窯、そしてTK216号窯に至って坏蓋の定形化、坏身・坏蓋の回転ヘラ削り技法の確立、器形の統一などに示される定型化を完了する。同じ時期に大型無蓋高坏も一般化しはじめる⁸⁸⁾。そしてこの高坏によってもたらされた長方形もしくは台形の脚部すかしは、それ以前からあった有蓋高坏にも導

入され、短脚1段有蓋高坏として確立してゆくのである。坏蓋形高坏の脚部には円、楕円の小孔はあけられても、有蓋高坏のような長台形スカシはあけられることなくTK 208号窯以降消えてゆく。このように須恵器の日本化における画期はむしろこの時期に設定してもいいのではないのだろうか。そして初期須恵器を定義するならむしろ、TK 216号窯以前—中村編年によるI型式第1段階—をさして呼ぶべきなのではないだろうか。以上のような技術上の進展が、この時期、半島からの新たな波として入ってきたのか、すでに入っていた諸型式の統一・進化として成立したのか不明であるが、蓋坏などが当初手もちヘラ削りを施されていたとしても、回転ヘラ削りする技術はすでにもちえていたのであり、「新たな波」がなくても工人集団間の文化的技術的交流の結果として器種の上での淘汰、器形の斉一化を含めて日本化が完成されたと考えるべきなのであろう。

石津川流域における集落において最も古い須恵器を一定量出土している遺跡としては四ツ池遺⁸⁹⁾跡がある。少量であれば、万崎池遺跡、太平寺遺跡、西浦橋遺跡でも出土している。しかし一般的にはというより、この流域において集落が成立しはじめるのはTK 216—I型式第2段階—の時期からで、東上野芝遺跡、陵南北遺跡、土師遺跡などがそれにあたる。そして、それ以降これらの集落以外でも先にあげた流域の古墳時代集落で、すでにのべた須恵器8、土師器2の割合の土器組成をもつにいたるのである。

このような流通とでもよべるようなあり方はこの時代における特殊な生産品—この地域ではもはや特殊でもなんでもなくなっている訳であるが—がどのような貢納—分配の体系のもとで成り立っていたのであろうか。

5世紀におけるヤマト王権の在地首長へのあり方は、とりわけ、百舌鳥古墳群造営以降、極めて直接的で強い支配体制下にあったと想像される。大王陵の完成を基本的使命とされていた中でも、須恵器は基本的にヤマト王権への貢納品として存在したのであろう。そしてヤマト王権から各地域首長への下賜が行なわれるとともに、在地首長も首長的私有として、在地内の諸首長に分配したのであろう。ヤマト王権との全面的隷属関係として在地首長があったのではなく、在地首長の余剰品に対する私有化、それにもとづく商品的交換が、かなり日常的に行なわれない限り、和泉北部の遺跡における須恵器の多量性が説明できないのではないだろうか。そしてその余剰品の掌握は国レベルの首長というよりむしろ郡単位レベルの首長が行ない、上位首長への豊富な貢納を通して、よりつよい庇護をかちとったのであろう。ヤマト王権が部族連合から脱却し、ヤマト王権の直接的部族支配が貫徹しはじめる5世紀後半以降⁹⁰⁾、須恵器生産についての支配・収奪もより強まったであろうが、在地首長はたくましく、自己の在地における權威の強化と財力を蓄積していったのであろう。

5世紀末葉から6世紀前半にかけて、各地に地域窯が成立しはじめる⁹²⁾。各地域への工人の派遣は、さきにふれたヤマト王権の須恵器生産への直接的介入の一環として行なわれたと捉えることができる。つまり、ヤマト王権の在地首長への新たな介入であり、そのことを通じて貢納制の変

革と地域的再編成を行なったのであろう。6世紀後半以降、この地域でも陶器千塚、牛石古墳群、桧尾塚原古墳群、山田古墳群、三林古墳群、信太千塚など、各地区に群集墳が築造されるようになる。このことは、須恵器生産集団の自立化の表現であるとともに、地域的再編成後の基制を通じての政治的 direct 支配としてもあらわれたのであろう。⁹³⁾

今回万崎池遺跡第Ⅱ、第Ⅳ、第Ⅴ調査区、菱木下遺跡第Ⅱ、第Ⅲ調査区で、総数 900基をこえる6世紀から8世紀の土塚墓が検出された。すべての古墳時代の成員が、横穴式石室をもつ古墳に葬られる訳でないことは誰もが知りつくしていても、古墳以外の墓が検出されて、はじめてそんなものであったかと納得するのである。そして、改めて最近まで行なわれていた土葬のあり方に近いことが分る。万崎池遺跡第Ⅱ調査区の土塚墓は他区に比較して大きな土塚が多い。他調査区でも木棺墓は検出されていず、限定された狭い墓域しか与えられていない。なお菱木下遺跡においては8世紀までの集落は確認できているが万崎池遺跡では今の所集落は検出されていない。しかし、それ程遠くにはなかったろうと推定される。

菱木下遺跡第Ⅰ調査区で1棟、西浦橋遺跡で6世紀後半の3棟の堅穴住居が検出された。菱木下遺跡における倉の存在からも少し集落は南に拡がり、堅穴住居も増加すると考えられる。菱木下遺跡では同時期の倉も存在するが、住居としての掘立柱建物への変化はさきにふれたように6世紀末から7世紀初頭であった。

西浦橋遺跡におけるこの時期の土器の出土量は6世紀初頭の時期とほとんど変わらず、基本的に大きな変化がないことを示している。しかし菱木下遺跡の掘立柱建物の中に堅穴住居と方位を同じくするものがあり、決定的なことはいえないが、同時期に存在した可能性も存する。その場合でも検出されている掘立柱建物は2間×2間のものが多く、堅穴住居に比較して傑出しているような状況ではない。何らかの差を見出すとすれば、住居形式しかない。極めて多い須恵器の出土を除けば一般的な田舎の集落景観であり、大園遺跡の6世紀後葉の掘立柱建物群集落と比較するなら、都会と田舎の差として当時の人々の目には映ったであろう。

菱木下遺跡と同様に、6世紀後半まで堅穴住居がのこり、6世紀末から7世紀初頭に掘立柱建物に変化する集落として榎尾川中流域の和泉市万町北遺跡⁹⁴⁾がある。

和泉地域において、海岸部の集落と一部の掘立柱建物集落を除くほとんどの山里の集落が、6世紀末から7世紀初頭にかけて、一斉に堅穴住居から掘立柱建物に変化することの意義をどこに求めるべきなのだろう。少なくとも6世紀末迄に、100棟をこえた大園遺跡が露のごとく消えさること⁹⁵⁾に端的に示される、劇的な地域内の再編成が行なわれたことは確かである。そしてその劇的変動の契機は百舌鳥古墳群造営の中止以降のヤマト王権の質的な変化によるものであったろう。石津川流域における6世紀末から7世紀の集落は明確なものとして菱木下遺跡ぐらいで今の所あまりしられていない。しかし⁹⁶⁾陵南廃寺、⁹⁶⁾土師観音廃寺の造営からみて、在地首長は中央政権の下での一成員としてではあるが、激動の時代をたくましくその地域で生き抜いたことを証明している。

第Ⅲ期 (奈良時代～中世)

今回の調査における奈良時代の遺構としては、西浦橋遺跡沖積段丘上の3間×3間の掘立柱建物と洪積段丘上の溝、菱木下遺跡の数棟の建物、菱木下遺跡第Ⅱ・第Ⅲ調査区、万崎池遺跡第Ⅳ・第Ⅴ調査区の土城墓などがある。

6世紀後半そうであったように8世紀においても西浦橋遺跡と菱木下遺跡の同一ムラの中の2群として存在したようである。この時期、菱木下遺跡は2間×3間と2間×2間以上の屋2棟と倉を1単位とする建物群が検出されている。軸でみるかぎり約3回の建替が行なわれている。建替により特別大きくなったり、小さくなったりしないでほぼ変らない建物規模を有している。これに対し西浦橋遺跡の1棟あたりの建物規模は大きい、今の所倉は検出されていない。南に屋がもう1棟ぐらい検出されるのだろう。

石津川流域には奈良時代の遺構は余り顕著に出ておらず、鈴の宮遺跡⁹⁷⁾において井戸が1基、四ツ池遺跡⁹⁸⁾で2棟の掘立柱建物が検出されているが、和泉市池田寺遺跡⁹⁹⁾において検出された7世紀後葉から9世紀前葉にいたる81棟の建物群の存在のよう⁹⁹⁾なあり方は、少くとも現在まで知られていない。6世紀段階まで石津川中流域の集落景観とほとんど違わなかった集落が、在地首長主導で開発された結果、大きく様相を変えた集落として池田寺遺跡がある。7世紀以降のそれ以前との落差は、中央政権の一成員としての在地首長の政治的、経済的強力を示している。6世紀段階の大園遺跡といい、7世紀以降の池田寺跡周辺といい、石津川流域で今迄に検出されている集落のあり方とあまりに異なることの意味をどう理解すべきなのだろう。たまたま、石津川流域に検出されていないだけなのか、本来のものなのか、今後の大きな課題である。百舌鳥陵南廃寺、土師観音寺廃寺など奈良時代寺院跡の存在は部分的には確認されているが、その中心部周辺の状況を、十分に掴みえていない点も問題解明の上での障害となっている。唯一7世紀に入って成立する深井清水町遺跡¹⁰⁰⁾は8世紀にも継続しているが、建物等が検出されていず、その全貌解明は将来にまたねばならない状況である。

今回の調査では平安時代初頭の遺構はほとんど検出されていない。しかし10世紀の後半にいたって再びこの地域に新たな開発の動きが生じ、建物等種々の遺構が検出された。

西浦橋遺跡の57年度の調査で、現在の田圃の畦畔とその方位を同じくする畦畔が検出され、10世紀後半頃の黒色土器が出土した。遺物としては今回の調査でも検出されている。菱木下遺跡第Ⅱ・第Ⅲ調査区では10世紀末から11世紀初頭に集落が成立している。万崎池遺跡第Ⅳ・第Ⅴ調査区においても10世紀後半頃の掘立柱建物が全部で5棟検出されているが、区域外にのびているので、もう少し数はふえると考えられる。ただし同時期に何棟になるかなどは不明である。2群の建物群があったと考えられる。又この遺跡の第Ⅱと第Ⅲ調査区の中央にある谷の中に10世紀後半の土堤が築かれていることが判明している。太平寺遺跡においても、平安時代後期と平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけての掘立柱建物が検出された。

余り建物群についての同時性は明確にはできないが、10世紀後半がこの地域における新たな画期にあたることは確かである。泉北窯址群での須恵器生産が徐々に行なわれなくなって、9世紀

末葉には生産を停止するという過程の中でこの地域のムラがどう変容していったかについての明快な考古学的な資料を欠いている。ただ、10世紀後半にみられる新たな動向は、この須恵器生産の停止と基本的に連動するものであっても、あくまでも、段丘上とその周辺への農地拡大の為の開発という点で全く新たな動きとして捉えるべきであろう。

10世紀後半の段丘上とその周辺への開発の動きは、結局十分な成功をおさめることなく、万崎池遺跡の集落はどこかへ移動していく。しかし万崎池遺跡にみられる2間×4間、2間×5間の2群の主屋の住人が、西にある谷に、幅5m、高さ1m、推定長45mの土堤を築造したと考えられる。地山を少し掘削し、部分的であるが版築を施すという、かなりの恒久性を考えた溜池の土堤の築造である。この溜池はここだけでなく北側にも造られていたようで、小規模な連続的溜池を開発集団がつくったことがわかる。水田規模が不明である為どの程度の田を満す為の溜池なのか分らないが、在地領主層のこの地域における新たな農地の開発の一つのあり方を示している様で、極めて重要な遺構といえる。2群の集団は在地領主の物的人的援助によって、築造された土堤溜池の用水によって可能な耕作を行ったのであろう。しかし結果としては継続したものとならず、その耕地と建物を放棄したのであろう。

菱木下遺跡第Ⅱ、第Ⅲ調査区に10世紀末から11世紀前半の時期に2群の集落一仮に第Ⅱ調査区の集落を西群集落、第Ⅲ調査区の集落を東群集落としておく一が成立する。万崎池遺跡における開発の失敗と対照的に、この集落は15世紀までその規模の変動はあっても継続する。

調査担当者はこの集落を大きく3期に分けている。即ち第Ⅰ期（10世紀後半から11世紀前半）集落の成立の時期、第Ⅱ期（11世紀後半から14世紀末葉）釈尊寺が創建されるとともに集落が最も屋敷地として整う時期、第Ⅲ期（14世紀末葉から15世紀末葉）ほぼ集落が消滅に向い、この地域一帯が現景観としての耕地になっていく時期の3期である。

さきにふれた西浦橋遺跡の沖積段丘面の10世紀の水田開発と経営を、段丘上の耕地とともに菱木下遺跡の集団が行なったという確実な根拠はないが、西浦橋遺跡の水田が今日に至るまでほぼ連続して追跡できること、しかも、かなりの面積を想定できることと考えあわせるなら、菱木下遺跡の集団と西浦橋遺跡の水田の関連も当然考えられることである。そして万崎池遺跡の集団が洪積段丘上の開析谷を利用した水田であった点で、いかに溜池灌漑を試みても、水の確保とその容量の限界性の故に挫折したのであろうし、菱木下遺跡の場合、沖積段丘上の水田経営が用排水の点で成功したといえるであろう。

菱木下遺跡における変遷を先の担当者によるⅢ期区分に従って略述する。

第Ⅰ期の集落は西群集落と東群集落では若干の時期差があって、まず東群集落のSBP20が建築され、しばらく後に西群集落の倉SBP2と小屋風のSBP3が建てられる。SBP3が屋としては余りに小さい為、倉に伴う屋が北にあると想定している。11世紀前半の時期である。

第Ⅱ期の第1期ともいえる11世紀後半から12世紀前半にかけては西群の中でも3群に分けられる。SBP5とSBP6とSBP7である。SBP4はSBP5の建てかえもしくはその逆であ

ろう。SBP5と6の間にはSDA21が存在し、両者を分けている。2棟の倉と同一軸をもっているのがSBP7で、SE3はそれに付属するのだろう。倉しか検出しえていないが屋が南北にそれぞれ存在したのだろう。いずれにしる余り大きな屋でも倉でもなく屋敷としても方20m位であったと考えられる。その点からSBP6と7は分けられると判断した。

次の段階がこの西群の中で最も大規模な屋と屋敷をもつ時期である。一応第Ⅱ期第2小期としておく。SBP8を中心として溝が東西の両側に掘削され、SPF1の柵をもつ時期である。倉を伴わない点で問題も残るが、一応約25×25mの屋敷と考えられる。この建物の時期としては、SBP7の軸に最も近く、わずかに軸を東にふった段階である為、一応SBP7に連続する時期と考えた。SPF1の北端とSDA22の北端がほぼ同じであるので屋敷の北限をここに想定した。又SDA25の南端をもって屋敷の南限とする。SE5はこの時期のものと考えたい。なおSDA22と23の間が門であったろう。12世紀後半から13世紀中頃を考えたい。

第Ⅱ期第3小期としてはSPF3とSPF4により南北を区画し、SDA24・25で東を区画している時期である。前小期のあと、SBP9の屋とSBP12の倉がセットになる1群とSBP11の倉とセットになると推定される屋の1群の2群に分かれたことになる。13世紀後半の時期と考えられる。

第Ⅱ期第4小期になればほとんどの溝、井戸は埋没し、ただSBP14・15が残るのみとなる。14世紀であろう。

第Ⅲ期にはすでにふれたように集落は完全に廃絶し、徐々にこの地が農地化されることになる。東群の変遷についても略述すれば次のようになる。

第Ⅰ期についてはすでにふれたように10世紀末から11世紀前葉の頃始めてこの地にSBP20がたてられる。2間(以上)×2間(以上)の規模をもっている。SDA36などの溝はまだ掘削されていない段階である。

第Ⅱ期第1小期としてはSBP18とSBP19の2棟がこの時期に属する。前者が2間×3間の東西棟、後者は1間(以上)×6間の大きな東西棟の建物が予想される。この両棟が対として存在したのか、分かれていたのかという問題であるが、同一場所に同一方向に建替えが行なわれ、その途中段階で区画溝が掘削されている点からみて、本来的に2群の屋敷が存在していたと考えられる。この時期にはまだ区画溝は存在していない。土壙SKA381もこの時期に属していたと考えられる屋敷墓である。11世紀後半から12世紀中頃の時期なのだろう。この時期近い時期に釈尊寺が建立されている。

第Ⅱ期第2小期としては西群のSBP8の時期即ち最も屋敷として整う時期である。東群においてもこの時期が最も屋敷景観が整い、典型的な中世村落が成立するのである。即ちこの時期4区画が溝により成立したとされる。大きくみれば田の字状に4区画なのであるが西北の区画の東西辺が比較的長く、約30mある。南北辺約20mである。建物の1辺を示すような建物が検出されているが、軸からみてこの溝とは同時期と考えられない。西南区の南北辺は不明であるが30m位

と推定される。ここにも建物の断片がみられるが、その軸は次の段階の建物群の方位を示していて、区画内に井戸も検出されたが掘削時期は不明で14世紀には埋まっている。東北区には先の1間以上×6間のSBP19の建替としての2間(以上)×4間の東と南に廂をもつ大規模な建物が存在する。屋敷地は東西約25m、南北は不明である。東南区はSBP23と主屋と考えられるSBP21である。前者は2間×3間で後者は1間以上×4間である。この区は比較的せまい溝で東を区画している。東西辺は約20mで、南北は不明である。4区に画する溝はSDA28、31、32、33、35、36、37、38である。ただしSDA35と36は本来は用水路として使用されていたと思われる。いわば幹線水路であった。この溝を縦軸にして区画されていたと考えられる。4区間の中で建物規模からいえば東北区が最も富める人の屋敷だったと考えられる。この4区間が姓を異にする集団の集合なのか、同族集団の集合体なのか最も大きな課題として残る。SDA28からの出土遺物が12世紀末から13世紀前半であるとされており、この溝の掘削、そしてこの区画の成立はほぼその頃ではないかと考える。

第Ⅱ期第3小期としては西北区のSBP17、西南区のSBP16とSDA34、東北区のSBP26、東南区のSBP25、24の2棟である。東北区の住居規模が小さくなり、東南区の北建物が前小期のSBP23に比較してSBP25は大きくなっている。これだけをとり出せば東北区と東南区の豊さがほぼ同じになったといえる。この時期の明らかになっている建物規模はすべて東西4間である。

担当者が釈尊寺の寺建物が存在したとしている高台遺構はその基本的方向としては第Ⅱ期第2小期以降としてよいのではないか。つまり、創建時に近い遺構は今回見だしえず、この高台に堂がたてられていたとしても、その基壇状の遺構の東側辺は東群集落でも最も新しい方位を示している。

第Ⅱ期第4小期の建物は余り明確にはなく西北区SBP17が唯一の可能性のある建物である。高台につくられた井戸の埋没状態からみて、第Ⅲ期の集落もあったと考えられるが少なくとも建物そのものは検出しえていない。

なお4区画のうち西南区のSE15を除いて井戸が検出されていないが、恐らく水脈のある西南区の西から高台遺構周辺に集中的に掘られたのであろう。

以上少々長くなったが、調査結果にもとづきⅢ期にわたる集落変遷をのべてきた。東西の集落の屋敷景観がかなり異なり、西群集落が溝と柵をもって区画しているのに対し、東群集落は溝をもって区画している。それは主として立地の差として行なわれたものと考えられる。西群集落で溝を部分的に掘った場合一定の湧水はあっても溢れることはないのに対し、東群集落においては埋積谷に立地していることから常に排水路が用意されねばならなかったのである。又建物規模からいえばSBP8が最大で87㎡を有し、SBP22は3間×4間の2面廂として61㎡である。しかし屋敷地としてはほとんど差はないと考える。従って第Ⅱ期第2小期においては東群集落と西群集落の質的な差は認められないが、他の時期においては、西群集落よりもやや東群集落の方が優位性

をもっているように思われる。しかしそれ自身質的なものではなく、あくまで量的にやや優るといった程度の差である。

西浦橋遺跡において13世紀の掘立柱建物が中位段丘上と沖積段丘に検出された。中位段丘のそれは2間×5間の南北棟、沖積段丘上のもは4間×4間（以上）とかなり大きな建物であるが、他の建物が検出されておらず、柵、溝等も検出されていない。しかしこれらの建物の検出によって13世紀の沖積段丘上における農業生産がより活発に行なわれたことを示している。このことはとりもなおさず、菱木下遺跡における集落の安定的拡大の基盤として沖積段丘上の水田が存在したことを示している。

つまり、今回の調査における須恵器生産の停止後のこの地域における大きな画期としては、10世紀後半の開発一決して順調にことがはこんだ訳ではないが一の時期と12世紀後半から13世紀にかけての農業生産の拡大の時期をもってあてることができよう。

この時期の石津川流域の集落のあり方として、今回の調査地域における動向と対比できるのは鈴の宮遺跡¹⁰¹⁾である。まだ本報告がなされていない為詳細な比較はできないが、10世紀後半に2地区に4間×5間、3間×4間の建物がつくられ、新たな開発の拠点が形成される。そしてしばらくのち10世紀後半から11世紀初頭にかけて、後の古文書に仏光寺と記された基壇を有する寺院建物が建立される。そして13世紀には井戸をもつ3間×3間の建物の他、6棟の掘立柱建物が検出されている。10世紀後半の集落の成立、しばらく後の寺院の建立、13世紀の新たな集落の展開—11世紀から13世紀までの動向は不明であるが一といったあり方は菱木下遺跡でみられた歴史的流れに極めて近いものである。なおこの集落も14世紀以降集落は廃絶するとされている。

さらに新たな例をさぐれば、すでに何度も登場したが、大園遺跡がある。7世紀に消えた大集落の跡が農地として利用されたと考えられるが、その後新たに集落が営まれるのは8世紀の段階で、建物が3、4棟点在している¹⁰²⁾。9世紀の様子はあまりよく分らないが、明確な形で建物が現われるのは10世紀である。第2阪和国道と府道松原泉大津線が交叉する付近の段丘上に、2間×2間の倉庫を伴った恐らく2間×3間の四面廂（角柱は欠けているが）の建物、3間×4間の建物、それに倉庫などを伴った巨大な1棟の建物などの1群—西群集落と仮称—と、この地から東北430mに同じ頃の11棟の建物群¹⁰⁴⁾—東群建物と仮称—の2群が検出されている。巨大な建物は総面積115㎡もあり、在地領主に近い有力農民層であったことは確かである。2群の建物群はいずれも2～3時期の変遷を重ねたようである。しかしいずれの集落も11世紀に同一場所で継続することなく、先的大型建物から西南約250m離れた位置に2～4棟で1単位をなす3群の建物群が検出されている。最大建物規模が84㎡でいずれも柵と井戸を伴っている。12世紀になると井戸は検出されても明確な建物は検出されていず、13世紀になると、国道開通前の景観が現出するようである¹⁰⁵⁾。

大園遺跡における10世紀以降の集落変遷が同一位置における継続的な建替えとして現われず、比較的短期間で変移していく事実は同一集団の長期的安定的存在がなかったとしてよいのではな

かろうか。そしてこの集落が単に段丘上だけに生産基盤を有していたとは考えられず、低位段丘の下に拡がる後背湿地にもその基盤があったと考えられるが、基本的に段丘上の水田が決して安定的でなかったことが集落位置を点々と変えさせた要因なのではなかったのだろうか。

以上、8世紀の集落形成以来、10世紀に新たな開発がこの段丘上で行われ、その中心となった集団は変わったかもしれないが、一応継続して集落が営まれていることは今迄の調査から明らかになっている。これらの事実に加え、もう一つの重要な事実がある。それは、東西両集落の中間的な位置に平安時代後期の寺院一堂のみの可能性が強いが、¹⁰⁶⁾の建立がなされていることである。あまり明確な年代は限定できないが、先にみた菱木下遺跡、鈴の宮遺跡における集落の成立以後のある時点で寺院が建てられている事実は決して見落してはならない事実である。高石市において、¹⁰⁷⁾同一時期の集落と寺院が併存する遺跡は他にも2ヶ所みられ、大園遺跡の西にある専称寺、北にある大雄寺がそれである。¹⁰⁸⁾

すでにふれたことのある標高60mの中位段丘上に立地する和泉市万町北遺跡においては6世紀以降連続と集落が営まれているが、8世紀から9世紀の建物が建てられて後10世紀から11世紀の建物群が約20棟検出された。そして、建物群は5群以上みられる。1群は2棟～4棟で、比較的短い柵によって他の建物群と区画されている。10世紀の5群の建物群の内1群は先行してこの地に住んでいたとされている。この1群から新たに4群に分かれたのか、成立の次の段階で一斉に建物が増加したのか不明であるが、それぞれの建物群の格差は余りみられない。この万町北遺跡は13世紀はじめの建物があってのちこの集落は廃絶する。10世紀における活況と13世紀後半以降の廃絶の問題解明はこれからである。

貝塚市畠中遺跡¹⁰⁹⁾も好資料である。この遺跡は縄文時代早期の押型文を検出した遺跡である。遺跡は近木川の低位段丘の縁辺にあたりT.P.13m前後である。

この遺跡の成立はやはり10世紀である。余り大規模な建物群を形成していないが、大旨4群の建物棟がみられる。屋が1棟だけ、もしくは屋と倉が1棟づつといった小規模なものである。建物は150m前後の間隔をもって存在している。建替はせいぜい2回で、1回のみのももある。集落のすぐそばに近義堂廃寺が知られており、このムラの成立以後に創建されたと考えられている。その後の集落実体は十分には捉えられていないが、再びこの地に集落の実体をもつのは13世紀、鎌倉時代に入ってからである。この時期も群単位としては3群の建物が知られている。うち9区で検出された3間×6間の東に1間×4間の張り出し、西に1間×4間の張りだしがみられる建物と2間×2間の建物の四面廂がつき、さらに西に2間×1間の張り出しをもつ建物が特に大きい。建物17とされているのが101㎡、建物16は74㎡である。10世紀の建物のうち屋として使用しているものの平均面積が38㎡である。10世紀における集落内での際だった階層差は余りみられないが、第13区の建物群がこの中では最も有力な集団としてありえたと考える。鎌倉時代の大型建物は調査区西北で検出された同時期の水田の有力農民層として存在したのであろう。この集落も室町時代以降、現景観が現出したようである。畠中遺跡の10世紀における複数の建物群をも

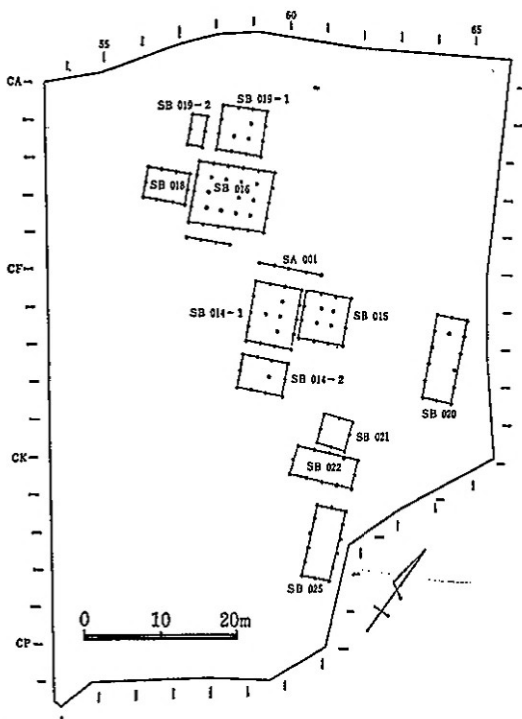
つ集落の成立、寺院の建立、13世紀の新たな開発等の歴史的動きは、和泉の各地でみられた集落の展開の1つの典型として存在することが確認できよう。

以上和泉における代表的な10世紀から13世紀の集落について略述してきたが、最後にまとめとして2・3問題を整理したいと思う。

1. 集落の景観形態について

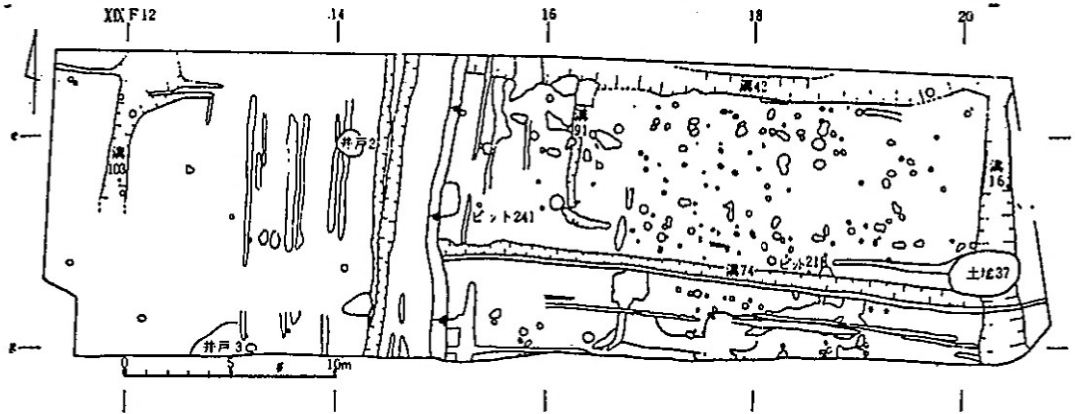
かつて筆者は中世の集落についての若干の分類を行なったことがある¹¹⁰⁾。AからEの5タイプに分類した。しかし今日的に見て根本的な問題認識の甘さを痛感している。つまり森をみずに林を見ていたということである。以下今回の調査成果をふまえ修正を行いたい。Aタイプとは奈良時代以降一和泉地域では6世紀末以来一の基本的な住居形態で、主屋と副屋と倉がセットになり、比較的簡単な柵、溝等で区画されているタイプである。副屋以外に下人等が住んだかもしれない小屋状の施設があったとしても、むしろこのタイプに属するものとした。そしてかつてBタイプとしたうちの¹¹¹⁾上牧遺跡、¹¹²⁾安満遺跡もAタイプと修正する。このタイプは基本的には大園遺跡の11世紀の建物群までつづくし、万町北遺跡における10世紀の建物群もこの中に含まれる。しかし万町北遺跡のまとまりをもった一群と畠中遺跡における一棟もしくは2棟の建物群が全く同一の質を有していたということではなく、Aタイプの中の格差として捉えるべきであることは勿論である。

新たなBタイプとしては基本的には12世紀後半から13世紀前半にかけて成立をみる、柵と溝に



第2図 万町北遺跡10世紀建物群遺構図
『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要』Ⅱ 一部改変

より明確に区画される集落である。菱木下遺跡の東群集落を典型とするタイプである。西群集落の中では一応SBP8の建物をもってそれにあてたい。奈良県若槻庄遺跡¹¹³⁾で検出された環濠の屋敷はその濠巾などから、次のCタイプとして扱ってよいかもしれないが、濠内の建物群が今一つ整っていないこと、屋敷の大きさも1辺50mぐらいであるので一応Bタイプとしておく。東大阪市西之辻遺跡、同鬼虎川遺跡¹¹⁴⁾では14~15世紀代の溝で区画された集落が検出されている。旧のCタイプに入っていた宮田遺跡第2地区の集落もこのタイプとなる。原口正三氏が区画の1単位として条里の半折の一辺の長さとしての約20mが存在するとされたが、このBタイプは20~30cm¹¹⁵⁾を1辺とする柵又は溝で区画されたものとして把握しておく。¹¹⁶⁾



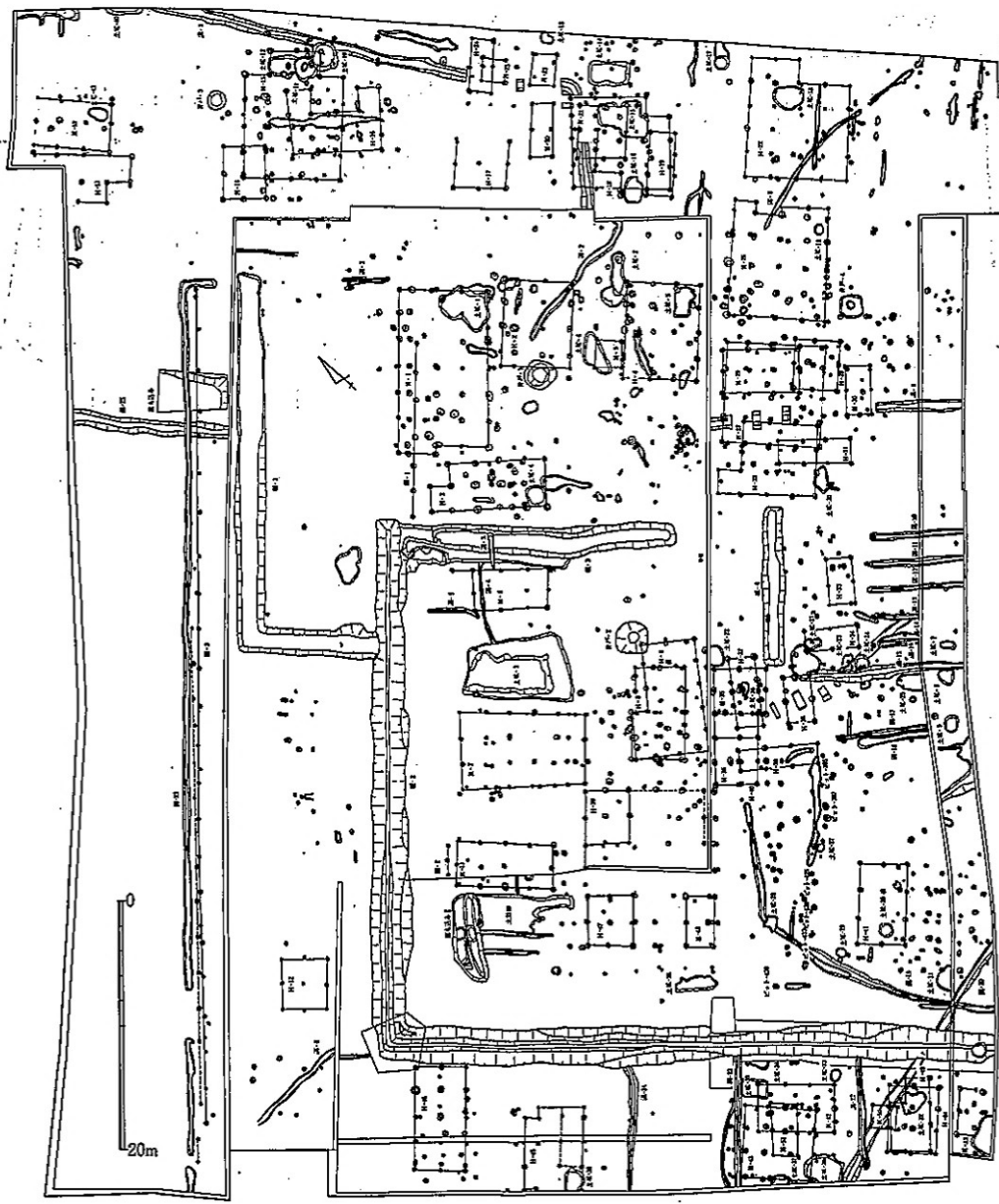
第3図 西ノ辻遺跡中世期遺構図「西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡」現地説明会資料所収

Bタイプと基本形態は同じでも、溝の中、その全体景観、集落内の構成等、いわゆる堀の内屋敷もしくは垣内として認識できるいわゆる武士の館として捉えるべきものをCタイプとする。和泉市和気遺跡¹¹⁷⁾で検出された方1町の区画をもち外堀と内堀を有し、内堀内には在地領主(武士)が居住し、柵の内、堀の外には下人、所従が住んでいた場所も検出され、正に絵図そのものの景観¹¹⁸⁾をもった13世紀前葉から中葉にかけての館跡である。前にDタイプとした濠で囲まれた大阪市長原遺跡¹¹⁹⁾、京都府城の内遺跡¹²⁰⁾も一応ここに入れておく。大溝で囲まれた集落内の構造が問題となるが、今の所不明である。しかし今日迄に検出されている建物群は決して主のものでないことは確かである。和歌山県西庄遺跡¹²¹⁾も屋敷規模、溝中等からこのタイプに属すると考える。このCタイプの前駆的形態として平安時代後期から末葉の平生遺跡¹²²⁾がある。規模的には1町方格にはならないが、柵で囲まれた在地首長の堂々たる屋敷跡である。溝による囲繞こそないがAタイプの在地首長型とでもいえる型態である。

Dタイプは元のEタイプであってこのタイプについての基本認識は変わっていない。恐らく15世紀から16世紀にかけて成立する本格的な館である。ほとんど城としての機能が醸成されつつある段階の集落形態で、前にもあげた姫路市加茂遺跡¹²³⁾、堺市大仙遺跡¹²⁴⁾、兵庫県福田片岡遺跡¹²⁵⁾などで検出されている。

今回の4タイプは基本的には時間的変遷を半ば含みながらのタイプ分類である。勿論Aタイプでは今日まで継続しているのであり、決して早く出現したものが早く消滅するものでなく、又各タイプ内の細分については今後の課題としたい。とりわけ菱木下遺跡や宮田遺跡にみられる溝と柵で区画された小区画の単位群が独立した一軒の百姓家とすべきか、血縁的紐帯で結ばれた一族として3ないし4区画があるのか未だ決定的な判断ができない所である。その決果次第で、これらの集落の社会構成が極めて明瞭なものとなる。又今回のタイプの俎上にあげたのはあくまでも官衙や庄屋のような遺構ではなく、一般集落を対象したものである。

以上は一応畿内を中心として述べてきたが、12世紀から13世紀の集落変遷、とりわけ区画溝から大規模な土塁と溝で囲繞した集落は石川県寺家遺跡¹²⁶⁾の動向ともほぼ一致しており、中世環濠集



第4図 和気遺跡第35工区遺構図「和気」Ⅱ付図

落の成立は全国的に12世紀後半から13世紀前半になることは確かである。

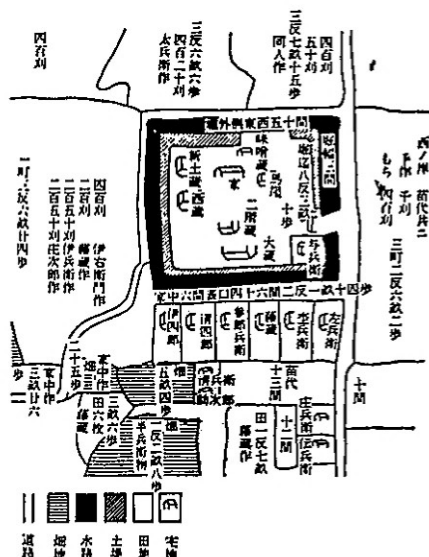
2. 開発のあり方について

今迄検討してきた10世紀から13世紀にかけての集落のあり方を通して、同時期の開発について幾つかの気付いた点を記すことにする。

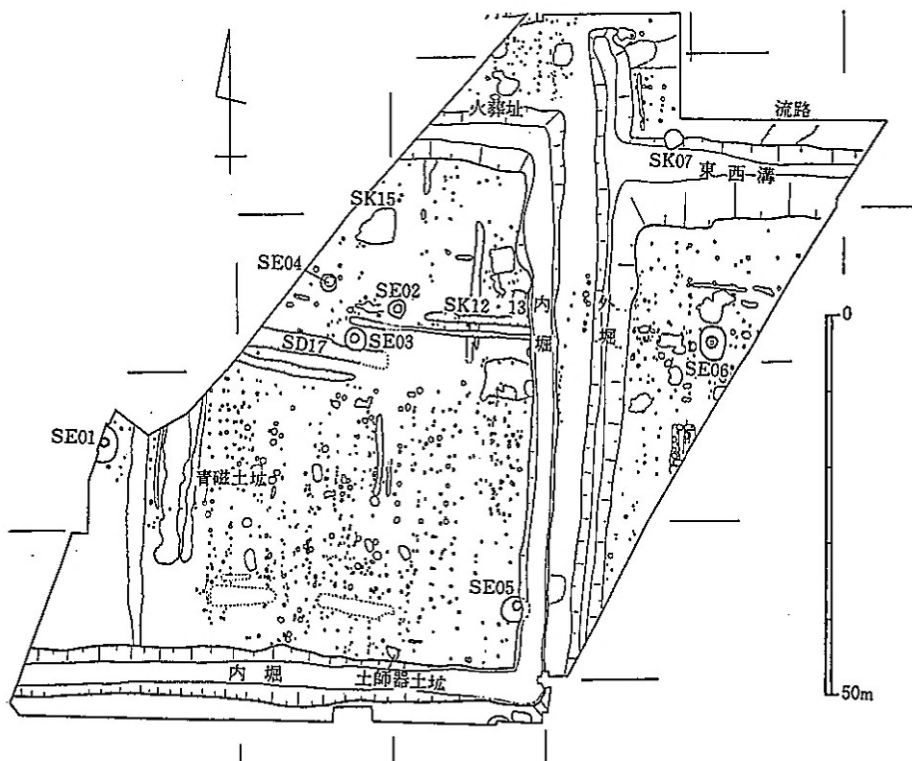
何度もふれたように、この地域における古代から中世にかけての考古学からみた画期は10世紀にある。勿論その前代たる9世紀の実態が十分に掴みきれていない状況の中での捉え方であるか¹²⁷⁾もしれず、将来的には若干の不安も残るが、少なくとも現段階においては10世紀に第一の画期、

12世紀～13世紀にかけて第二の画期があるといえる。集落の増加、集落形態の変化においてそれはみられる。

集落のあり方からみて、菱木下遺跡のように同一場所における累代的な集落変遷がみられる遺跡はむしろ例外的である。そして、大園遺跡のように集落全体としては継続しても、同一場所における継続性を見出せない集落、将来の周辺調査の結果によっては、大園遺跡と同様の動向を示すかもしれないが、万崎池遺跡や畠中遺跡のように比較的短期間で集落が一度廃絶し、再び13世紀に集落がみられるような遺跡が多くみられる。このことは既にふれたように、生産基盤の安定性に大きく規定されているといえるであろう。菱木下遺



第5図 出羽国東置賜郡土豪屋敷「武士団と村落」所収



第6図 福田片岡遺跡中央地区遺構図「福田片岡遺跡」現地説明会資料一部改変

跡集落の安定性に対して、大園遺跡の場合、同一集団の安定性が必ずしも見られないこと、万崎池遺跡の場合は、この地域における開発に基本的に失敗したと考えられるのである。段丘上の開発が7世紀以降大規模に行なわれたとしてもそれが必ずしも永続的にその経営が行なわれた保障

はなく、戸田芳実氏が述べた中世の水田経営の不安定さは、この地域における段丘上の開発に対して、考古学からはそれを裏付けているといえる。この不安定さは12世紀後半～13世紀にかけても同様で、全面的な改良が行なわれ開発が一擧に進展、安定したとは決していえないようである。勿論全体的に生産力の増大は耕地の拡大によって裏付けられたであろうし、安定耕地の面積は勿論増えていったと考えられる。しかし少なくとも和泉における段丘面の開発は様々の社会的条件も重なったのであろうが、中世前期までは大きな変革はなかったように受け取れる。

10世紀における大園遺跡、畠中遺跡などに典型的にみられるように、集落の成立を段丘上の開発拠点の成立として捉えるなら、その成立のあり方は決して単独の集団、つまり1単位の建物群で成立するのではなく、少なくとも複数集団が開発に入ったこと、そしてその中に一定の優劣がみられることなどが、この時期のこの地域の特徴として指摘できる。大園遺跡における100mをこえる屋と倉庫などを有する集団、畠中遺跡における13区の建物群、万崎池遺跡における西の建物群、菱木下遺跡の東群集落内のSBP20の集団などが優勢な集団にあたる。勿論集団間は支配・被支配の関係としてではなく、開発領主の命を受けた、開発集団の主導的立場にあった集団として、それらは立ち現われたのであろう。

以上述べてきた集落の成立が、一般農民の単発的な開発によるものとして捉えることも可能であるが、万崎池遺跡の土堤を築き、溜池をつくって行なうような開発を一般的なものとするなら、単一集団独自の力によることはおそらく不可能であるだろうし、集団以外の臨時的な労働力や資材も必要としたと考えられる。そしてそれを可能にする条件としては、開発領主の指図による出作りの形態をとって開発を進めたと考えるのである。

3. 中世寺院との関連

今回の調査でえた成果の一つは、平安中、後期以降の開発と寺院とが深い関わりをもっていることが明らかになったことである。それは鈴の宮遺跡と仏光寺との関連、菱木下遺跡と釈尊寺との関連、畠中遺跡と近義堂廃寺との関連等によりほぼ明らかである。その他大園遺跡と清高小学校内の寺院址の関連もほぼ確実であろう。又確実な寺跡はでていないが、泉大津市豊中遺跡、和泉市池上遺跡¹³¹⁾、岸和田市畑遺跡¹³²⁾などでは寺院の存在を推定させるような瓦の多量出土がみられ、同様の関連があるとみられる。又字名などから寺院が想定されて、中世の遺構がでている。東岡寺跡¹³³⁾なども同じ例としてみてよいであろう。いずれにしても奈良時代の隔離した形での寺院のあり方ではなく、むしろ逆に寺院をとりこんだ形で存在する点が最大の特徴である。

ほとんどが氏族寺院として創立された奈良時代前期の寺院がほぼ9世紀中頃迄には廃絶する。それは支配の道具立ての1つとしてきた寺院経営が、寺院経営主体者の重い荷物となり、桎梏に転化し、ついに放棄するに至ったという、正に「古代」の根幹が大きく音をたてて崩壊する姿がここにみられるのである。そして、新たな中世の胎動の姿が小寺院の建立の中に見出しえるのである。

つまり平安時代に至り律令制の変質と崩壊があらゆる分野に亘って現われる。それは勿論仏教

第3表 和泉地域古代中世寺院創建時期

遺跡名	時代					遺跡名	時代				
	奈良	平安	鎌倉	室町	その他		奈良	平安	鎌倉	室町	その他
堺市						来迎寺跡		○後			
塩穴寺	○					犬飼堂跡		○後			
土師観音廃寺	○					神於寺		○			
陵南廃寺	○					武運廃寺		○			
高蔵寺		○?				重原廃寺		○			
岡田寺跡		○後				堂ヶ峰廃寺			○		
釈尊寺跡		○後				岡堂			○		
大庭寺跡		○				神福寺跡			○		
黄金山遺跡		○				転法輪寺跡			○		
仏光寺跡(鈴の宮遺跡)		○中				勝福寺跡			○		
放光寺跡			○			行合堂(観音堂)			○		
本田寺跡(鶴田池東遺跡)		○後				大威徳寺			○		
小計	3	7	1	0	0	沼天神社遺跡				○	
高石市						四方寺遺跡					中世
伽羅橋東遺跡(大雄寺跡)		○後				積川廃寺				○?	
専称寺跡		○後				小計	6	15	7	2	1
清高小学校内		○後				貝塚市					
小計	0	3	0	0	0	秦廃寺	○				
泉大津市						長楽寺廃寺		○後			
豊中遺跡		○後				窪田廃寺		○後			
小計	0	1	0	0	0	地藏堂廃寺		○中後			
和泉市						水間寺		○後			
松尾寺跡	○					木積観音寺跡		○後			
池田寺跡	○		○			石才近義堂廃寺		○後			
和泉寺跡	○					廃明楽寺		○			
国分寺跡	○					高井天神廃寺		○後			
信太寺跡	○					小計	1	8	0	0	0
坂本寺跡	○					熊取町					
池上遺跡		○後				東円寺跡		○後			
菩提池廃寺		○末				小計	0	1	0	0	0
妙法寺跡		○中				泉佐野市					
小計	6	3	1	0	0	禅興寺廃寺	○前				
忠岡町						岡本廃寺		○後			
高月寺跡		○				檀波羅密寺		○後			
小計	0	1	0	0	0	小計	1	2	0	0	0
岸和田市						泉南市					
小松里廃寺	○					海会寺跡	○				
春木廃寺	○					光平寺		○後			
田治米廃寺	○					林昌寺		○後			
穴口廃寺	○					仏性寺				○	
別所廃寺	○					・小計	1	2	0	0	1
堂の後廃寺	○					阪南町					
吉井上品寺跡		○後				長楽寺		○後			
夜疑廃寺		○後				神光寺		○			
畑遺跡		○後				小計	0	2	0	0	0
今木遺跡		○後				岬町					
兵主遺跡		○後				医主寺跡		○			
長光寺跡(山直神社境内)		○				千間寺跡				○	
久米田寺		○				小計	0	1	0	0	1
堂浦廃寺		○後				合計	18	46	9	2	3
天神山廃寺		○後				総合計	78				
八代寸廃寺		○中									

『大阪府文化財地名表』『岸和田の文化財Ⅴ』による

界にも及び、仏教統制の崩壊と民間仏教の普及、¹³⁵⁾ 仏教の民衆化をとおして、一般農民のレベルまで仏教を私化するようになる。しかし逆に寺院を媒介にした新たな民衆支配という側面の確立にもなった訳であるが、どちらが強いかは共同体内の力関係の反映であったのであろう。

10世紀以降の和泉における新たな地域開発には恐らくほとんどいい位、寺院が建立されたことは確実である。鈴の宮遺跡、菱木下遺跡でみる限り、まず集落が成立して、何年か後に寺院が建立されたようである。勿論寺院といっても鈴の宮遺跡の仏光寺の例の様に基壇をもった堂が1宇あるのみといった例が多かったのではないかと推定される。¹³⁶⁾ しかしこの寺院をだれが何の為に建立したのかになると不明な点が多い。開発領主が主体となったのか、開発に入った農民が一定の力をもった段階で合力で造ったのか、大寺院への土地の寄進の結果としてのものか種々考えられる。しかし実際は、それぞれの地域、それぞれの寺院により異り、多くの場合、単一の理由ではなかったであろう。

さきにふれた開発のあり方にもかかるが、一棟一棟の建物居住者が独自に開発を始めることはありえないし、少なくとも在地領主の指導援助の中で複数の単位が開発を開始したと想定するなら、開発の成功を含む仏の加護を祈願し、合せて仏教イデオロギーを通じて行動規範の浸透を計った開発領主の発願による寺院建立と考えるのが最も妥当だと考える。しかし開発領主の大寺院への寄進の結果としての寺院建立なのかどうかについては確定し難い。

堺市以南の旧和泉国において奈良時代から室町時代までの間に創建されたことが考古学的に確認された寺院跡は全部で74ヶ所¹³⁷⁾ある。そのうち奈良時代の創建寺院が17、平安時代中、後期の創建が45、鎌倉時代8、室町時代2、その他2となる。いかに平安時代の寺院建立が多かったかが明らかである。勿論文獻上明らかな寺であっても考古学的に不明なものは含まれていないので、数はまだ増えると思われる。

しかし、平安時代寺院建立がすべて先述したような開発行為に伴うものでは勿論ないし、仏教そのものの中からでてくる寺院建立も多くみられたと思う。そして又、奈良時代に建立された氏族寺院がその本来持っていた氏族寺院としての意義を喪失した結果一度滅び、再び一堂を建てて新たに活動を開始し、村落寺院としての役割を担って再生した寺院も多かったと考えられ、12、13世紀に再建された池田寺跡の明王院もその例である。つまり、第2次開発の頃であった。この頃の新たな開発にも寺院をつくることもあったかもしれないが余り顕著にはみられない。基本的にこの時期の開発が常荒田に対する再開発であったという様な条件もあって、以前の堂を再利用するようなこともあったのかもしれないし、堂のみは細々と継続したのかもしれない。そしてそのことは単に開発に伴うというより仏教そのものの平安時代後期以来の変化に大きく影響されたのであろう。

堺市(旧大鳥郡)、和泉市(旧和泉郡北部)、岸和田市(旧和泉郡南部)、貝塚市(旧和泉郡南部・旧日根郡北部)の平安時代建立の寺院数一現段階で考古学的に明らかなものを比較すると、堺市7ヶ寺、和泉市3ヶ寺、岸和田市15ヶ寺、貝塚市8ヶ寺となる。仮に奈良時代の寺院が

同じころ再建されていて、それらを含むとして、10ヶ寺、8ヶ寺、21ヶ寺、9ヶ寺となる。勿論さきにふれたように、寺の創建即開発ということではないにしろ、旧和泉郡南部と日根郡北部の寺院数の増加は異常である。和泉郡北部の奈良時代創建の寺院が6ヶ寺であるのに平安時代建立寺院は3ヶ寺である。文献に出ている寺院の考古学的実証がなされていないこともあって、決して確定した数ではないが、これが単なる開発量の多さに由来するものではないにしても、一体何故なのか遺構遺物の両面から追求していく必要がある。

以上、10世紀から13世紀におけるこの地域の集落について概括してきたが、10世紀以降における多くの集落成立にみられる地域開発が、古代末中世前期における考古学的な第一の画期として捉えうること、又その同一線上の再開発が12世紀後半から13世紀にかけて行なわれ、集落形態とりわけ、溝・柵にかこまれた垣内、堀之内屋敷の成立 — 一般百姓屋敷としても、在地領主としての「武士」屋敷としても成立するが — を伴って第二の画期が存在することが明らかになったといえる。その間の小規模寺院の建立があいついだことも画期を特色づけるものである。そして第1期の画期から第2期の画期の過程こそ、我国における古代の崩壊から中世の確立に至る過程であり、集落形態、イデオロギー的あり方を含む仏教の変革とそれに伴う寺院の存在形態、開発形態等を様々な面から考古学的に捉ええるのではないかと確信とする。問題の深化は始まったばかりであり、徐々に諸問題を煮つめていきたいと考える。なお第三の画期以降についての資料は今回の調査からは引き出せず、今後の課題としたい。

15世紀以降の今回の調査区における歴史は基本的に農地を主体とする歴史である。農耕にかかわる、溝、埋甕、溜池などが各遺跡で検出されている。勿論農耕以外の遺構もあって、万崎池第Ⅳ調査区における15世紀から16世紀にかけての9基の土壇墓の存在は、それほど離れていない所に集落があることを示している。又太平寺遺跡の室町時代の河川堆積は大規模な洪水のあったことを示している。

近世から近代にかけても肥溜め用の湊焼の甕が検出され、一貫して畑、田としてこの調査区が存在したことが明らかになった。

西浦橋遺跡で検出された1.8m×3.5mの階段のついた防空壕はつい40年前の日本の歴史を鋭く語りかけてくれた。中に入っていた日本刀は、戦後に見つからない様に防空壕とともに埋めたものであり、それを埋めた人々の心情がいたい程伝わってくる。しかしもし防空壕を知らない人がこれを発掘したとき、調査は刀を副葬した墓としてこの遺構を捉えるかもしれない。そして今回調査している我々自身、正に、100年以前の歴史に対しては「戦争を知らない子供」として存在するのである。

3 まとめ

以上、大きく3期に分けて、今回の調査区の歴史を周辺遺跡との関連で論述してきた。以下いくつかを箇条書にしてしめくりとしたい。

1. 縄文時代早期末前期初頭から、今日まで、若干の空白部分はあっても石津川中流域の歴史

を語る上で欠くことのできない様々の貴重な資料をえることができた。

2. 縄文時代後期から弥生時代初頭にかけての大きな文化変容の歴史を具体的に語れる資料を西浦橋遺跡でえることができた。又、弥生文化の展開過程における、居住地（竪穴住居）、墓（方形周溝墓）、生産（杭列群）の一体的姿を菱木下遺跡、西浦橋遺跡の調査成果からえた。

3. 弥生時代後期末から古墳時代前期のこの地域が空白になる直前の集落を万崎池遺跡でみることができた。

4. 百舌鳥古墳群造営を契機とした泉北窯址群の成立、そして又それを契機とした石津川中流域の古墳時代集落の成立・展開・消滅の動態を、万崎池遺跡、太平寺遺跡、西浦橋遺跡の遺構遺物は語った。そして従来、古墳時代の墓制即群集墳として捉えてきた状況の中で、6世紀から8世紀にわたる大土壙墓群を菱木下遺跡、万崎池遺跡において検出した。遺構の複雑さから論理を抽出することについては試行錯誤の段階であるが、古墳時代研究にとって不可欠の問題提起をなした。和泉の海岸平野部の居住形態としての竪穴住居から掘立柱建物への変革が6世紀初頭になしたのに対し、菱木下遺跡では末葉の段階に至ってようやく変化したことが分り、里と山の差が確実に存在したことが判明した。

5. 泉北窯址群の衰退の中で、流域のムラの遺構遺物も減少し、9世紀には遺構はほとんどみられなくなる。そして平安時代中期に入って、この地域に再び開発の手が入り、新たな集落が、菱木下遺跡、万崎池遺跡、太平寺遺跡にみられ、菱木下遺跡はその後釈尊寺の創立をえて14世紀まで集落が継続した。13世紀には西浦橋遺跡、太平寺遺跡でも再開発の為の集落がつくられた。

6. 15世紀に到って、菱木下遺跡も含めて、ほとんど農地として利用されるようになる。この地域の原景観はこの時期に形成され、つい最近の宅地開発の前まで継続する。

この稿を終えるにあたって、日頃、学的刺激を怠惰な私に与えつづけてくれる広瀬和雄氏と堺市に関する様々な知識を与えていただいた北野俊明氏に心から感謝の意を表します。

4 あとがき

現地調査2年、報告書作業2年の苦闘の結果を今、衆目の前に提示することになった。とりわけ熱い思い、冷めた心、諦め、あせりが交錯したここ2年、出すことに第一義性を見出したここ1年、ようやく一時の静寂を見出そうとしている今の瞬間である。

厩大な経費と労力を費した今回の調査が、明日以降どれ程の効用を世間に対してなすうかが調査を担当した我々に問われ、当センターにも問われている訳であるが、それに答える1つとしてこの報告書を出すものである。しかしそれだけで事足るとは勿論思っていない、さらに多くのことがなされねばならないだろう。

今の我々の実力は今回の報告書の内容そのものであり、それが満足できるものでないことは十分自覚している。その補足は次の報告書の中で追加し、永久的な補訂作業を継続することによって責を果すこととしたい。しかしささやかに誇れることもある。それは合計6回にわたる現地説明会の開催である。そのことを通じて地元の人に少なくとも文化財調査のなんたるかをわずかで

あろうがしてもらえたと信ずる。

心を和ませる15世紀以来の地域の景観が音をたてて崩れつつある昨今、その決定的なダメージを道路の完成は与えることであろう。何を要求し何を失うか価値観の多様化の中で、住民が一致できる意見などないかもしれない。文化財調査に携わっている我々も、報告書の完成をもって仕事の区切りとし、後は地域の人のやりたいようにやればという気持もないではない。しかし反対に2階建の道路が決して心を和ませてくれるものではなく、やがて失なったものの大きさに気付くことになることが痛いほど分っていて報告書の完成のみに心を砕いていた自分達を知って、報告書の完成も十二分に喜べない心境にあることも偽ることができない。

しかし多くの人の努力が今結実しようとしていることも事実であり、そのこと自身は感謝の念でいっぱいである。学生諸君をはじめとする調査関係者、実際の発掘作業に従事していただいた作業員の方々、大阪府教育委員会、堺市教育委員会の技師の皆さんに対し心からお礼を申し上げます。

註

- 1) 中村 浩 「歴史環境」 「陶邑」I 大阪府教育委員会 1976
- 2) 広瀬和雄 「畠中遺跡発掘調査概要」I 大阪府教育委員会 1978
- 3) 「池上・四ツ池遺跡」16、17 第2阪和遺跡調査会 1971
- 4) 樋口吉文 「四ツ池遺跡」 四ツ池遺跡調査会 1981
- 5) 森井貞雄氏教示
- 6) 広瀬和雄 「淡輪遺跡」 「岬町遺跡群発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1978
大野 薫 「淡輪遺跡発掘調査概要」I 1979、久米雅雄 同II 1980 波辺昌宏 同III 1981 大阪府教育委員会
- 7) 堅田 直 「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」 帝塚山大学考古学研究室 1965
- 8) 久米雅雄 「第1地区の調査結果」 「第2阪和国道内遺跡発掘調査概要」一板原遺跡一 大阪府教育委員会 1980
- 9) 藤田正篤 「三軒屋大斗木遺跡その後」 「会報」6、7 和泉古代文化研究会 1971
三軒屋遺跡調査グループ 「三軒屋遺跡」 泉佐野市教育委員会 1972
- 10) 1978年大阪府教育委員会調査により出土
- 11) 灰掛 薫氏教示
- 12) 灰掛 薫 「府中遺跡発掘調査概要」II 和泉市教育委員会 1978
- 13) 灰掛 薫 他「和氣」II 和氣遺跡調査会 1981
- 14) 井藤 徹氏教示、従来古池北遺跡とされていたが豊中遺跡の一面として扱うことにする。
- 15) 1978年大阪府教育委員会調査、報告書未刊
- 16) 北野俊明 「鈴の宮」III P.114 堺市教育委員会 1983
- 17) 小嶋暁子 「遺物」 「池上、四ツ池」 P.106 第2阪和遺跡調査会 1970
- 18) 註16、「結語」
- 19) 1983年度調査により検出
- 20) 「池上、四ツ池遺跡」17、表紙、裏表紙、第2阪和遺跡調査会 1971
- 21) 註16に同じ
- 22) 註5に同じ
- 23) 広瀬和雄氏教示

坂口昌男、楠山享司 「虫取遺跡」 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報」 2 泉大津市教育委員会

1984.

- 24) 鈴木陽一氏教示
- 25) 阿部嗣治 「鬼虎川遺跡・水走遺跡」現地説明会資料、東大阪市文化財協会 1983
- 26) 大阪府立花園高等学校地歴部 「鬼塚遺跡」「河内古代遺跡の研究」 1970
- 27) 今宿丁田遺跡発掘調査団 「姫路市今宿丁田遺跡出土遺物について」 第9回埋蔵文化財研究会資料

1981

- 28) 田中清美 「縄文時代」 「長原遺跡発掘調査報告」Ⅱ (財)大阪市文化財協会 1982
- 29) (財)大阪市文化財協会 「大阪市立第8養護学校建設に伴う長原遺跡発掘調査概要」 1982
- 30) 阿部嗣治氏教示
- 31) 寺川史郎・尾谷雅彦編 「亀井・城山」 (財)大阪文化財センター 1980
- 高島 徹、広瀬雅信、畑 暢子編 「亀井」 (財)大阪文化財センター 1983
- 32) 西口陽一、宮野淳一、上西美佐子 「山賀」その3 (財)大阪文化財センター 1984
- 33) 中井貞夫 「泉大津市・池浦遺跡発掘調査概要」「節・香・仙」第22号 大阪府教育委員会 1972
- 34) 抽稿 「池上弥生ムラの交遷」P.36 「考古学研究」92 1977
- 35) 広瀬和雄 「古代の開発」P.42 「考古学研究」118 1983
- 36) 註34、P.49
- 37) 石田 修、樋口吉文 「四ツ池遺跡」その4 四ツ池遺跡調査会 1979
- 38) 註16、P.120
- 39) 註16、P.116~P.117
- 40) 石田 修 「万崎池遺跡発掘調査報告」堺市教育委員会 1981
- 41) 野田芳正 「遺跡の位置と環境」「小阪遺跡発掘調査報告」堺市教育委員会 1983
- 42) 樋口吉文 「四ツ池遺跡」堺市教育委員会 1983
- 43) 森 浩一、鈴木博司編 「観音寺山遺跡調査概要」観音寺山遺跡調査団 1968
- 44) 石部正志、堀田啓一、西谷英昭 「鶴山地区信太山遺跡(その2)調査概報」和泉市教育委員会

1970.

- 45) 中村 浩 「遺跡の立地とその環境」 「陶邑」Ⅱ 大阪府教育委員会 1980
- 46) 註12に同じ
- 47) 坂口昌男編 「豊中・古池遺跡」そのⅢ 豊中・古池遺跡調査会 1976
- 48) 渡辺昌宏編 「池上遺跡発掘調査概要」Ⅱ 大阪府教育委員会 1980
- 49) 註45に同じ
- 50) 広瀬和雄 「和泉北部における古墳群の動向」 「大園遺跡発掘調査概要」Ⅱ 大阪府教育委員会

1975

- 51) 白神典之 「大塚山古墳発掘調査報告書」 「四ツ池遺跡・大塚山古墳」堺市教育委員会 1983
- 52) 石田 修、十河稔郁 「田園遺跡」堺市教育委員会 1983
- 53) 石田 修、十河稔郁 「堺市辻之遺跡」現地説明会資料 堺市教育委員会 1982
- 54) 嶋谷和彦 「太平寺遺跡発掘調査報告」「堺市文化財調査報告」第13集 堺市教育委員会 1983
- 55) 註52・53による
- 56) 樋口吉文 「東上野芝遺跡発掘調査報告」 「堺市文化財調査報告」第10集 堺市教育委員会 1982
- 57) 北野俊明、樋口吉文 「船尾西遺跡発掘調査抄報」堺市教育委員会 1978
- 58) 中村 浩編 「陶邑・深田」大阪府文化財調査抄報第2輯 大阪府教育委員会 1973
- 59) 1981年大阪府教育委員会調査
- 60) 奥田 豊編 「土師遺跡49年度発掘調査概報」1975 同編 「土師遺跡50年度発掘調査概報」

1976 森村健一 「土師遺跡発掘調査報告書」その1 1976 十河稔郁 「土師遺跡発掘調査報告」

「堺市文化財調査報告書」第9集 1981 いずれも堺市教育委員会

- 61) 北野俊明氏教示

- 62) 神谷正弘編 「大園遺跡発掘調査概報」2、大園遺跡調査会 1976
 広瀬和雄 「大園遺跡発掘調査概要」III 大阪府教育委員会 1976
 広瀬和雄、森 茂 「大園遺跡発掘調査概要」V 大阪府教育委員会 1981
 上林史郎編 「大園遺跡発掘調査概要」VI 大阪府教育委員会 1981
- 63) 北野俊明氏教示
- 64) 中村 浩編 「百舌鳥陵南遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会 1975
- 65) 註60に同じ
- 66) 註45に同じ
- 67) 註56に同じ
- 68) 吉田 孝 「律令国家と古代の社会」P.106 岩波書店 1983 で述べられている「ヤケ」は垣と門をもっている独立した区画とされているが、大園遺跡は、門についての不明確さなど、典型例でない点で「ヤケ」に近いとした。
- 69) 調査担当者である広瀬和雄氏も「既往の調査と経過」「大園遺跡発掘調査概要」VI 大阪府教育委員会 1981 でごく控めにこの建物群の主についてふれているが、筆者としては地域全体の首長としてこの建物群の主を捉えることについては保留することにしたい。勿論この建物群の主がこの地域の有力在地首長の一員として評価することには異論はない。
- 70) 中村 浩 「ヘラ記号について」 「陶邑」 堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概要 大阪府教育委員会 1970
- 71) 田辺昭三 「須恵器」1～12 「日本美術工芸」第388～394 1971
- 72) 西村 康 「陶邑・猿投・牛頸」 「文化財論叢」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会同朋舎出版 1983
 芝野圭之助 「陶邑をめぐる諸問題」 「青海波」創刊号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議 1984
- 73) 渡辺泰伸 「東北古墳時代須恵器の様相と編年」 「考古学雑誌」66-4 1979
- 74) 斉藤孝正 「猿投窯成立期の様相」 「名古屋大学文学部研究論集」L X X X VI 1983
- 75) 松本敏三 「香川県出土の古式須恵器」 「瀬戸内海歴史民俗資料館年報」 1982
- 76) 中村 浩 「初期須恵器生産の系譜」 「大谷女子大学紀要」15-1 1980
 門脇禎二 「日本古代の社会と文化」 「世界陶磁全集」2 小学館 1979
- 77) 田辺昭三 「須恵器生産の展開」 「須恵器大成」 1982
- 78) 註74に同じ
- 79) 註73に同じ
- 80) 原口正三 「須恵器生産の拡大」 「須恵器」講談社 1979
- 81) 柳田康雄 「古墳時代の甘木」 「甘木市史」上巻 1982
- 82) 註74による
- 83) 註74による
- 84) 辻川陽一氏の等の御好意により実見するができた。記して感謝の意を表します。
- 85) 本文中でのべたように、坏身の形態が、管形に統一される迄、土釜形の高蔵地区に対し、濁り池窯址のそれは口縁部の立上りが大きく内側に張りだし、受け部も外には張り出さない形態をもち、基本的には土釜形の系譜上に後の坏身が成立しえると考えるのである。
- 86) 註72、西村 康論文 P.134
- 87) 註72 P.135
- 88) この問題も先の坏身の管形への統一と同じく、濁り池窯址と高蔵地区窯址の間に差があり、TK73号窯、85号、87号窯には検出されていないのに対し、濁り池窯址からは検出されている。(坂口昌男氏教示) これらの点もTK 216号型式の成立までの時間差の中で、技術的交流が、信太山丘陵窯址群と泉北丘陵窯址群の間で行なわれたことを実証している。そしてこのことが、大きくは2群の首長系列を通して須恵器生産が存在したことをも裏付けていると考える。

- 89) 註42、樋口吉文 「四ツ池遺跡」第86地区現地説明会資料 堺市教育委員会 1984
- 90) 吉田 晶 「日本古代村落史序説」 P.192 塙書房 1980
- 91) 近藤義郎 「大和連合勢力の卓越」 「前方後円墳の時代」 岩波書店 1983
- 92) 田辺昭三 「陶邑古窯址群」Ⅰ 平安学園考古学クラブ 1966
- 93) 広瀬和雄 「群集墳論序説」 P.32 「古代研究」15 1978
- 94) 森 茂編 「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要」Ⅲ 和泉丘陵内遺跡調査会 1984
- 95) 註62
- 96) 森村健一 「土師遺跡発掘調査報告」Ⅱ 堺市教育委員会 1977
- 97) 註16 P. 7
- 98) 註16 P. 6
- 99) 広瀬和雄 「池田寺遺跡における7、8世紀の集落構成」 「大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第2回）資料」 1980
- 100) 北野俊明、十河稔郁 「深井清水町遺跡調査報告」、十河稔郁 同 「堺市文化財調査報告書」第9集 1981 嶋谷和彦 同 「堺市文化財調査報告」第13集 1983 いずれも堺市教育委員会刊
- 101) 北野俊明 「鈴の宮遺跡発掘調査報告」 P. 2～3 「堺市文化財調査報告」第10集 堺市教育委員会 1982
- 102) 上林士郎編 「大園遺跡発掘調査概要」Ⅵ 大阪府教育委員会 1981 藤永正明 「第1調査区の調査」 「大園遺跡発掘調査概要」Ⅶ 1982
- 103) 註101、広瀬和雄、森 茂 「大園遺跡発掘調査概要」Ⅵ 大阪府教育委員会 1981
- 104) 神谷正弘、三宅正浩 「大園遺跡発掘調査概要」3 高石市教育委員会 1979
- 105) 註102、註103
- 106) 神谷正弘編 「大園遺跡発掘調査概要」2 大園遺跡調査会 1976
- 107) 神谷正弘 「大園遺跡発掘調査概要」 高石市教育委員会 1977
- 108) 註103
- 109) 註2、藤沢真依、森屋直樹 「脇ノ浜、畠中・近義堂遺跡現地説明会資料」 大阪府教育委員会 1982
- 110) 拙稿 「小結」 「和気」 和気遺跡調査会 1979
- 111) 橋本久和 「上牧遺跡発掘調査概要」 高槻市教育委員会 1973
- 112) 橋本久和 「安満遺跡発掘調査報告書」 高槻市教育委員会 1974
- 113) 中井一夫 「若槻区関連遺跡第3次発掘調査概報」 奈良県教育委員会 1982
- 114) 「西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡」現地説明会資料 東大阪市文化財協会 1983
- 115) 富成哲也 「宮田遺跡」 「高槻市史」第6巻 1973
原口正三 「畿内の村」 「古代文化と地方」 文一総合出版 1978
橋本久和 「中世村落の考古学的研究」 「大阪文化誌」第1巻第2号 1974
- 116) 原口正三 「大阪府高槻市宮田遺跡再論」 P.677 「考古学論考」 1982
- 117) 灰掛 薫編 「和気」 和気遺跡調査会 1979 同 「和気」Ⅱ 和気遺跡調査会 1981
- 118) 豊田 武 「中世の武士団」 P.47 豊田武著作集第6巻 吉川弘文館 1982
- 119) 尾谷雅彦 「平安期末～鎌倉期初めの溝」 「長原」 大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター 1978
永島暉臣慎編 「長原遺跡発掘調査報告」Ⅱ (財)大阪市文化財協会 1982
- 120) 六勝寺研究会 「城之内遺跡」現地説明会パンフレット 1976
- 121) 久貝 健 「第1地区の調査」 「西庄地区遺跡発掘概報」Ⅰ 和歌山県教育委員会 社団法人和歌山県文化財研究会 1978
- 122) 平生遺跡調査団 「平生遺跡発掘調査報告」 嬉野町教育委員会 1976
- 123) 秋枝 芳、山本博利 「加茂遺跡」 姫路市教育委員会 1975
- 124) 堀江門也 「大仙遺跡発掘調査概要」Ⅱ 大阪府教育委員会 1974

- 125) 兵庫県教育委員会 「福田片岡遺跡」現地説明会資料 1983
- 126) 小嶋芳孝 「寺家」 石川県立埋蔵文化財センター 1981
- 127) 9世紀の実態がこの地域で今一つ不明である点で、10世紀を画期するには問題もあるが、集落の出現の多さ、寺院、開発の点から画期とした。9世紀の首長館が池田寺遺跡で検出されている(註98)が、他の建物群は余り検出されていず、全体像の解明は今後の課題である。
- 128) 註35 P.59~60
- 129) 戸田芳実 「日本領主制成立史の研究」 P.168~189 岩波書店 1967
- 130) 註47
- 131) 岸本道昭 「池上遺跡」 大阪府教育委員会 1982
- 132) 岸和田市教育委員会 「岸和田の文化財」V 1981
- 133) 芝野圭之助 「東円寺遺跡現地説明会資料I」 大阪府教育委員会 1983
- 134) 註99 P. 8
- 135) 田中文英 「中世寺院の生態」 『日本史』(2) 有斐閣 1978
- 136) 註135、P.203にある村堂、寺庵の様な小規模なものが多かったと考える。
- 137) 大阪府教育委員会 「大阪府文化財地名表」より集成したものである。

VIII 付載 自然科学的分析の成果

VIII 付載 自然科学の成果

1 堺市万崎池遺跡STK118土壌(墓?)内土壌のリン分析

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 奥野礼子

都市計画道路「松原～泉大津線」建設工事に先立って、泉北丘陵北端部に位置する万崎池遺跡の調査が行われた。この地域は石津川と和田川の間にはさまれた丘陵地で、近接して百舌鳥古墳群や陶邑古窯跡があり、古墳時代の遺跡も数多く知られている。

今回、万崎池遺跡の第Ⅱ調査区の南西部で古墳時代後葉の土壌群が多数検出された。須恵器製作者の集落跡が隣接していることと関連して、副葬品の貧弱な規模の小さいこれらの土壌が、須恵器粘土採取用の単なる土取穴の跡か、あるいは、須恵器工人集団の土壌墓群であるかを判断する必要が生じ、その解明への一助として筆者らは、骨の主成分であるリン酸カルシウムに由来するリン成分の定量を、土壌内土壌試料について実施することを調査担当者から依頼された。しかしながら、骨のリン酸カルシウムは、長期間の埋蔵中に土壌中の各種条件により、遅かれ早かれ分解して、可溶性のリン酸イオンとなって地下水とともに徐々に土壌中を逸散、移動してゆくものと考えられる。したがって、リン成分の濃度を単に土壌内土壌について測定するだけでなく、同一遺跡内の各地、各種の対照土壌の測定値との比較検討を行ない、さらに現在の田畑としての土地利用状況から考えられる肥料リン酸の存在も考慮したうえで、土壌内土壌中のリン成分量の評価を通じて土壌墓であったか否かを総合的に判断する必要がある。以上の観点から、このたび万崎池遺跡土壌内土壌のリン成分の定量分析を実施し、結果を得たので報告する。

実験の部

試料土壌の外観と採取位置 (図1参照)

- 試料1. 万崎池遺跡で現在田畑として使用されている30cmの表土層の上部の土壌。①
- 試料2. 試料1と同一地の30cmの表土層の下部の土壌。②
- 試料3. 万崎池遺跡土壌STK118の、3層を成す土壌中の最上層の黄茶色土壌。③
- 試料4. 同上土壌STK118の3層の土壌のうちの中層の紫灰色土壌。かつての遺骨の存在が考えられる層で

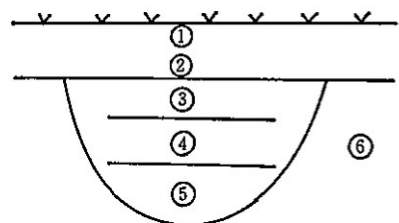


図1 万崎池遺跡土壌STK118試料土壌採取位置概略図

あるが、人骨に由来するような石灰質様物質は検出されていない。④

試料5. 同上土壌S T K 118の3層の土層のうち最下層の緑灰色土壌。⑤

試料6. 同上土壌S T K 118の周辺部地山の土壌。⑥

試料7. 同上土壌S T K 88から検出されたカメの中の土壌。

リンバナドモリブデン酸—メチルイソブチルケトン (M I B K) 抽出法によるリンの吸光光度 定量法

(a) 試料土壌1～7からの分析用試料溶液1～7の作製

粉碎して100℃で1 hr. 加熱乾燥したあと、さらに均質に粉末化した1～7の粉末試料約5 gをそれぞれ小ビーカーに精密にはかりとり、少量の水でうるおしたのち希硝酸25 mlを加え、10分間60℃に加温する。内容物を遠心分離機(4000rep×3 min)にかけ、上澄液のほうを分取し、沈殿は(1+2)硝酸で2回洗浄し、遠心分離機にかけて各洗液を分取して上澄液に合する。合した液は蒸発皿に移し砂浴上で蒸発乾固させたのち、残留物に(1+2)硝酸5 mlを加え、可溶性塩を溶かし、液を東洋ろ紙No.6で濾し分け、ろ液を50 mlのビーカーに受ける。蒸発皿およびろ紙を(1+2)硝酸でよく洗浄し、ろ液と合し、pHメータ(コーニング社製)を用いてpH 0.6～0.7に調節をして全量を正確に50 mlとする。分析用試料溶液の番号は試料土壌の番号と対応させる。

(b) リンバナドモリブデン酸—メチルイソブチルケトン (M I B K) 抽出法によるリンの吸 光光度定量

(a)の操作で得たそれぞれの試料溶液の全量に0.1%メタバナジン酸アンモニウム溶液5 mlを加え、脱塩水で全量を約90 mlとし、ついでモリブデン酸アンモニウム溶液5 mlを加えてから、さらに脱塩水を加えて全量を正確に100 mlとする。この際、溶液中のリンの含有量に応じた黄色の発色があらわれる。10分後、この発色溶液50 mlを分液ロートに分取し、50%クエン酸溶液10 mlおよび、M I B K 20 mlを加え、30秒間振とうする。黄色リンバナドモリブデン酸の移行したM I B K層を分取し、波長420 nmの光で吸光度を測定し、他方、0.2、0.4、0.6、0.8 mg KH_2PO_4 /50 mlの標準液を用いて同様の操作を行ない、吸光度を測定して検量線を作製し、試料溶液中の KH_2PO_4 換算濃度を検量線上より求め、 P_2O_5 濃度に換算して、試料溶液中の P_2O_5 量の算出を経て試料土壌中の P_2O_5 含量(%あるいはppm)を計算する。

(c) 定量分析の結果

万崎池遺跡土壌S T K 118およびS T K 88に関する標記の7試料土壌を上記の方法によって分析し、その含有リン成分量を P_2O_5 量(ppm)に換算表現したとき、試料1～7の各試料土壌中の P_2O_5 含量(ppm)はそれぞれ表1のとおりになった。

表1 試料土壌中のリン含量 (ppm)

分析試料	リン含量 (ppm) (P_2O_5 に換算)
試料土壌 1	409
" 2	474
" 3	31.3
" 4	41.2
" 5	26.8
" 6	26.3
" 7	31.2

考察

分析結果を一覧すると、各試料土壌のなかでは、現表土層（試料1、2）にはリン成分含有量（ P_2O_5 に換算して表示）が、他の土壌試料（試料3～7）と比較して非常に高いことがわかる。これは、現在、表土が耕作地として利用されている関係上、磷酸系の肥料の散布により表土層に肥料中のリン成分が残存、蓄積しているであろうことを考慮すれば当然首肯される。さて、一応磷酸系肥料のみが土壌中のリン成分濃度の変化の要因であると見るならば試料土壌中のリン含有量は、表土層より深い位置にある土壌ほど浸透量の減少と希釈のために逐次低下するはずである。しかし、測定値を比較してみると、表土層すぐ下の黄茶色層土壌よりも土壌内の紫灰色層土壌（試料4、動物遺体の存在した可能性が考えられる土壌層）のほうがリン含有量は高い値を示し、この事実は、磷酸系肥料による影響ではなく、この土壌層の位置にリン含有量を高めるリン含有成分物質が存在したことを示唆する。また、図1の土壌内の垂直断面に示される各土層中では、紫灰色土壌のリン含有量がもっとも高く、その量は最下層の地山の灰色層土壌（試料6）の1.5倍程度のリン成分が含まれていることがわかる。したがって、土壌内の紫灰色層土壌には、現在、骨片様の物質が一切みられないにしても、対照他土壌とのリン含有量の対比と各土層層におけるリン成分量の分布状態から、土壌内紫灰色層土壌に骨由来のリン成分の残存が考えられ、本遺跡の多数の同種の土壌とともに該土壌が、墓塚であったと考える可能性は、ゆえ無しとしないのである。しかし、この推論は同遺跡に多数存在する土壌のうちの一土壌内の土壌について行なった結果であり、これをもってすべてを同様と断じようとするものではない。より正確な判定には、数多くの土壌の同種試料の測定を行なう必要があることを思うとともに、考古学的視点からも、土壌の性格が明らかにされていくことを望むものである。

(1982年7月～9月分析)

終わりに、本実験に協力された本学薬学部学生、中尾俊子、福井公子、松井峰子の諸君の労に深く感謝の意を表する。

文献

- 1) 安田博幸：「物理的・化学的分析による考古学研究（第8報）兵庫県多可郡中町村東山古墳横穴式石室の組合せ式家形石棺内土壌のリン分析について」『武庫川女子大学紀要 第25集』（1977年）

2 太平寺遺跡・西浦橋遺跡の木材の樹種

嶋 倉 巳三郎

太平寺遺跡の材

堺市太平寺遺跡から出土した巨木材の樹種を調べた結果は次の通りである。(表2)

表2 太平寺遺跡出土材樹種一覧表

試料No.	出土場所	層名	時代	試料状態	樹種	採取時 試料No.
1	石津川氾濫原	青灰色砂礫	室町時代	流木	カキ	1
2	"	"	"	"	ムクロジ	33
3	"	"	"	"	トチノキ	36
4	"	"	"	"	ムクロジ	56
5	"	"	"	"	マツ	62
6	"	"	"	"	ムクロジ	70
7	"	"	"	"	ヤブツバキ	80
8	沖積段丘下埋没河川	"	縄文時代以前	"	カシ	67
9	"	"	"	"	ムクロジ	69
10	S D N 2	"	古墳時代	立木根	カシ	木1
11	"	"	"	流木	カシ	流木1
12	"	"	"	"	センダン?	流木2

大部分は付近の山野にふつうの木である。

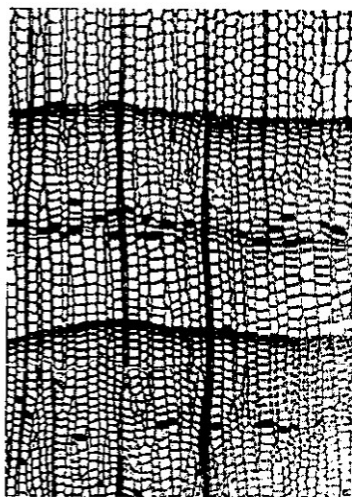
西浦橋遺跡の杭列の材

堺市西浦橋遺跡の杭列について、一部の材質を調べた。その結果は次の通りである。(表3)

表3 西浦橋遺跡出土材樹種一覧表

No.	樹種	No.	樹種	No.	樹種	No.	樹種	No.	樹種	No.	樹種
1	シイ	17	クスギ	33	シイ	49	アカメガシワ	65	シイ	81	シイ
2	"	18	シイ	34	"	50	シイ	66	"	82	サクラ
3	"	19	"	35	カシ	51	"	67	"	83	カシ
4	カシ	20	"	36	"	52	タカノツメ	68	クスギ	自然木(流木)	
5	シイ	21	"	37	シイ	53	シイ	69	シイ	1	ヒノキ
6	"	22	"	38	"	54	カシ	70	"	1'	カシ
7	"	23	"	39	"	55	シイ	71	"	2	クスノキ
8	"	24	"	40	"	56	"	72	タブノキ	3	クスノキ
9	"	25	"	41	カシ	57	"	73	シイ	4	ユズリハ
10	カシ	26	一	42	シイ	58	"	74	ヒノキ	5	カシ
11	シイ	27	カシ	43	"	59	一	75	一	6	ヒノキ
12	"	28	シイ	44	"	60	シイ	76	タブノキ	7	ヒノキ
13	カシ	29	"	45	"	61	"	77	クスギ	8	一
14	サクラ	30	カシ	46	"	62	ヒノキ	78	カシ	9	カシ
15	シイ	31	シイ	47	"	63	クスギ	79	シイ		"
16	"	32	カシ	48	アカメガシワ	64	シイ	80	ニレ		

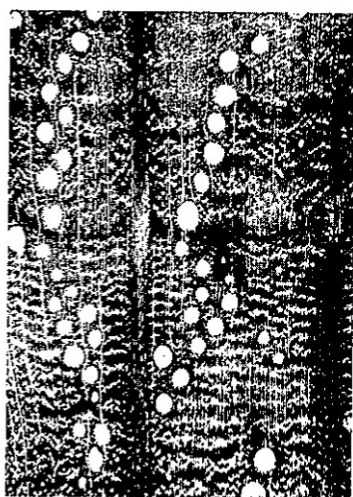
大部分はシイ(53本)で、次いでカシ(12本)クスギが多く、合わせて90%近くあり、他にヒノキ・ニレ・タブノキ・アカメガシワ・タカノツメが1又は2本ずつある。



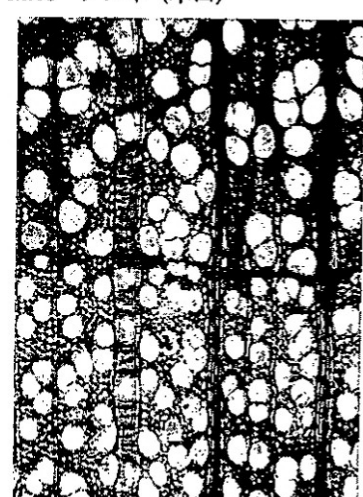
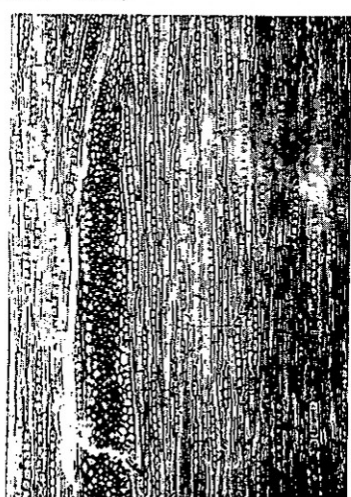
No.62 ヒノキ (木口・柁目)



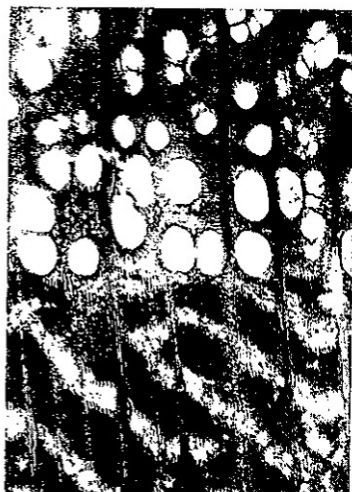
No.68 クヌギ (木口)



No.27 カシ (木口・板目)



No.82 サクラ (木口)



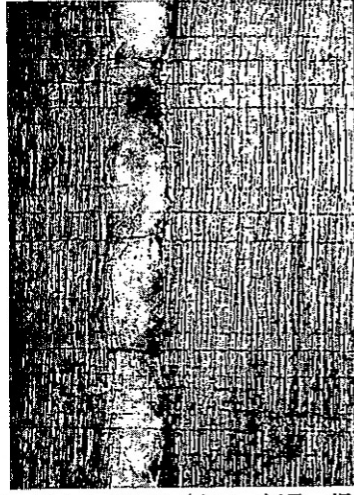
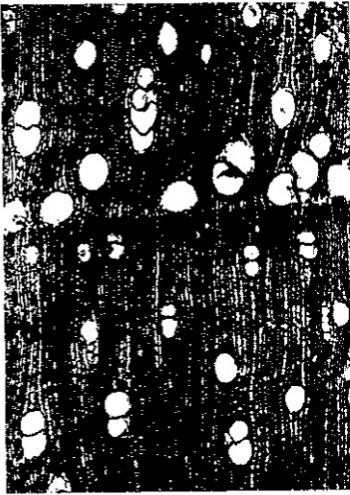
No.80 アキニレ (木口・板目)



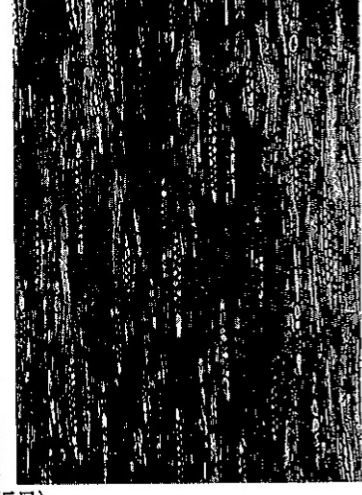
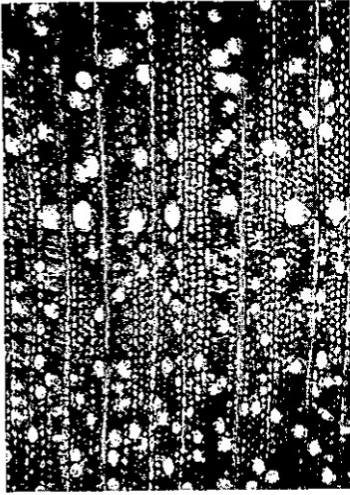
No.82 サクラ (板目)

西浦橋遺跡 杭列材

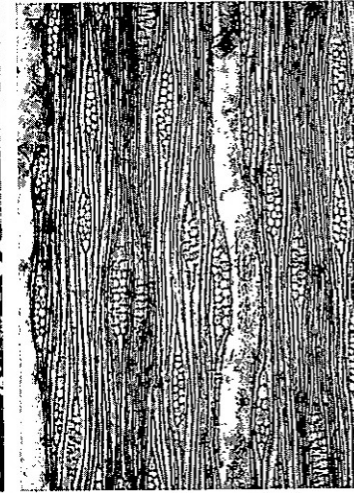
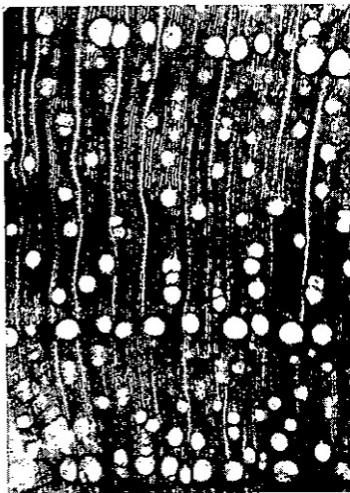
Plate II



No.43 アカメガシワ (木口・柁目・板目)

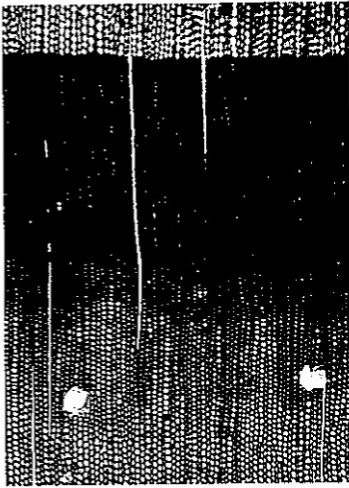


No.14 ヒメユズリハ? (木口・柁目・板目)

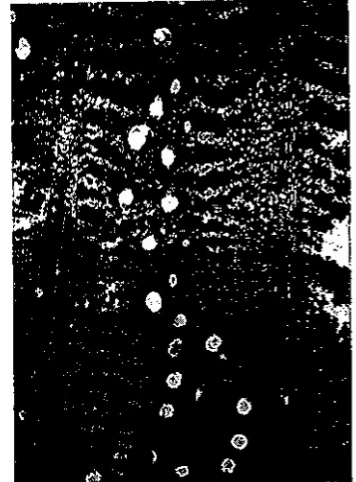


No.52 タカノツメ (木口・板目)

No.59 未定 (木口)



No. 5 マ ツ (木口・板目)



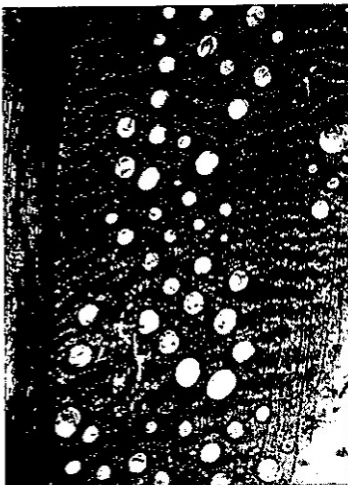
No. 8 カ シ (木口)



No.10 カ シ (木口・柁目)



No.11 カ シ (板目)



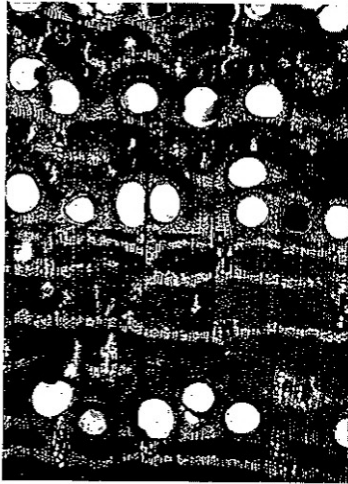
No.11 カ シ (木口)



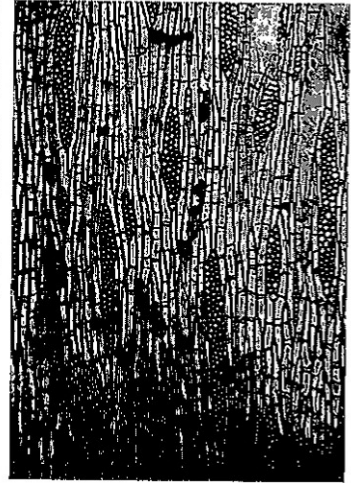
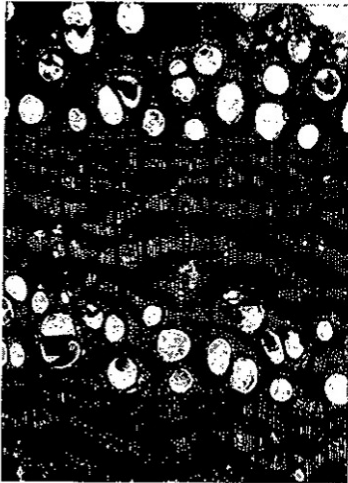
No. 2 ムクロジ (木口・板目)



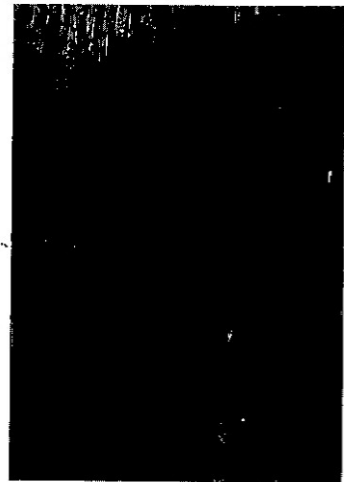
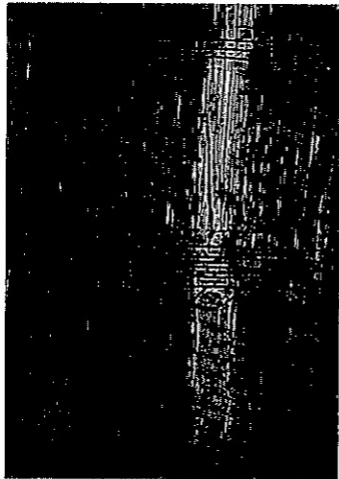
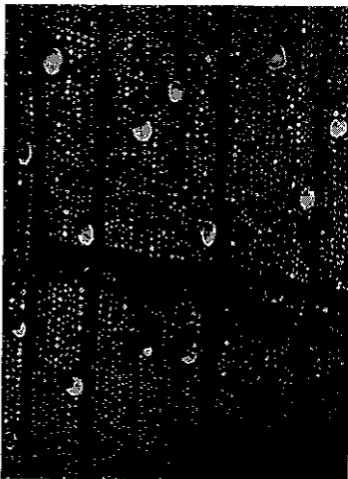
Plate IV



No. 4 ムクロジ (木口・柁目・板目)

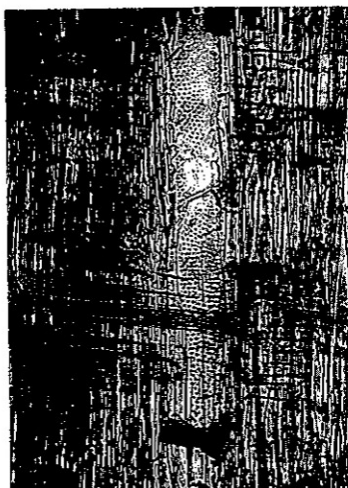
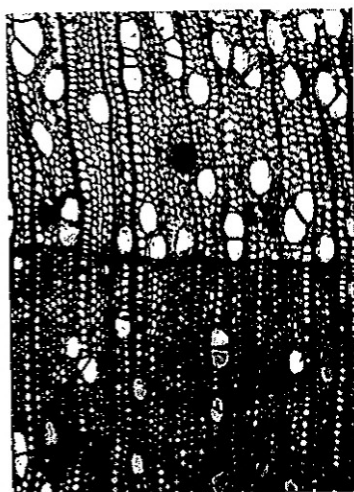


No. 6 ムクロジ (木口・柁目・板目)

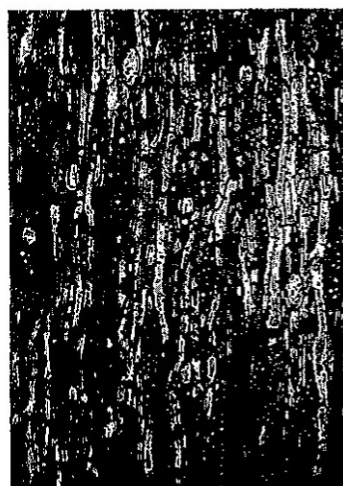
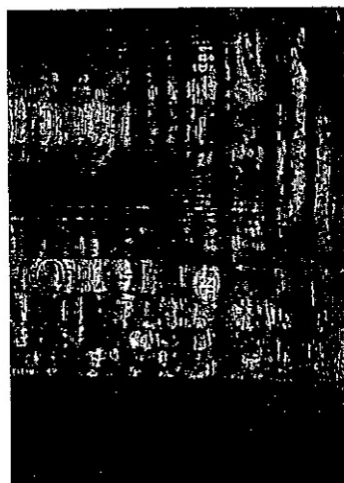
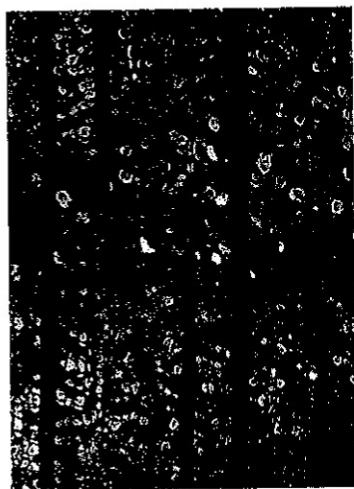


No. 1 カキ (木口・柁目・板目)

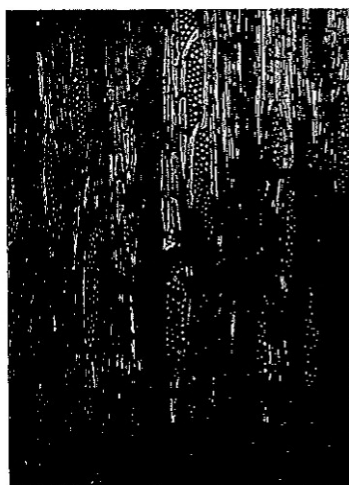
太平寺遺跡 出土材



No. 3 トチノキ (木口・柀目・板目)



No. 7 ヤブツバキ (木口・柀目・板目)



No.12 センダン (木口・柀目・板目)

太平寺遺跡 出土材



府道松原泉大津線関連
遺跡発掘調査報告書
I

西浦橋遺跡・菱木下遺跡
万崎池遺跡・太平寺遺跡

昭和59年3月31日発行

編集著作
発行者

財団法人 大阪文化財センター
大阪市城東区蒲生2丁目10番28号

印刷所

株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号

